

---

# 借金天国！？

K T E

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

借金天国！？

### 【Nコード】

N5113C

### 【作者名】

KTE

### 【あらすじ】

普通の高校生：仲野猛は母が死んで一人で生きてく事に…容姿端麗・超金持ちのクラスメイト：吉岡沙織に借金をしてから全ては狂い出す…

## P r o l o g u e (前書き)

これもまた前に書いた物だから、出来るだけ早く完結させていきます。

## Prologue

何なのよ、全く！ 私を呼び出すなんていい度胸じゃないの！  
この細くて綺麗な足が、疲れちゃうじゃない…

「仲野くん！」

「あ、吉岡さん。来てくれたんだね。」

「当たり前でしょ！？…友達との約束を、破るわけないわよ！」

「……………友達……………」

「で、話って何なの？…大事なこと？」

「うん。まあ屋上に呼び出すなんてベタな事して、気付いてると思  
うけどさ……………」

「???」

「素直に言っね。僕は…  
君が好きなんだ。」

「……………！」

「吉岡さんみたいな娘が、僕なんかに言われても迷惑だと思っけど  
……………」

「え？…あ、いや、その…そ、そうよ！ かなり迷惑なの！」

「うん、わかってた。君みたいな綺麗な娘には、相応しい人がいる  
はずだから……………」

「…そ、そんな…つもりじゃ……………」

「ただね、この気持ちを打ち明けたかっただけなんだ…だから、も  
う忘れてくれないかな？」

「……………」

「その…先に行くね。一緒に帰るわけにはいかないからさ。」

「……………」

「…吉岡さん？…もう行くよ？」

……仲野くんが……私を好きなんて……ただの友達じゃなかったの？

……仲野くん……か……

## P r o l o g u e (後書き)

わざわざ読んでいただきありがとうございます。次からは猛と沙織の目線を交代で描いていきますので、温かく見守ってあげてください。

## 第一話・現実はずライ！？（前書き）

軽い人物紹介になってます。次回もそんな感じだと思います…

## 第一話・現実はずライ！？

母さんが死んだ。まあ、何というか…正直辛い。だって母子家庭だったから、これからは一人で生活しなければならない。

母さんの葬儀を簡単に済ませた後、悲しんでる暇は無かったので僕は早速新しいバイトを探した。今までのバイトじゃ、とても生活できない。

新しいバイトは見つけたけど…ちゃんと学校に行けたのは、母さんが死んでから三週間後だった。

教室に入ると、皆の視線が気になってしまった。多分、担任か誰かが事情を説明していたのだろう。同情や憐れみの目で見られているので、凄く気持ち悪い。

誰にも話し掛けられないまま過ごしていると、聞き慣れた声が耳に届いてきた。

「よう、猛。やっと来たか…」

「…徹…久しぶり。」

「大変だったな…転校はするなよ？」

「しないって。親戚もいないから、する意味ないんだ。」

「…そっか…」

僕、なかのたけ仲野猛の唯一の親友である中谷徹は、なかたにとある僕の顔を見ながら心配そ



うに話している。やはり担任から聞いたそうだ。

彼と僕は170cmそこそこ、55Kg前後と身長体重が一緒で、出席番号も並んでいるから後ろから見ると見間違っぐらい似ていた。顔は…僕の勝ちかな？ 自己評価だから、そこも似たり寄ったりだろう。簡単に言えば、二人とも普通の高校生である。

「…で、何とか一人で大丈夫なのか？」

「うん。毎日バイトになると思うけど…」

「そうか。俺と違って、お前は頭いいのになあ…神は残酷だぜ。」

僕は勉強が好きだ。お金がかからないし、何より母さんが喜んでくれた。そのおかげで成績も上がったのは、当たり前なのかも知れない。徹と違う点は、そこだけだ。

ちなみに徹はかなりのものらしい。この前、追試という地獄があると言っていた。一度見てみたいとは思わないけど。

「そうだよなあ…金が必要なんだよなあ…」

「うん、頑張つて稼ぐよ。大学にも行きたいしさ…」

「よっしゃ、お昼は奢つてやる！」

「と、徹……ジュースもいいかな？」

「アホか！ 美味しい水道水で我慢しろ！」

「…塩素入りじゃん。」

「アハハ！…図々しくてお前らしいよ。」

徹は笑つてた。僕としても、気を使ってもらうよりは笑ってほしい。そつえば母さんも、昔から言つてたっけ…

【辛い時こそ笑いなさい。人生、笑えば何とかなるのよ！】

母さんはいつも笑つてた。笑顔が似合うというより、笑顔しか見た

事ないかもしれない。素敵な人だった…

…ねえ、母さん…ずっと笑顔なのは、それだけ辛かったからなの？  
…僕が…たくさん負担を掛けてたんだね…

「……………猛？…泣いてるのか？」

「あ…本当だ、水分補給してくるよ。」

「…ああ、たつぷり飲んでこい。」

いけない、いけない…少しでも気を緩めると、涙が止まらなくなる…  
僕はトイレで顔を洗い、鏡の前で自分を一喝した。

【しっかりしろ！】

頬をバシッ！　と叩くと、痛くてまた涙が出てきた。強すぎたらしい…

赤くなった頬を摩りながら、僕はトイレを後にした。すると、教室の方から一人の女の子が歩いて来た。

「あ…吉岡さん、久しぶり。」

「な、仲野くん…大変だったらしいわね。」

「うーん…その話はやめようよ。皆が聞くから、暗くなっちゃうし…」

「そうよね…気が利かなくて、ごめんなさい。」

彼女は、よしおかさおり吉岡沙織さん。僕と親しく話す、ただ一人の女の子だ。

僕は彼女が好きだ。まず惹かれたのは、その美しさだった。よくわからないけど、【美人】という言葉は彼女のためにあると思っている。

背は高く、僕は若干負けていた。体重まではさすがに教えてくれな

かったけど、スレンダーな体つきからすると標準以下だろう。

それに何といっても、顔が魅力的だ。切れ長の目は性格がきつそうに見えるが、美しさをより引き立てている。眉は丁寧に整えてあり、その唇には人を魅了する魔力がある。小さくキュツとした唇で、キスをされたら全てを忘れそうだ…

「…何でそんなに、見つめているのかしら？」

「あ、ごめんね。吉岡さんがあまりにも素敵だったから、時間を忘れてたよ。」

「素敵だなんて…今更そんな当たり前な事を、口に出すまでも無いじゃないの。」

彼女が肩甲骨まで伸びた綺麗な黒い髪を、かきあげながら言った。その姿もまた、絵画に出てくる女神のようだ。

「…やっぱりダメだ。これ以上ないぐらい綺麗で、話していると少し照れてくるよ。」

「あら、ありがと。仲野くんは素直で正直ね。」

…さつきから気付いてると思うけど、彼女は自分の美しさを否定しない。始めは引いていたけど、すぐに仕方ないと思った。だって…本当に素敵なもの。あの容姿じゃあ、否定するほうがおかしいに決まってる。

「…そろそろ時間ね、先に教室に戻るから。」

「うん、わざわざありがと。」

「いいのよ、気にしないで。」

来た廊下に戻る後ろ姿に、僕はまだ視線を送っている。

どうやら彼女に、完全に参っているみたいだ。

この気持ちを、一度と伝えるつもりは無いんだけども…

## 第一話・現実はずライ！？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。次回は沙織の目線で人物紹介をしていきます。本文に入るのは、いつになることやら…

## 第二話・私と彼の距離（前書き）

少し書き方を工夫しました。けっこう読みやすくなったと思います  
：

## 第二話・私と彼の距離

…仲野くん、目が赤くなってた。本当は悲しいんだわ…

私は教室に帰ると、仲野くんが無理してることを心配している。

「あれ、沙織？ トイレに行っただんじゃないの？」

「そんなのキャンセルよ、キャンセル。」

「トイレをキャンセルって…おかしくない？」

不思議そうな目で見つめている彼女は、なつながれいな松永玲奈といって…今は友達とだけ、説明しておくわ。

ふいに玲奈が、目を反らした。

気付かなかったが、再び私を見つめた玲奈の目は…小悪魔モードになっていた。

「…ふん…キャンセルねえ…」

「何よその目は。言いたいことは、ハッキリ言いなさいよ。」

「なら言っけど、トイレに仲野くんがいたんじゃない？」

「……！ な、何で知ってんのよ!？」

「トイレの方から、仲野くんが来たんだもん。簡単な推理よ。」

う、うう…よりによって玲奈にバレるとは…

目の前の小悪魔は、私に尋問のような聞き方で問い詰めてきた…

「さあ、正直に言いなさい。トイレをキャンセルしたのは、一体何が原因なの!？」

「げ、原因って…」

「どうなの!？ ネタはあがってるわよ!」

「し、知らないわ。気分でキャンセルしただけよ!」

私は何かを否定するように発言した。

自分からわざわざ話したくはないし、玲奈に話すつもりもない。

ここは二時間サスペンスの犯人の如く、黙秘権を存分に発揮した。

「気分？ 確かに、気分で行かなかったのかもしれない。じゃあ聞き方を変えてあげるわ。どうして、気分が変わったのかしら？」

「……………」

「トイレに行きたい人間が、行きたなくなる気分になったのは、



どうしてかって聞いてるの！…答えなさい！！！」

「…刑事さん…私はこれ以上、話すつもりはないわ…」

やや勝ち誇った言い方で、いつの間にか立ち上がっていた二セ刑事に呟いた。

ムキになるのに疲れたのか、刑事さんは優しく語りだした。

「ふう…もう、自供は諦めるわ。うちの署の、名警部を呼ぶしかないわね。」

「…警部？」

「仲野くん！ 沙織が呼んでるから、ちょっと来てくれる…!？」  
「バ、バカ！！！」

人を殺すような目で玲奈を睨み付けた。

玲奈は視線を反らして、こっちへ来た仲野くんに挨拶している。

仲野くんは、意味がわからないという顔で刑事に指示されている。

指示されたまま座ると、仲野くんは最初から決められた台詞を淡々と喋りだした。

「えーっと、吉岡さん？隠し事があるなら、素直に話した方が身のためだぞ？」

「仲野くんやめて……」

「松永さん、吉岡さんが嫌がって………全て話すなら、本人には黙っとしてやる？……だそうです。」

「……自供するわよ。」

仲野くんは私に謝りながら、自分の席に戻っていった。

台詞を書いていたノートを閉じた玲奈は、沙織の肩に手を置いてまた話し出す……

「……田舎のお袋さんも、これで幸せになるから。」

「あんたが悪いんでしょ！ 田舎に未練なんてないわよ！」

「強がつてると、また呼ぶわよ？」

「……クッ！」

仲野くんの席に向かって、親指で指している。

何でこんな女に、あんなこと話したんだろう……

「で、話を戻すわよ？ トイレに行ったのはいいけど、男子トイレから仲野くんが出て来たので、トイレに入るのが恥ずかしくなった。」

「…はい。」

「女の子として、トイレに入る所を仲野くんに見られなくなかった。」

「…間違いありません。」

「つまり、あなたは仲野くんのが…」

「わー！…！」

「…こんな所では言わないでよ…誰かに聞かれたら、自殺してやるから…」

玲奈はニヤニヤしている。私が今の反応をすると知ってて、言うてるみたいだ。

「わかってるわよ。でも、確認のためにも…沙織の口から本音が聞きたいなあ。」

「い、言えるわけないでしょ！」

「…あつそ。仲野くん！ 実はねー！ さおムガニフツ！…」

私はギリギリのタイミングで、玲奈の口を塞いだ。

本当は息の根を止めたかったが、友人をこの手で始末するのはさす

がに気が引けるので、13がつくスナイパーを雇うことにして離れた。

玲奈は懲りずに、また私の口から聞き出そうとしてきた。

「しつこい、玲奈!」

「耳元でいいからお願い! 沙織から、勇気を分けてほしいの。」

必死にすがってくる玲奈から【勇気】という言葉聞いて、私は心を揺さぶられた。

玲奈の耳に手を添えて、口を出来るだけ近づけて呟いた…

…仲野くんが…大好き…

別に話す必要はなかったのだが、どこか自分でも口にしたい思いだったのかもしれない。

玲奈は私の顔を見つめ、私よりも恥ずかしそうにしている。

もちろん私は、完熟トマト並に顔を赤くしていたのだけれど…

「今のあんたなら、世の男共を手玉に出来るぐらいカワイイのに。」

「知らないわよ…男なんかに興味ないもの…」

「仲野くん、一応男だよ？」

「…あ…」

玲奈の発言に、また顔が熱くなるのを感じた。

他の男に興味が無いのは、仲野くんしか意識していなかったのだと気付かされたからだ。

まさか、ここまで好きになってたなんて…

「自分の気持ちを、素直に伝えたら？」

「…出来る訳無いでしょ…」

「いいじゃん！ きっと今でも、沙織の事を好きだと思うよ？」

「…もし、今でも好きでいてくれてたら…」

考えれば考えるほど、私は自分が嫌になってくる。

そつ、私は彼に告白されたことがあるのだ。

とても嬉しかったのに、自分の気持ちに気付いてなかった私は…彼を傷つけてしまった。

「…私は一度、仲野くんをフツてるの。それにお母さんが死んだばっかりで、こんな話が出るわけじゃないじゃない。」

「逆にチャンスよ！ 私が支えになってあげる…みたいな感じで。」

「…そんなの…卑怯すぎるわよ…」

私は軽く、仲野くんを見つめた。

楽しげに話している姿が悲しげで…素敵だった。



## 第二話・私と彼の距離（後書き）

まだ学校の中、しかもHRも迎えていません…どうなるんでしょう？では、また次回も早めに載せていきたいと思っています。



### 第三話・心のゆとり

「あつちの奴ら、うるさくないか？」

「そうだね、なんか青春って感じだよ。」

「そうか？ ただの迷惑なんだけどなあ……」

徹は不機嫌な顔で、吉岡さん達を見つめている。

僕としては、はしゃいでる彼女達を羨ましく思ってしまう。

というより…吉岡さんが笑っているだけで嬉しくなってしまうから、他の人が暴れてると…きつと不愉快なんだろう。

彼女達を笑顔で見つめている僕に、徹は軽く疑問を投げかけてきた。

「なあ猛、吉岡のどこがいいんだ？」

「…え？…」

「確かに他の奴と比べたら、かなりイケてるのはわかるけどよ…それでも、あの性格は無いだろ？」

あの性格？      徹は一体、何を言ってるんだろっ…

吉岡さんは優しいし、僕に気を使ってくれたりもする。

そんな彼女の性格を否定するなんて…僕は少し、怒りを覚えている。

だからこそ僕は、冷静に…そして真剣に質問に答えた。

「…徹は、吉岡さんの何をわかってるの？」

「何をつて…言われてもよ…」

「僕は吉岡さんと話していると、とっても楽しい。だから好きになった。」

僕は、吉岡さんの良さを伝えようとせず…自分の気持ちを話した。

そんな僕に、徹は納得がいかない様子だ。

「話すと楽しいだけで、人を好きになったりするか？」

「それだけで、人を好きになっただらダメ？」

「いや、それは…」

「徹とだって、一緒にいて楽しいから友達になっただ。徹は、どうして僕と友達なの？ 特別な理由ある？」

軽く黙った徹に、理由はないと思う。

普通はそうだ、友達を作るのに理由なんかいらぬ。

理由なく付き合える関係、それが友達…僕の場合は恋もそんな感じ  
なだけだ。

それからしばらくして、徹は謝ってきた。

全然気にしてないから…と語りかけた時に、担任が教室に入るのを  
確認した。

先生が近づいて来たせいで、僕はまた…母さんの死を思い出してい  
た…

………最後の予鈴。

久しぶりの授業は、何が楽しいかわからなかったけど…満足した。

なんだかんだでお昼は、飲み物までおごってもらった…徹に国民栄  
誉賞を贈りたい。

明日からは弁当を作るつもりだから、学食は今日で最後だろう。

どうせなら、吉岡さんと一緒に食べたかったなあ…

くだらない事を考えている僕に、徹が不意に話し掛ける。

「おい、バイトじゃないのか？」

「…あ！」

「5時からって言ってたろ？」

「ごめん！　すごい助かった！」

教科書は置きっぱなしだから、空のカバンを持って教室から出る。

まだ急ぐ時間でもないが、早めにバイト先に入りたかった。

下校途中で吉岡さん達を見かけて、追い越しながら挨拶をする。

…やっぱり、吉岡さんは素敵だ…もちろん、隣の松永さんも捨てたものではないけど。

僕は吉岡さんの顔を思いだしながら、バイト先に向かっていた。

真新しい喫茶店：名前はライラック。

カウンターと、テーブル席が四つの普通の喫茶店だ。

駅から離れているが、住宅街と商店街の間にあるので…結構いい立地条件だと思う。

僕はここでバイトさせてもらっている。

一ヶ月前に出来たばかりで、【至急バイト募集】の張り紙を見て応募した。

本当は雇うつもりはなかったらしく、予定より忙しくなったので仕方なく募集したそうだ。

「ありがとうございますー！」

「…ふう…：やっとなね、猛くん。」

「そんな言い方酷いですよ、真理絵さん。」

この女性は、辻堂真理絵さん…ライラックの店員で、マスターの娘さんだ。

マスターが退職金で喫茶店を開くと知って、自分も会社を辞めて手

伝っているそうだ。

朝はマスターと奥さん、そして夜は真理絵さんと僕という組み合わせで店を切り盛りしている。

…僕は完全に、雑用係だけど…

「え〜！？ だってさ、コーヒーとケーキで二時間よ！？ 二時間も粘られたのよ！？」

「いいじゃないですか。あの人達が常連になれば、次はたくさん注文してくれますよ。」

「猛くんは時給だからね、そんな事が言えるのよ…はぁ…忙しい上に売上が無いなんて…」

真理絵さんは、文字通り頭を抱えている。

その姿が、とても可愛く見えた。

そう、カワイイ…この人にはそれが似合う。

髪は茶色のショートで、顔も25才とは思えない童顔…目がクリッとしてて、唇はとろけるぐらい柔らかそうなプルップルなので、もう食べてしまいたい…

……………もしかしたら僕は案外、唇フェチかもしれない。

「あ、そうだ。猛くん…コーヒー豆、お願い！」

「またですか？ 脚立を買ってくださいよ…」

「うちにそんな予算は無いのです。」

「…はいはい、わかりましたよ。えーっと…どれと、どれですか？」  
「赤と青、あとは手前に出しといてね。」

真理絵さんは背が小さいので、上の戸棚に手が届かない。

身長を聞いたら凄く怒られた…気にしているのだろう。

まあ、大体150cmくらいだと思う。

他に体の特徴といえば…胸が大きい。

「…キヤー！ 猛くんのエッチ！」

「あ！ ごめんなさい！」

「そ、そんなヤラシイ目で見るなんて…まさか、体が目的!？」

「ち、違いますよ！」

「ふふ…冗談よ。」

真理絵さんは、クスクスと笑っている。

やっぱり大人の女性は、こっちよりも何枚も上手らしい。

照れながら掃除をしていると、ドアの鈴が鳴り響いて新しいお客さんが入ってきた。

「いらっしやいませー！ 猛くん、お水。」

「あ、はい！」

…今日も忙しそうだ…

僕は冷たい水を手に持ち、お客さんに対して営業スマイルで話し掛けた。

「ご注文は、何になされますか？」

…時刻は明日になっている。



毎日これが続くのか…と考えていても仕方ない。

家の鍵を開け、電気をつける事もなく布団に入る。

…明日は5時に起きて、お風呂に入って、弁当を作って………

僕は朝のスケジュールを確認しながら…深い眠りに落ちていった…

……

### 第三話・心のゆとり（後書き）

毎度読んでいただいて、本当にありがとうございます。次回も日常を書きたいと思ってるので、また読んでいただけたら嬉しい限ります。

#### 第四話・優しいパパ？（前書き）

そつえば設定は夏です。では、続きをどうぞ。

#### 第四話・優しいパパ？

最近、仲野くんと話してない…

私は玲奈と歩く帰り道で、仲野くんが通ることを祈り続けていた。

最近、彼は放課後すぐ帰ってしまっし…休憩時間は熟睡している。

私が起こすのも変なので、結局この一週間は全然話せていない。

彼が今、凄く大変なのは知ってるけど…ゆっくり話がしたいなあ…

一人で物思いに耽っている私に氣を使ってかどうかは知らないけど、玲奈はくだらない話ばかりしていた。

「…で、なんと由美ちゃんが犯人だったんだって！　優等生ぶってる顔の裏で、そんな事してるなんて怖いよね！？」

「…へ…」

「沙織、ちゃんと聞いてるの？」

「……………ほ…」

深いため息をつく玲奈は、軽く呆れ気味である。

一方、返事が全て八行になった私かというと…

「は……」

「ねえ……いい加減に仲野くんのこと、少し忘れたら？」

「仲野くん……!?!?」

仲野くんという言葉に私の顔は、ピシッ！　と音を起てて表情を変える。

今まで締まりのなかった顔は、一瞬で【美少女】の私になった。

「…………どこ!?!?」

「……はあ？」

「仲野くんよ!?!?ねえ、何処なの!?!?」

「……アンタさ、変わり身早すぎ。」

もう一度、ため息をつく玲奈を見る限り……今度はより深く呆れている。

仲野くんがいないことに気付くと、私の顔はまた緩んだ。

お家まで、あと500M……二人のやり取りは昨日とほとんど変わらない……

お家まで、残り100M…家の塀に着く。

私のお家は、ここからがかなり長い。

門の前まで来ると、玲奈は話し方をがらりと変えて喋りだす。

「…お嬢様がお帰りです。」

インターホンに向かってそう語ると、無駄に重そうな門はゆっくり開いた。

お家に入ってまず気付くのは、敷地の広さより…警備の数だ。

美しい庭には似合わない監視カメラが数十台と、目を合わせるのもツライ…黒いスーツのお兄さんが10人程。

…ハッキリ言って、私はこの人達が嫌いだ。

だって怖いんだもん。

自分のお家に違和感を持ちながら、前を歩く玲奈についていく。

玄関に入ると、目の前には落ちてきたら痛い痛そうなシャンデリアがある。

他にも、絵やら壺やらがあるが興味ないから無視していこう。

玲奈が立ち止まり目の前の部屋のドアを開けて、私に軽く微笑む。

「お入り下さい、お嬢様。」

「…ありがとう。」

私の御礼に、仕事ですからと謙遜する玲奈。

そう、玲奈は友達の前にボディーガードなのだ。

中学生までは、怖いお兄さんが付いていたんだけど…はっきり言って迷惑だった。

さすがにパパもおかしいと気付いて、同い年の女の子をボディーガードに付けてくれた…玲奈である。

玲奈の見た目は普通の高校生だけど、合気道五段の腕前だ。

年齢の関係で正式には違うらしいが、最強の女子高生かもしれない。最初こそぎこちない関係だったけど今ではもう………っと、不意にドアを叩く音がした。

「…お嬢様、玲奈です。」

「まだ着替え中。」

「5分後に、またお声をおかけします。」

急いで着替えた私は、制服をハンガーにかけてから玲奈を呼ぶ。

「もういいわよ。」

「失礼します。」

白いスーツを着けた玲奈がいた。

私はこの姿と、制服しか見たことがない。

休みが無くて、かわいそうだと思っていた私の心は…ドアが閉まった途端に裏切られた。



「いや、アツツイわね。」

「…え?…」

「あんた金持ちなんだから、クーラーぐらいつけなさいよ。」

「…ね、ねえ玲奈?…」

「あ、そうだ。確かここにスナック菓子があつたはず…」

「ちよつと玲奈!!!」

部屋に入るなりジャケットを脱いだ玲奈は、片手にエアコンのリモコンを持ちながら反対の手でお菓子を物色している。

いつもの光景ながら、非常にイライラする。

全く気にしてない玲奈は、顎で何かを指示している。

「なによ?」

「だーかーらー、テレビつけなさいってーの…いい加減、それぐらいわかってよね。」

「…クビにしてやるわ。」

「いいよー、仲野くんにバラすからね。」

ベットに横たわりながら、玲奈はこっちを見ようともしせずに即答す

る。

私は仕方なく、リモコンでテレビをつけた。

チャンネルが違ったらしく、玲奈はチャンネルを変えろと指でゼスチャーしている。

怒りで我を忘れて気付いた時には…私はリモコンを、玲奈の頭めがけて投げていた。

球種は高速スライダー、そして見事に命中。

取組み合いの最中です、しばらくお待ち下さい。

やはり強い…私はベットで羽交い締めを食らっていた。

…仕方なくタップして、納得がいかないが…玲奈に謝った。

「…手加減してよね。」

「手加減して勝ったら、沙織は嬉しい？」

「…余計にイライラする。」

「素直でよろしい。」

………少しの沈黙の後、二人して笑いだした。

何が楽しいかはわからない…でも、今は凄く笑いたい気分だった。

しばらくすると、玲奈の携帯が鳴っている事に気付いた。

また話し方が真面目になったところを見ると、私に関係のある電話なんだろう。

あれ？ 急に笑顔になった…しかも電話しながら、チラチラこっちを見ている。

電話を切ると、玲奈は私に嬉しそうに話した。

「御主人様が、今日は早く帰られるそうです！」

「え！？ パパが！？…じゃあ今日の御飯はパパも一緒なの！？」

「はい！」

跳びはねて喜んでる私を、玲奈は微笑みながら見つめている。

パパと食事なんて二ヶ月ぶりだわ…

私はすぐにお風呂に入り、ディナーで着る洋服を玲奈と一緒に選び始める。

もちろん、パパに喜んで貰うためだ。

結局はお気に入りの白いドレスに決まったが、楽しみで仕方ない私はパパが帰るのを、リビングで待つ事にした。

「素敵なドレスじゃないか。」

「もー！ パパが買ってくれたのよ！？」

「あ、そうだったねえ。すまん沙織…」

パパは忙しいのに、私のためにわざわざ時間を作ってくれてる。

そんなパパが、私は好き！　でも未だに私を子供扱いするのは…  
ちよつとやめてほしい。

御飯を食べながら、パパは最近の様子を聞いてくる。

私はいっぱい話した。

学校の成績、友達、玲奈の事やお家のお手伝いさんの話まで…この  
二ヶ月の話をたくさんした。

さすがに、仲野くんの話は出来なかったけど。

楽しい時間が過ぎ、パパは会社に戻るようになった。

「…おお、そうだ。来月は沙織の誕生日だったね…なにか、欲しい  
ものはあるかい？」

今の言葉を聞いて、頭の中を仲野くんが占領している。

首を左右に激しく振って、いい子のセリフを喋りだした。

「…出来たら、またパパと食事したいなあ…」  
「…沙織…こっちおいで…」

パパは私を、優しく抱きしめてくれた。

凄く嬉しかったけど、私は違うことを考えてしまっ…

仲野くんだったらなあ…

パパとお別れして、自分の部屋に戻った。

明日はきっと、仲野くんに話しかけよう。

私はパジャマに着替えつつ、誕生日プレゼントが仲野くんだった時の想像をして赤面していた。

「…玲奈。」

「はい、御主人様。」

「沙織の様子がおかしいのだが、何か知らないか？」

玲奈は少し躊躇したが、お世話になってる御主人様に嘘はつけなかった。

沙織が恋をしていること、その相手が複雑な事情を抱えていること、二人が両想いということまで話した。

そして最後に友達として…

「…あの二人を、暖かく見守ってくれませんか？」  
「……………」

御主人様は5分程悩み、玲奈に聞いた…

「娘のために、何をしたらいいと思う？」

その言葉を聞いた瞬間、玲奈は最高のプレゼントの説明を始めた。

沙織はまだ、軽い妄想をしている。



『…仲野くん…』

『吉岡さん…好きだよ。』

『ダメ…名前で呼んでほしいの…』

『じゃあ、同時に名前で呼び合おう。せーのっ！…』

『猛くん！』………』

『あ！ 仲野くんずるい！』

『だって、少し恥ずかしいよ…』

『もー！ 名前を呼ぶまで、許してアゲナイ！』

『えゝ！？ 吉岡さん、怒らないでよ…』

『…ふん！』

『わかったよ…僕の負けだ。』

『じゃあ呼んで…早く…』

『………さ』

「お嬢様、玲奈です。」

あ…あと5秒で呼んでもらえたのに…

私はとりあえず文句を言うために、玲奈を部屋に入れた。

「あんたのせいだ！」

「はあ？」

「…いや、何でもないわ。」

冷静に考えれば、妄想してたなんて言えるはずがない。

私は、喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

落ち着きを取り戻して、玲奈に用事を聞いた。

「別に用事はないの。」

「…そう。」

「ただ、友達として…」

そこまで言うと、玲奈は黙ってしまふ。

気になってはいたけど、玲奈が黙っているのだから…あえて聞かなかった。

やっぱりいいと言って、玲奈は自分の部屋に帰ってしまった。

…どこか不安で、けれど嫌な顔ではない…

ま、気にしても仕方がないので…夢の中で仲野くんが出てくることを期待しつつ、私はそっと目を閉じた…

夢に出てきたかどうかは、乙女の秘密といつことで………

#### 第四話・優しいパパ？（後書き）

そろそろ話が動き始めます。早く、二人を結ばせたいです…

## 第五話・唯一の財産（前書き）

はい、作者です。一つお願いがあります。誰か、感想か批評を書いてもらえませんか？作品の良し悪しや、こうすれば面白くなるとかなにより励みにしたいので、お願い致します。

## 第五話・唯一の財産

…あゝ…もう朝だ…

携帯のアラームで起きると、僕はすぐにお風呂場に向かう…お風呂といってもユニットバスだし、寝ている所から五歩で着く。

一通り体を洗うと、無駄遣いを防ぐためにお湯のスイッチは切る。

経験上、一〇二分はお湯が出るからだ。

水になるギリギリで蛇口を捻る…少し水を浴びたので、冬までには完璧にタイミングを覚えたい。

僕はすぐに制服に着替え、弁当の準備を始める。

出来るだけ冷凍食品を使わずに、色合いの地味な弁当が出来上がる。

僕は基本的に朝は食べないので、すぐ洗濯に取り掛かった。

洗濯機の中の物を取り出し、新しい汚れ物を入れて回しだす。

取り出した洗濯物を早速干し始め、それが終わると僕の家事は終了だ。

…母さんは、これを毎日してたんだなあ…

改めて感謝して、部屋の鍵をかけて学校に向かった。

この一ヶ月間、機械のようにこのリズムで過ごしている。

僕は今、ワンルームに住んでいる。

正確には、1Kユニットバス付きだが…まあ狭いのでどっちでもいい。

…実は、賃貸じゃない。

母さんが死んで保険金が入ったけど、前のアパートじゃ家賃が高い…僕は手頃な物件を探し、今のマンションを見つけた。

駅から徒歩40分、学校までは30分、バイト先まで20分、という素晴らしい環境だ。

しかし世の中甘くない、賃貸ではなかったのだ。

不動産屋から話を聞くと、頭金を出せば月々三万でいいと言っただ。

悩みに悩んで購入を決めた、だから…あれは僕の自慢の部屋だ。

すぐ隣に高層マンションがあり、太陽が挨拶してくれないのは残念だったけど…

教室に着くと、クラスメイトは数人しかいなかった。

それもそうだ…まだ7時半、授業まで一時間以上ある。

教室にいるのは、きっと進学希望の人だろう…朝から真面目に勉強している。

…え？　僕？…僕は目的が違った。

鞆を置いて、忘れ物等を確認すると………寝た。

ギリギリまで家で寝るより、遅刻の心配をせずに教室で寝よう…人生での最高の答えだ。

制服の三番目までのボタンを外すして、僕は頭を伏せた。

徹には話を付けてるから、担任が来るまで…夢の中へ………



「…仲野くん。」

……ん？…この声は…確か…

僕は顔を上げて、声の主を探す。

…あれ？…誰もいない…

「後ろよ、後ろ。」

「ほえ？…あ、吉岡さん…おはよう。」

「うん、おはよう。」

なぜか後ろの席に、吉岡さんが座っていた。

制服のボタンを閉めて、僕は吉岡さんの方へ体を向ける。

…おかしいな…吉岡さんは、いつも遅いのに…

軽い疑問も含めて、僕は吉岡さんに話し掛けた。

「今日は早いんだね。」

「…そうね、早く来たつもりだから。」

「松永さんは一緒じゃないの？」

「一緒よ、ほら。」

松永さんもこつちを見ている…なぜか不安そうな目で微笑んでいた。前に吉岡さんから話を聞いて、松永さんが使用人みたいな事をしていているというのは知っていた。

「松永さんも一緒にの所を見ると、何かあるの？」

「まあそんな感じね。」

「そつかあ…吉岡さんも大変だね。」

「そつでもないわよ。」

…ああ…幸せだ…

朝から吉岡さんと話せて、僕は久しぶりに学校を楽しんでいる。感じてい

もしかしたら、寝るより疲れがとれてるかもしれない。

「…ねえ、仲野くん。」

「ん？」

「バイトは頑張ってる？」

「ああ、バイトね…一応頑張ってるよ。」

「…そう。」

吉岡さんは質問をしては黙り、質問しては黙り…を繰り返している。

僕と話してても、楽しくないのだろうか…

どうにかして、いつものように褒めたいけど…何かきっかけが欲しい。

彼女の顔を見つめながら、僕は悩んでいる…

「…仲野くんのバイト先って、学校の近くなの？」

「うん、歩いて30分はかからないよ。」

「ふーん…一度、行ってもいいかしら？」

…な……………何だって!?

よ、吉岡さんがわざわざ…僕のバイト先に？

喜びで5ミリほど体が浮き上がったが、焦らずに対応した。

「もちろん、大歓迎だよ！」

「ふふ、サービスしてよね？」

「コーヒーなら、いくらでもご馳走してあげる！」

「へっ…仲野くんがいてくれるの？」

「違うよ、真理絵さんっていつてね…」

「……………真理絵…さん？」

一瞬、吉岡さんの表情が凍りついた…

いつもならそんな彼女の変化を見逃す僕ではないが、今は違った…  
喜びで浮かれている。

止めればいいものを、僕は歯止めが効かなくなっていた…

「バイト先のマスターの娘さんでね…いつもは僕と二人っきりなんだけど…」

「…二人っきり…」

「店の棚に手が届かないぐらい、背が小さくて…カワイイんだよ。」

「…かわ…いい…」

「けど不思議な雰囲気を持つてる人で…あれが、大人の女性の魅力？　って感じちゃうんだよね。」

「……………」

…えーっと…はい、バカでした。

気付いた時には、明らかに表情が暗くなった彼女が俯いている。

一応、言い訳をするなら…僕は嘘をついてない。

でも、吉岡さんが不機嫌になることはわかってたはずなのに…

一度、吉岡さんの前で…松永さんを褒めたことがある。

べつに深い意味はない…ただ褒めただけ。

その後、吉岡さんは僕には普通だったけど…松永さんとは、三日間も口を聞かなかったらしい。

それからは出来るだけ、吉岡さんの前で女の子を褒めなかったのに…

もう一度言います。

はい、僕がバカでした。

「……………」

「あの、さ…その…」

「……………」

「吉岡さんの方が、何倍も素敵だよ！」  
「……………」

…ダメだ、反応がない…

吉岡さんはゆっくり立ち上がり、自分の席に戻った。

…あゝあ…せっかく話せたのに…

僕は彼女を傷つけてしまったのだろう。

とれかけていた疲れが、どっと押し寄せた。

僕はとりあえず寝て、今の現実を忘れることにした。

また目を閉じて、夢の中へ…

……………眠れない……………

## 第五話・唯一の財産（後書き）

次回は喫茶店がメインで進みます。沙織は本当に素直になれませんか。自分次第ですけど。

## 第六話・嫉妬こそ、恋！（前書き）

えーっと…ちょっとグダグダになってしまいました。わかりにくかったらすいません…



## 第六話・嫉妬こそ、恋！

………何なのよ…

…何で私がイライラするのよ…

…別にいいじゃないの…バイト先のお姉さんが、カワイイだけなんだから…

…仲野くんのバイト先の…背が小さくてカワイイ…大人の女性…

………カワイイ…

…大人の…女性…

「うわーーーーー！！！！！！！！！！」

私は自分の部屋で、喉を枯らす勢いで叫んだ。

…あ、あ、あ…仲野くん…仲野くん…

私の声を聞いて、玲奈や使用人達が、部屋に駆け付けた。

…ベットに座って、小声で仲野くんを呼び続けている私…

部屋を開けた玲奈は、その様子から大体の予想は出来た。

使用人に説明して、玲奈一人残しそれぞれ自分の持ち場に戻った。

放心状態の私の両肩に、そつと手を置く玲奈。

一瞬、ビクッ！      と反応したが…動く気がしない。

ため息を一つして、玲奈は語り出した。

「…アンタさ、甘えすぎじゃないの？」

「……………」

「仲野くんはね、アンタが好きだから告白したのよ？」

「……………」

「それを拒んどいて、今更なに？ バイト先の人の話ただけで人生終わったみたいな顔して、調子に乗るのもいい加減にしたら？」

玲奈はこれでもか！ っていうぐらいに、私を罵倒した。

…なんで私が怒られるのよ…

私は玲奈に文句を言われて、怒りが込み上げてきた。

そして、自分でも嫌になるぐらい感情がねじれた…

「…………潰してやる。」

「沙織？」

「…その喫茶店、潰してやるんだから！」

「あ、アンタ自分がなに言ってるかわかってんの！？」

「ええ、私はものすごい冷静よ。パパに頼んで、その店を完膚無きまでにブツ潰してやるわよ！」

私は笑っていた。

仲野くんを取り戻せるなら、神の命だってアリと一緒に。

…私たちの障害は踏み潰して、絶対に振り向かせてやるんだから！

私の仲野くんに手を出したら、絶対に許さ…

バシッ！！！！

…意味がわからなかった。

玲奈が真剣な顔で、私の頬にビンタした。

痛くはない…それより、涙がとめどなく流れ出した。

「…自分でもわかってるでしょ？」

「…うん…私…最低だね…」

「今は最低だった。だから私は…アంతを叩いた。」

「……………ごめん…なさい…」

「…沙織…」

…玲奈に抱きしめられた。

最低な自分に優しくしてくれる玲奈の胸で…私は号泣していた。

前までの私なら目が腫れるのを気にして、泣くのさえ我慢していたはず…

たった一人の親友のお陰で、少し素直になれた気がした。

…私は仲野くんが好き…

…変わらなきゃいけないのは、私なんだ…

「…落ち着いた？」

「うん、ありがと。」

「ホントにバカなんだから。」

「うるさ…一部、認めるわよ。」

素直になるって決めた、だから…私は素直になる。

さっきの私は…最低のバカだったわ。

「…一部、ねえ…」

「な、なによ!？」

「いいじゃない! バカになるぐらい…仲野くんが好きなんでしょ

？」

…黙ってうなずいた。

見つめた玲奈は…笑顔を返してくれた。

つられて笑った私に、玲奈は優しく言った。

「…仲野くんのバイト先の喫茶店…一緒に行く？」

「……でも、きつと仲野くんは……」

「…はあ、アンタねえ…本気で仲野くんが、そのバイト先の人に惚れたと思ってるの？」

「…うん。」

私は真剣に答えた。

玲奈はため息をついてる…いったい玲奈のため息は、これでなん回目だろうか…

呆れた様子で、だけど目は優しいまま…玲奈が喋り出す。

「そうよね…恋は盲目なのよね……」

「？ 意味わかんないけど…」  
「あ、気にしないで。褒め言葉だから。」

…絶対に褒めてない…

本能で感じた私は、玲奈に問い詰めようとした。

だがそれすら感じた玲奈が、先に話を切り出す。

「じゃあ明日の放課後、その喫茶店に行くからね！」

「え！？ でも…私、どうしたらいいか…」

「普通でいいんだってば！」

「…仲野くんの前だと、普通がわからなくなるの…」

…仲野くんはきっと、本当の私を知らない…

素直な自分が怖い…私はまた、涙が出てくるのを感じた。

実は自分に自信がなくて、泣き虫な私を見せたくない…

でもそのせいで、気が強くてわがままだと思われてるのも…本当は嫌…

どうしたらいいかわからずに、私は膝を抱えて泣いた。

「あゝん、もう！ 素直なアンタが一番好き！！！」  
「や、やめてよ玲奈…」

落ち込んでる私を、玲奈がギュッ！ と抱きしめてくる。

…嫌じゃないけど、こっちのテンションを考えてよね…

「よし、任せなさい！ この私が絶対に仲野くんと、ラブラブさせてあげるわね！」

「ら、ラブラブって…そんな…」

「知ってんだから！！…お風呂でこっそり、キスの練習してたでしょ！？」

「！！！！！！！」

…まただわ…いつの間に覗いてたのよ…

こっとなったら私は、もう生きていけない。

…玲奈を殺して、私も死んでやる！

枕に顔を埋めて、自分の顔から火が出るのを押さえながら…合気道



の達人を殺す方法を考える。

一方、ここはチャンスとばかりに玲奈が更に攻撃してくる。

「な・か・の・く・ん…チュ！」

「うるさい、うるさい…うるさい…!!」

「アンタさ、ファーストキスもまだなくせに…大人のキスも練習してたでしょ？」

「…!!…いつか絶対、殺してやる！」

全力で枕を投げたのだが、玲奈は軽々とキャッチした。

枕をベツトに優しく投げ返した玲奈は、トドメと言わんばかりに…

「鏡を汚しちゃダメだぞ?…沙織ちゃん！」

…と言って、部屋を出ていった。

私の怒りが、ピークを越えてしまう。

でも…ラブラブしたい気持ちに嘘はつけず、玲奈を殺すのは…仲野くんと付き合ってからにすると決めた。

この日、私は格闘技を習うことを誓う。

…もちろん、あの悪魔を倒すために…

次の日、朝一番に仲野くんに謝った。

なぜか仲野くんも謝ってきたが、とりあえず仲直りは成功。

…別に喧嘩はしてないんだけどね。

それから、喫茶店に行く許可をもらう。

「え…大丈夫かな…」

「なにが？」

「だって、真理絵さんがいるし…」

「あ、大丈夫。私…もう誰にも負けない！」

「…負けない？」

「え！？…あ、その…格闘技のことよ！」

私は口で、シッシッ！　　と言いながら…握りこぶしを前に突き出した。

仲野くんが不思議そうな目で、私を見つめている。

…恥ずかしくても、本当の私を見せるんだ…

いつも玲奈と話すように話していると、仲野くんは当然ともいえる質問をしてきた。

「…吉岡さん、今日はどうしたの？」

「あ…やっぱり変かな？」

「うっん、そんなことないよ！　むしろいつもと違って、その…力ワイイなあって…」

…刺さった…

…天使の矢が、いたずらに私の心を打ち抜いた…

…好きな人に…カワイイなんて言われたら…死んじゃう…

…気付いたら、玲奈に担がれていた。

どうやら、頭に血が上りすぎて倒れたらしい。

でも…私、幸せ…

「…玲奈…」

「あ、起きた？」

「…素直になるって、あんなに幸せなの？」

「そうね…沙織はどうなのよ？」

「…毎回たおれるなら…ちよつと大変かも。」

…二人して笑いあつた。

そして今度は、私から玲奈を抱きしめて呟いた。

「…玲奈…大好き。」

「突然なによ？」

「…ただ、素直な私が言いたかっただけ。」

「そうなの？…じゃあ私も…好きよ、沙織。」

…その日の授業は、全く覚えていない。

…仲野くんにかワイイって言われた…

もし私が日記をつけていたなら、今日のページは永久保存版だ。

ちなみに目の前で倒れた私を心配してる仲野くんは、玲奈の…『あれ貧血。』…という一言で納得したらしい。

もう少し、心配してほしかったのは…誰にも言えない。

私は玲奈のように、一つため息をついた。

…放課後は、ついに喫茶店に行くのね…

なにも考えず、ただ仲野くんを見つめ続けた…

…ついに、ついに来た…

ここが最後の城、ライラックなのね…

愛する勇者を救うため…ただそれだけでここまでやってきた。

…仲間は、武道家が一人だけ…

たまに味方も攻撃するけど、いないよりはマシね。

ゆっくりとドアを開けて、敵地に乗り込んだ。

「いらつしゃいませ!」

「あ、吉岡さん。いらつしゃい!」

「え? 猛くんの知り合い?」

私は軽く会釈をする。

玲奈もしたようだが、私の目はすでにある一点を見つめていた。

…確かにカワイイわね…でも、どこら辺が大人のじよせ…!!!

…あ、こ…声が出ない…

「ちょっと沙織! どうしたのよ?」

「…反則よ…」

「???」

「あんな胸、凶器よ凶器!」

「え? ああ、確かに大きいわね。Eカップぐらいじゃないかな?」

「Eー!?!」

A・B・C・D…Eカップ…

「私、帰る…」

「コラコラ！ 席にも座ってないのに帰るな！」

玲奈に襟首をつかまれて、窓際のテーブル席に向かい合って座った。

ゆっくり近づいて来た仲野くんは、手にお水を持っている。

「いらつしゃい、来てくれたんだね。」

「うん、来ちゃった。」

「何がいい？ オススメはね…」

「オススメは、一番高い物よ！」

カウンターの奥から、声が届いてくる…あのEカップだね。

…高いのを、オススメにしてんじゃないわよ！

私は敵意剥き出しで睨んだ…でも、仲野くんが上手に返してくれた。

「…このコーヒーセットを頼むと、赤字になるんだ。」

「猛くん……！」

「じゃあそれ、二つ。」



玲奈が普通に頼むと、あのEカップは仲野くんに怒っている…

慣れた様子の仲野くんは、無視をしながらケーキを運んでくる。

…何故かショートケーキとチーズケーキが、二個ずつ入っている。

「サービしえ！？…サービスだからね…」

「あ！ いま、噛んだでしょ。」

「だ、だって…吉岡さんがいると緊張しちゃっよ…」

仲野くんは恥ずかしそうにカウンターに戻る。

嬉しい気持ちと、迷惑をかけてるのかもしれない不安が…私の中で混ざり合う。

それからしばらくは他のお客さんもいたので、私達はゆっくりケーキとコーヒーを楽しんだ。

確かに美味しい…あのEカップにも、ちゃんとしたコーヒーが入れられるのね…

感心した私は、少しだけEカップを認めた。

そしてお客が私達だけになると、仲野くんは私達の席にやってきた。

「忙しくてゴメンね。」

「いいのよ、忙しい方がこの店のためなんだから……」

「お、いい事言うわね。コーヒーおかわりする？」

「……ありがとうございます。」

勝手に割り込んできたEカップは許せないけど、コーヒーに罪はない。

私と玲奈は、いれたてのコーヒーをおかわりした……そして気付いた。

……この人、結構いい人かも。

しばらく話してみると、話し易いし冗談も面白い。

なにより、考え方が大人だった。

……仲野くんの言ってた不思議な雰囲気って、きっとこの事だったんだね。

私はEカップ……訂正、真理絵さんを好きになりかけてた。

「…だからね、男なんてペットと一緒によ！」  
「フムフム…付き合うより、飼う感覚で…」  
「沙織には早過ぎるわよ。」  
「まあまあ…男にも人権はありますから…」

真理絵さんのアドバイスは、なかなか役に立つ。

…落とす相手も聞いてるんだけど…そこは気にしない。

そして…話は狂い出した。

「二人は、好きな人はいないの？」  
「！ あ、あの…」  
「私はいないけど、沙織には…ねえ〜！」  
「ちよ、ちよつと玲奈！」  
「へ〜。沙織ちゃんなら、簡単にゲット出来るんじゃない？」  
「それがですね、一応両想いなのに…沙織が素直になれないんですよ。」

私は無意識に、玲奈の首を絞めた。

仲野くんが止めてくれたけど、その表情は哀しそうだ。

その顔に、真理絵さんも気付いたらしい。

「…猛くん？ どしたの？」

「いえ…別になにも…」

「あ…沙織が、両想いつて聞いたから…」

「……………」

玲奈の言葉に、仲野くんは黙ってしまった。

その態度は明らかに、私を好きだと言ってるようだった。

淀んだ空気の中、部外者の真理絵さんがズカズカと土足で踏み込む。

「猛くんは…沙織ちゃんが好きなの？」

「…はい。」

「告白はした？」

「…木っ端みじんでした。」

「…なるほど、そりゃ複雑だわね…」

あう…心が痛い…

…いまさら…仲野くんが好きなんて言えない…

あの時の言葉を思いだし、私は顔が真っ青になっていく。

それを見ていた真理絵さんが、唐突に話し出した。

あまりにもストレートな一言で…

「猛くん、私と付き合う?」

…え…えー!!!!!!

どうしてそうなるの!?

混乱した私は、いつの間にか立ち上がっていた。

…玲奈は普通に、ケーキを食べている。

「な、何言ってるんですか！？　なんで僕と！？」

「だって私、猛くんが好きだもん。」

「そんなの私、認めません！！！」

「猛くんをふった沙織ちゃんに、権利はないよ？」

「…う…う…」

そくだ…私はなにも言えないんだ…

大人しく座った私を見て、真理絵さんは追い撃ちをかける…

「猛くんは、私のこと…嫌い？」

「…嫌いじゃ…ないですけど…」

「なら、問題ナシね！」

…肩に手を回して、仲野くんの体を引き付けている真理絵さん…

その目からは、妖艶さを感じさせる。

仲野くんは、体を動かそうとしていない。

二人の…顔と顔が近づいていく…

……ダメ…

……ダメ！…

「ダメーーーー！！！！！！」

「う・そ！ 仕事中に、キスするわけないじゃん！」

「……………へ？」

真理絵さんは笑いながら、仲野くんから離れた。

…ふと見ると、玲奈也大爆笑している。

私と仲野くんだけが、今の事態を飲み込めていないようだ。

玲奈と真理絵さんが、初対面とは思えないコンビネーションを見せる。

「仲野くんがキスするのが、どうしてダメなのかなあ？」

「あれあれ？ 沙織ちゃんは、猛くんをふったのよねえ？」

「『仲野くんが…仲野くんが他の女の子とキスしちゃうよー！？』」

「『止めなきゃ！ 猛くんを、今すぐ止めなきゃ！！！！？』」

「沙織の、その気持ちは…」

「…一体、何なんだろう…」

「「…ねえ〜！？」」

二人は芝居じみた演技で、私をバカにしてる…

…さ、最初から私を騙す目的で…

恥ずかしさと怒りで、私は震え出す…

…もう堪えられない！

勢いよく立ち上がり、私は入口のドアをおもいきり開けてとびだした。

仲野くんが呼び止めるが、それも聞かずに全速力で走った…

…外はすっかり、暗闇で包まれている。

月明かりが…私のために輝いてる気がした…



## 第六話・嫉妬こそ、恋！（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。実は先日、初のメッセージがあり…とても喜んでいました。それで話を長くしましたが…  
…やはり、短いのを毎日更新していきたいと思います。次回もよろしく願います。

## 第七話・城…崩壊（前書き）

結構、ベタな展開になってきました。疑問もあるかもしれませんが  
…深く考えずに楽しんで下さい。

## 第七話・城…崩壊

…吉岡さんがとびだしたあと、お店は大変だった…

松永さんはお代を払い、すぐに吉岡さんを追いかけにいった。

僕も追いかけたかったが、バイト中という理由で松永さんに止められた。

真理絵さんかというと、カウンターでずっとケラケラ笑っていた。

…一言、言わずにいらなかった。

「…いいですか!? 次に吉岡さんが来たら、ちゃんと謝ってくださいよ!？」

「はいはい、わかってるから。」

「…また今度、おもしろ半分で吉岡さんを傷つけたら…絶対にゆるしません!」

「…そんな怒らなくても…」

めずらしく怒った僕に、真理絵さんもやつと事の重大さに気付いたみたいだった。

…片付けをしてる内に、また新しいお客さんが来て…結局うやむや

になった。

…そんな感じで今は自分の部屋にいる。

本当は早く寝ないといけないのに、いろいろ考えてしまい…全然眠れない。

一瞬浮かんだ期待を、僕は全否定するように思い描いている。

…僕が友達だから、キスを止めたんだ…

…普通はそうだ…バイトとはいえ仕事中に、キスをする友達を見たら僕なら止める。

…よく考えたら、好きでも嫌いでもあの場面を見たら…止めるのが普通の人だと思う。

…しかもそれをバカにされたんだ…吉岡さんが怒るのも当然だ。

…でも、もし…

吉岡さんは友達思い…で片付いたはずなのに、僕が苦しんでる訳はこの…『もし』…である。

…もし、本当は吉岡さんも僕を好きだったら…

…もし、キスを止めたのが嫉妬だったら…

頭の中に、吉岡さんの顔がたくさん出てくる…

…笑った顔…

…怒った顔…

…驚いた顔…

吉岡さんの泣いた顔以外は、全て覚えている…

本当に僕は、吉岡さんが好きなんだと自覚する。

…そして自覚すればするほど、あの時のように困らせたくないという気持ちも強くなった…

…何も考えず、吉岡さんに好きだと告白した…

本当に僕は、それだけでよかった。

ただ…その後の二人の仲が、どうなるかまで予想するべきだった…

…顔を合わせるたびに、視線を反らされる…

…話しかけても、ごめんと言われる…

そうしてやっと気付く。

僕の好きな吉岡さんは…もういない。

僕は自分で、好きな人を消してしまったのだ…

普通に顔を見て、普通に話をして…

そうやって僕の好きな人は存在していたのに…

…苦しかった。

人を好きになるのが、凄く苦しかった。

あんな想いをするなら僕は一生…好きな人と友達でいい…

…そう自分に誓った。

それからしばらくして、松永さんが仲を持ってくれて…ようやく仲直りした。

…それでやっと、あの笑顔が見られる日々を過ごしている。

だから今日の事も、明日きちんと説明して…

…今まで通り友達として、過ごしていこう。

それが、好きな人の側にいられる…条件だから…

……アラームが鳴る。

いつの間にか、寝ていたらしい。



…起きたくなかったが、習慣とは恐ろしく…すぐにシャワーを浴びていた。

そして…いつものように学校へ向かう。

…太陽は、僕のためには輝いていない…

………来なかった。

吉岡さん、それに松永さんまで…欠席だった。

理由は………きっと僕のことだろう。

二人揃って風邪なんて、そうそうあるもんじゃないからね。

徹はいつもと変わらない…でも、全然気分が乗らない。

明日、遊びに行こうと言われても…断るしかなかった。

…ああ、そうか…明日は土曜日で学校は休みだ…

久しぶりに、僕は部屋の掃除をしようと考えていた。

…部屋が綺麗になれば、気分も晴れる気がする…

…バイトが終わり自分の部屋に帰る途中で、僕はやけに大きいトラ  
ックを何台も見かけた。

…大規模な工事か何かだろう…もう少し、税金を役に立てて欲しい  
ものだ。

行政に文句を言いつつ、部屋へ向かう最後の角を曲がった…

心の兵士A

「隊長！ 報告があります！」

心の総隊長

「どうした！？」

兵士A

「仲野猛の部屋が、見つかりません！」

総隊長

「意味がわからんぞ！？ 現状を報告しろ！」

兵士A

「はい！ 仲野猛の部屋があるアパートが、存在しません！」

総隊長

「そ、存在しないだって！？ な、何があつたんだ！？」

…心にいる、兵士と隊長さんでした。

さて、彼らが話してた通り…アパート自体、存在しませんよ。

続にいう…空き地です。

ええ、空き地ですとも。

○らえもんに出てくるような、立派な空き地。

僕は今、夢でも見てるのかな？

きっとそうだ…早速目を閉じて、ゆっくり深呼吸をして…

…そして…目を開けてみると…

……………松永さん？

…あれは多分、松永さんだ。

高そうなスーツを着けて、こっちへ来る松永さんが…ちょっと怖い…

僕の2m手前で止まると、松永さんは口を開く。

「仲野様ですか？」

「…松永さん？…一体、これは何な…」

「仲野様ですか？」

…こつちの話は聞く気がないらしい。

仕方なく、僕は黙って頷いた。

「…ここのアパート、及び仲野様の部屋は…差し押さえました。」

「さ、差し押さえ！？…僕は借金なんか…」

「知らなかったのですか？ このアパートの持ち主の方が、我がメイリーグループの金融会社から二億の借金をしてまして…」

「二億！？」

…と、途方もない額だ…宝くじに当たれば貰えるお金を、一体何に使ったんだろう…

使い道を気にしてた僕に、松永さんは一つ咳払いをした。

「それによりこの土地、及び建物は当方に強制売却させられまし

た。」

「そんな…頭金は、どうなるんですか!？」

「…当方に責任はございませんので。」

…僕はすでに、目の前の女性が松永さんであることを忘れて話している。

…今日から、どうやって生活すれば………!

ふと気付いて、スーツの女性に質問する。

「…荷物は？　僕はお金借りてないから、荷物は僕の物のはずだ。」

「はい、その通りです。」

「……………」

「……………」

「いや、早く返してよ!」

そのまま流そうとしてるスーツの女性に、久々にツツコミをしてしまった。

その言葉にやっと反応したらしく、微笑みながらその女性は突然歩き出した。

訳がわからない僕は、その場で立ち尽くしている。

するとスーツの女性【松永さん】は、僕に優しく話しかける…

「…私について来て下さい。」

「あ、ああ…はい。」

「そんなに、緊張しなくて大丈夫ですよ？」

…緊張させてるのは、松永さんなんだけどなあ…

僕は恐る恐る、松永さんの後を追っている。

…見る人が見たら、警察を呼んでしまいそうな程だろう。

どこまで行くのか、車に乗せられたりするのか…もしかしたら、軽い誘拐かも知れない。

相手がクラスメイトだということを忘れ、とても不安げに追いかけて…

「…こちらです。」

「へ？」

「早速、入りましょう。」

…少なくとも、ここではないと思ってた。

僕の部屋【すでに無いが…】の日照権を奪っていた…隣の高層マンションに、松永さんは入っていく。

オートロックのはずが、簡単に入っている姿に…僕は妙な感覚が芽生えている。

…もしかして…

聞くのも怖いから、とりあえずついていくだけの僕…

…いや、そんなまさか…

エレベーターに乗ると、松永さんが絶対にオカシな質問をしてくる。

「そうだわ…仲野様は、何階が好きですか？」

「…そんな唐突に、好きと聞かれてもさ…」

「15階までなら、どこでもいいですよ？」

「…じゃあ2階。」

「あ、すみません…このマンションは、3階まで駐車場になります。」

「……………なら、どこでもいいよ。」

「かしこまりました。」



松永さんは、最上階のボタンを押した。

…ある意味、確信した。

エレベーターが開くと、部屋は左右に一つずつあった。

松永さんが、笑顔で指を左右に振っている…

「…左が好き。」

「では、こちらへどうぞ。」

「あのさ…」

「何か質問ですか？」

…この状況で、疑問がない人を紹介してほしい。

多分、全ての部屋の力ギを持っていたのだろう…松永さんの手に、30個ほどの力ギがぶら下がっていた。

…やっぱりそうなるか…

音がなくスーツと開いた扉を支え、僕に入るように促している。

先に入って、続けて松永さんも入ると…扉が音を立てずに閉まった。

…その瞬間…

「…ごめんね、仲野くん。」

「良かった…普通の松永さんに戻ったんだね。」

「あのね、これには訳があつて…」

「ちゃんと説明してください。」

「…外だと誰に見られてるかわからないからね、敬語で話してたの。」

「

「松永さんの態度のことじゃないよ!!!」

…本日二度目のツッコミ。

僕のキャラじゃないけど、僕しかいないから僕がつっこんだ。

松永さんはごめんごめんと言いながら、僕に簡潔に説明した。

「今日から、ここに住んでね!」

……いつもより、星が近くで輝いていた……

## 第七話・城…崩壊（後書き）

作者です。物語がやっと本線に乗り始めました。ですが私としては、二人の出会いや沙織の家柄も、詳しく書きたいところです。ゆっくり進む展開に、痺れを切らさず楽しんでもらえたら幸いです…

## 第八話・パパの贈り物（前書き）

前回と同じ日の設定です。眠たくて書いたので、文脈が整ってないかもしれませんが…御了承ください。

## 第八話・パパの贈り物

…仲野くん、怒ってるだろうなあ…

マンションを見上げながら…私は少しだけ、憂鬱になっていた。

自分で決めたことなのに、今さら後悔し始めてる…でも、もう戻れない。

私は、仲野くんと玲奈のいる部屋へ向かった…

…全ては、朝から始まっていた。

玲奈に起こされて目覚めた私は、凄く機嫌が悪かった。

寝起きが悪いわけじゃない…昨日の夜【喫茶店の事】から、ものすごく機嫌が悪くなっている。

…それはもちろん、玲奈に対しても…

「ねえ、沙織…まだ怒ってる？」

「…一つ、こつちから聞くわね。怒ってない…とも思ってるの？」

「そうよね…あんな言われ方したら、誰だって怒るわよね…」

…明らかに…変だわ…

普段の玲奈なら、謝ったとしても…私に気を使ったりしない。

後悔はしても、反省はしない…それが玲奈だ。

…何かあったのかな？…それに朝からスーツ姿で、学校に行く様子を感じない…

怒ってるはずの私だが、いつの間にか玲奈のことを心配している。

…一応、聞かずにいらなかった。

「…実はね、沙織…」

「だ、誰を殺したの？」

「……………は？」

「…だって…いつも人を地獄に突き落としても、高らかに笑ってる玲奈が反省をしてるのよ？…ついに誰かを始末したとしか…」

「…アンタの中の私を…見てみたいわ…」

…玲奈は、深くため息をついた。

その姿は見慣れてるけど、肩を落としてる玲奈をこれ以上見たくない。

私をいじめたり、酷いことを言っただって…すべてを帳消しに出来る、親友だと思うから…

「…ちゃんと聞いてね、沙織…」

「うん。」

「実はね、御主人様からプレゼントがあるのよ。」

「！ パパから！？」

「…そう。沙織の誕生日に、休みが取れないからって…」



…パパからプレゼント…やった〜!!!!!!

さっきまでの気分が嘘のように、ベットで騒ぐ私は子供のような。

それを困った顔で見てる玲奈…

…私は玲奈の悩む理由が、さっぱりわからない。

「…パパからのプレゼントなのに、どうして悩んでるのよ?」

「…うん…」

「玲奈?…黙ってたら、わかんない…」

「………よし!…一緒に連れてってあげる。」

…連れてく?…どこへ?

今日が平日で、学校だというのもわかってるはずなのに…玲奈は黙って、準備をするために部屋を出ていく。

私も仕方なく、制服じゃなくて私服を着る…地味だが動きやすいジーンズを選んだ。

手ぶらで部屋から出ると、玲奈が迎えに来ていた。

…玄関前には車が用意されていて、玲奈がドアを開けて私は中に入る。

反対側から、玲奈も乗って来た…いつもは助手席に座るはずなのに、今日は隣に座る。

車が走り出す…そして、玲奈は話し出した。

「これから行く場所で、御主人様のプレゼントの内容を説明します。」

「…内容？…物じゃないの？」

「いえ、一応は物です。」

「…一応？…確かに説明が必要かも…」

考えるのを諦めた私は、玲奈が説明するまで待つことにした。

…私の言葉に玲奈は、軽く微笑んでいる。

仕事モードの玲奈は、私にすら感情を見せない。

ただ微笑んで、伝えることを伝えるだけ。

…まるで機械のように…

玲奈を初めて見る人は、妙な違和感と怖さを感じるだろう…まあ私はもう慣れたけどね。

…いろいろ考えてると、車はゆっくり停止する。

先に玲奈が降りると、すぐに私の側のドアを開けた。

10分も経ってないから、お家から意外に近いかも知れない…車を降りた目の前には、工事真っ最中のアパートがある。

…???…なんでここに連れてこられたんだろ?…私は余計にわからなくなった。

そこで初めて、玲奈がちゃんと説明を始める…

「ここは、仲野様の住んでいるアパートです。」

……仲野様… ってさ、私の知るかぎり仲野くんだよね？…

…死ぬほど驚きたかったけど、堪えて新たな疑問をぶつける。

「…こ、工事中のアパートに、ひ、入って住めるの？！」

まともに喋ったつもりが、結構焦ってたらしい…

しかし玲奈はそれを気にせずに、また説明を続ける。

…どうやら、質問の答えのようだ。

「今朝までは住んでましたが、今日で建物を解体するので…多分住めなくなるでしょう。」

…仲野くんが、住めなくなる？

話の内容が見えなくて、私の脳はフル活用されている。

…玲奈は説明を続ける。

「御主人様は、お嬢様が仲野様を好きなことをご存知で…」

「な、何で知ってるのよ!？」

「…すいません。」

「玲奈!!! アンタね、よりによってパパに言うなんて…」

「お嬢様にとって、何が一番大切かを考えた結果…御主人様に報告しました。」

…うう…目が嘘をついていない…本当に私のために話したんだ…

…玲奈が面白半分でパパに話したわけじゃないと知って、私は許してあげた。

それから、玲奈の話は…とんでもない方向に傾きだした。

「お嬢様は、仲野様とどうなりたいですか？」

「…ふえ？」

「仲野様と、どういった関係になりたいのですか？」

「…ど、どうって聞かれたって…ねえ…」

表情を変えずに聞く玲奈に対して、私は道の真ん中で…顔を紅色に染めた。

具体的な話になると、私の口からはあまり言いたくない。

…私の気持ちを察したのか、玲奈は気持ちを代弁してくれる。

「デートしたり、手を繋いだり…」

「…うん…そんな感じ。」

「キスしたり、さらにその先も…」

「……ま、まだ早いわよ！」

「まだ…ということは、したいと考えているんですね。」  
「……………」

…はうう…恥ずかしくて死にそうよ…

一瞬、玲奈の顔が小悪魔になったが…私は気付かなかった。

…そして玲奈は、まともに入る。

「つまりお嬢様としては、仲野様と一緒にいたい…そう受け取って  
よろしいですね？」

「……願いが…叶うのなら…」

「叶いますよ。」

「……………本当に？」

「というより、御主人様のプレゼントです。」

… いちいち驚くのが疲れたから、私は驚かない。

わかることだけ、受け入れる。

… パパの誕生日プレゼントが、仲野くんと一緒にいられること…

… あ、いま気が付いた…

… すべてわからないから、受け入れられない…

… やっぱり、玲奈の説明を聞こう。

「この解体中のアパートが無くなれば、仲野様は住む場所を失われます。」

「… そりゃそうよ…」

「そこで御主人様は、隣のマンションを買い取りました。」

「え？ パパが、そこを買い取ったの？」

…そこには、普通のマンションがある。

まあ、良くも悪くもない…普通のマンションを、あのパパが買い取るなんて…信じられない。

…でも、ここに仲野くんが住むなら…何階なのかは聞いとかなきや…

「…パパは、何号室を買ったの？」

「いえ、ですから…このマンションを買い取られました。」

「………全部？」

「はい、全部です。」

…一体、いくら使ったのよ…2〜3億じゃおさまらないじゃないの…

…私のプレゼントのためだけに、パパったら…

私は感謝をしながらも、親としてどうかと疑ってしまっ……………ん？

「…ねえ、私へのプレゼントってさ…マンションなの？」

「はい。」

「でも…仲野くんが住むのに、どうして私のプレ…」



私が疑問をぶつけるより前に、玲奈の切り返しが早かった。

「ですから、お嬢様には……………」

「…仲野様と、同棲してもらいます。」

…いちいち驚くのとて、めんどくさいんだけど…

…仕方なかったから、私は叫んであげた。

「ええええええー！！！！」

…あー…喉が痛いよう…

## 第八話・パパの贈り物（後書き）

はい、作者です。やはり強引な展開ですね…反省してます。あと、私は書くことばかりに集中しすぎて、あまり人の作品を読んでませんでしたので…読みました。素晴らしかったです。特に女の子の可愛さが、文だけなのによく伝わってきました。ぜひ参考にして、沙織を【カワイイ女の子】にしていきたいと思います。では、次回も楽しみにしてください。

## 第九話・一つの思い（前書き）

… 凄く短いです。では、サクサク読んで下さい。

## 第九話・一つの思い

「第七話の続きから…」

……いつもより、星が近くで輝いていた…

…そりゃそうだ…だって、高層マンションからの眺めだからね。

僕は外を眺めて、現実を忘れていた。

「…どう？ いい部屋だと思わない？」

「うん、かなりいい感じだね。」

「でっしょー！ 部屋の数も、二人ならちょうどいいし…ね！」

…二人？…いや、その前になんでここに住むって決まってるんだろ？

僕は得意げな松永さんを見ては、疑問が湧き水のように溢れてくる。

しばらくして松永さんは携帯電話をかけて、誰かを呼んでいる様子だった。

…はっきり言って、僕は何も理解していない。

「…ねえ、松永さん。」

「？　どうかした？」

「僕は今、どういう状況なの？」

…もしかしたら、これが最高の質問の仕方も知れない。

僕の質問に、松永さんが一から説明しようとした時だった。

…呼び鈴がなり、慌てた松永さんは玄関まで走りだして…誰かを連れて来た。

「…吉岡さん？」

「こんばんは。」

「…はい、こんばんは。」

「これからよろしくね、仲野くん…」

「…こちらこそ…？」

とりあえず、僕でも理解出来る事がある…新しい疑問が増えた。

…吉岡さんの…これからよろしくってどんな意味だ？

私服の吉岡さんを眺めながら…僕は黙ってしまった。

…沈黙が流れ始めた頃、やっと…やっと松永さんが説明を始めてくれた。

…

…

…

…

…

話の全体が見えてくる…

要するにアパートが無くなって…隣のマンションを吉岡さんのお父さんが買ったから、吉岡さんと二人で住め…ってところか…

…僕たちは、備え付けのソファ―に座りながら話をしている。

「…はい。」

「はい、仲野くん。」

「話の流れはわかったんだけど、また疑問が出てきました。」

「では、どうぞ。」

話し合いの中で、質問があれば挙手…って感じを延々繰り返して、やっと最後まで到達した。

…しかし、それでもわからないことはある。

この際だから、僕は全部聞こうと思っている…

「…吉岡さんが、何で僕のためにそこまでしてくれて…一緒に住む話まで納得しているのか、僕にはさっぱりです。」

「…なんだって。沙織、答えてあげたら？」

「そ、それは…」

「…僕の気持ちは、あの時から変わらないんだ。だから吉岡さん…本当の気持ちを教えてほしい。友達なら友達で、構わないから…」

吉岡さんは、俯いたまま…答えてくれない。

この答えが、僕にとって今の状況で…一番重要な問題だ。

…ただの友達としてなら一緒に住むなんてことは出来ない…ってい



うか、ありえない。

…それに好きな人と二人で過ごして、何もしいって保証がない…  
僕も男だからね。

…だけど吉岡さんが僕を好きで、その覚悟もあるというなら…

…いや、それでも一緒に暮らすのは良くない気がするな…

僕がいろいろ考えてると…吉岡さんは小声で喋り始める…

…それは小さな…とても

小さな声だったけど…僕の心には、盛大に響いてくる…

…私…仲野くんが好き…

「…吉岡さん…」

「…仲野くんが…好き…でも、仲野く…んの気持ち…を…裏切  
つて…」

「沙織、頑張れ！」

…吉岡さんの目には、涙が溢れている…

松永さんが吉岡さんの肩を掴んで、今にも泣き崩れそうな細い体を支えている。

…涙を拭って、軽く呼吸を整え終えた吉岡さんは…僕への気持ちを語りだした…

「仲野くんが好きで…でも、本音が言えずに…仲野くんをずっと傷つけて…」

「……………」

「…しかも私はわがままだから…玲奈やパパに…凄く迷惑をかけちゃった…」

「……………」

……………何も言えない…

…松永さんや吉岡さんのお父さんは、きっと迷惑したのだろう。

それを考えたら…簡単に否定するのは、僕がしてはいけなと感じた…

…でも…

「はあ…どうして皆、私みたいな女に優しいのかなあ…」

「それは沙織が…」

「…皆、吉岡さんが好きなんだよ。」

「…え…」

「さすが仲野くん、いい答えだわね！」

ふふふ…って笑った松永さんも、僕と同じことをいうつもりだったんだと悟った。

…そう、皆の思いは同じなんだ。

松永さんは友達として…

吉岡さんのお父さんは、自分の娘として…

そして僕は…一人の女の子として…

…それぞれが違う理由でも、気持ちは同じ…吉岡さんが好きなんだ…

吉岡さんの赤くなった顔を見つめて、僕は優しく微笑んだ。

… 目線を反らされたよ… アハハ…

## 第九話・一つの思い（後書き）

はい、作者です。あえて短い場面での告白は印象づける…となにかで読んだので、そうしました。次回も大事な場面なので、読んでもらえたら嬉しいです。

第十話・理由は…貧血。(前書き)

…仕事が始まりました…今までより、更新が遅れそうです…

## 第十話・理由は…貧血。

…なんで…なんでそんな目で見るの？…こっちは恥ずかしいのに…

私は仲野くんの笑顔に、心臓ごと驚掴みにされてる状態だった。

…まさに、仲野くんが命を握ってる…生きるも死ぬも、仲野くんの  
気持ち次第になっている。

…好きな人が、今まで泣いていた私の顔を見て…嫌いになったら…

この場で【嫌い】…なんて言われたら、私はもう…生きていけない…

そんな感情が、私の中で大きくなっていく…そのせいで私は、つい  
顔を反らしていた。

……………静寂…沈黙…一つ間違えば、気まずい空気とも言える雰囲気  
気…

それを崩したのは、聞き飽きた声と…深いため息だった。

「…アンタたち、少しはアクションを起こしなさいよね。」

「……………」

「…両想いだったのよ？…抱きしめるとか、キスするとか…ね!？」

「……………」

「…はあ…」



玲奈は呆れながら、私と仲野くんを交互に見る。

…完全に冷やかしの発言なのはわかってたけど、私としても…その…  
少しは…そういう…関係に…

「吉岡さん…隣に行っても…いいかな？」

「！…え！？…あ、う、も…」

「どうぞ、どうぞ！」

「ちょ、ちよつと玲奈！…助けなさいよ…」

私の言葉を無視して、席を立つ玲奈。

入れ替わりに、向かいのソファから…私の右隣に座る仲野くん…

…あ…あ、ダメ…また私…倒れちゃう…

自分の血が、頭に上るのを体で感じていた…私の体は、もうふらふらしている。

朦朧としてる中で、肩を掴まれたのを感じる…私は横に顔を向けた。

…目の前には…

…大丈夫？ 吉岡さん…

いつもは興奮して倒れるのに、意識がはっきりしすぎて冷静になる。  
仲野くんの顔が、たった30cm先に…っていう間も、ちよつとず  
つ近づいてくる…

「だ、大丈夫！？ 少しふらついてたけど…」  
「…私は平気…大丈夫だから…」  
「あ、あのさ…なんで、僕に近づいてきてるの？」

…どうやら、私の方から近づいているらしい…

私は冷静なつもりなのに、体が勝手に動いている。

そして…私の意思に反して、声が出た…

「…ごめんね…」

「よ、吉岡さん？…か、顔が近いよ…」

「…ごめんね仲野くん…私、もう我慢出来ないの…」

「…え？」

…仲野くんの口元に顔を近づけて…唇を重ね合わせた…

…一瞬…たった一瞬…

…のつもりだったのに、玲奈の一言で目が覚める。

「…はい、30秒経過！」

「……………あ…仲野くん…」

「…よ…吉岡…さん…」

我に還った私は、玲奈がニヤニヤしながら時間を計っていたことに気付いた。

…そして仲野くんは、顔を赤くしながら驚いている。

……………今、状況がわかった。

私は力無く…ソファーに倒れ込む…

……ん、んん……

目が覚めたら、ソファで寝ていた。

…外が明るいわね…もう朝なのかしら？

誰もいない部屋の中で、私は今の時間が知りたかったけど…時計が無いので諦めた。

それにしても…いろいろありすぎて、昨日は果てしなく長い一日だった気がする。

…仲野くんと一緒に住むことになって…

…仲野くんに好きだって話して…

…仲野くんとキ……キ、キ、キ、キ、キ……

キャーーーー！！！！！！

…バ、バカバカバカバカバカ！ 私のバカ！

…あんな…あんなことをしちゃったら、仲野くんに見せらんない…

私はソファ―に顔を伏せ、昨日の自分を罵った。

そしてしばらくの沈黙の後、また…仲野くんの顔を思い描いた。

…いきなり…キスなんてしたら、絶対引いてるよね…

…普通はデートをして、手を繋いだりしてから…キスするのに…

…でも、一緒に暮らし始めたら…そういうこともしちゃうのかなあ…

…御飯を食べるときに、ア～ンってして…

…朝はいつてきますの…キスしたり…

一緒に暮らす…その言葉のせいで、私の脳は仲野くんと甘い生活を想像していた。

…間違つて、お風呂を覗かれちゃうのかなあ…

…そして夜になったら…一緒に寝てる、仲野くんが………

卑猥な妄想のため、読者の想像にお任せします…

玄関を開ける玲奈…

部屋に入ると、ソファで何か動いていた。

…見ると、私が喋りながら暴れている。

さすがの玲奈も、意味がわからなかったらしい…

「仲野くん…優しすぎるよ…」

「？」

「私なら…平気だから…ね？…」

「???」

「あ、そんな…もつと…優しくイジメて…」

「沙織？…大丈夫？」

「!!!!!!」

…れ、玲奈！？…ナゼ、ココニ！？

私は頭の中を覗かれた気がして、パニックになりかけている。

一方の玲奈は、何もわからないから…

「…あのさ、仲野くんがナンたらカンたらって何なの？」

「えー？…ナ、ナンノコトカシラ？」

「ふーん…単なる寝言だったのね。」

「…ワ、ワタシガ寝言ヲ言ッテタノ？」

「あ、いいの。気にしないで。」



…よ、よかった…

そこまで気にしなかった玲奈は、その話を流してくれた。

ホッと一息…つく暇はなくて、玲奈は私に話を始めた。

「…で、仲野くんがね…」

「な、仲野くんがどうかしたの？」

「沙織に話があるから、部屋にきてくれってさ。」

「部屋？ どのの？」

「この階に、もう一部屋あったでしょ？ 昨日は仲野くん、あつちで寝たの。」

…あ！…だからこっちの部屋に、誰もいなかったんだ…

…でもなんでわざわざ、隣の部屋で寝たのかしら？…

これからずっと二人なのに、今さら部屋を別々にする意味が私にはわからなかった。

直接聞こうと思い、私は仲野くんがいる部屋に向かおうとする…

「…顔も洗わずに、会いに行くの？」

「！…うう…そうだったわ…」  
「しっかりしなさいよ？…二人暮らしには、危険がいっぱいあるんだから…」

私の肩を叩くと、洗面所まで背中を押す玲奈。

…そうよねえ…：少なくとも、仲野くんより早く起きなきゃなあ…

…寝顔や寝ぐせも見られたくない…トイレに入るところなんて問題外だし…

顔を洗いながら、好きな人と一緒にいる辛さを考え…私は理想と現実の間に揺れていた。

…最上階、右の部屋。

鍵は開いていたらしくて、玲奈は普通に入っていく。

私も玲奈のうしろを追いかけて、仲野くんの待つ部屋に入る。

…すると向かいの部屋と同じようなソファーに、仲野くんが座って

いた。

昨日のこともあり、最初の言葉に詰まる私と違い…仲野くんは淡々と挨拶する。

「おはよう、吉岡さん。やっと起きたんだね。」

「…仲野くん、昨日は…ごめんね…」  
「昨日？」

「…勝手に…キスしたりして…」

私は深々と、頭を下げた…仲直りしてほしかったからだ。

それを仲野くんは、笑顔で聞いてくれて…ちゃんと答える。

「ビックリはしたけど、怒ってないよ。」

「…本当？」

「当たり前だよ。だって、吉岡さんからキスしてくれるなんて…  
…嬉しかった。」

「…仲野くん…」

仲野くんの笑顔が、恥ずかしそうに赤くなる。

それでも目を反らせずに、真っ直ぐ私を見てくれた。

…見つめ合って、雰囲気は完全に二人のものに…

…なるわけがなかった。

「…また、キスするの？」

「い！？」

「あ、松永さん…いたんだね。」

「一応、沙織より先にいたんだけどね。」

私は慌てたために変な声が出てしまう…仲野くんは落ち着いてたけど。

…玲奈は腕を組みながら、足のリズムでイライラを表現している。

…仲野くんと向かい合うようにソファーに座り、私は本題に入るのを待つことにした。

私が座ると、玲奈も隣にサッ…と座る。

仲野くんは私たちを確認するように見つめて、口を開いた。

「本題から言うね。僕は…新しい部屋を探そうと思うんだ。」

「新しい部屋？」  
「…つまり…」

「…吉岡さんとは、一緒に住みたくないんだ…」

「……………え？」

第十話・理由は…貧血。（後書き）

はい、作者です。沙織は妄想癖がありそうですね…理由は、もう少し先にわかります。次回もベタに進むので、甘いのが嫌いな人には辛いかも…

## 第十一話・…確認ミス（前書き）

更新が遅れました…では、続きをどうぞ。

## 第十一話・…確認ミス

「……………やだ！」

「吉岡さん…」

「…好きなのよ！…嫌！」

「やめなさいよ、沙織。そんなわがまま…」

「わがままは、仲野くんの方でしょ！？」

…吉岡さんは、僕の話の聞こえをしない。

松永さんも、僕の味方になって説得してくれた。

しかしそんな松永さんに対しても、ワーワー言いながら吉岡さんは暴れている。

…この様子じゃ、二人がケンカしてるように見えてきた。

…あゝあ…僕のがままで、仲の良い二人が言い争うなんて…

この場から逃げ出したい気分で、僕は二人を眺めている…

…もちろん、逃げだせる雰囲気ではないけど…



…一緒に暮らせない…

当然と言えば、当然な話なんだから…少しは理解してくれると思っ  
てたのに…

…吉岡さんが、そこまで暮らしたいのなら…

…でも、ここで一緒に暮らしたら…大変なことになりかねない。

僕は心の中で迷いつつ、ふたたび吉岡さんを説得し始めた。

「…じゃあ、せめて理由を私に教えて！」

「り、理由は………言えないんだ…」

「なんで言えないの!？」

「…理由を話すと、吉岡さんに嫌われそうだから…」

吉岡さんは、絶対にないって叫んでいる。

でも仕方ないんだよ…

…吉岡さんを見てると…我慢できなくなる…

…そんなこと…口が裂けても言えない…

僕は吉岡さんから視線を反らして、下を向いてしまった…

「…アンタね、そろそろ気付かない？」

「なによ、玲奈…理由がわかったの？」

「あんな言い方されたら、普通気付くわよ。」

「なら、さっさと教えなさい！」

松永さんが僕に、話してもいい？…って顔で聞いてくる。

…きつと松永さんなら、嫌悪感を持たせずに説明できるだろう…

黙って頷いて、松永さんにすべてを任せた…

「…むか〜し、昔…あるところに、オオカミが住んでいました。」

「オオカミ？」

「そう。そのオオカミはとても素直で…恐くありません。誰も驚かさないし優しくて、今まで一度も動物を食べたことは……ないよね？」

「ありません。」

「ふーん…いいオオカミなのね。」

さっきまで怒りかけてた吉岡さんは、松永さんの話に聞き入ってる。

…松永さんが話し上手なのか、吉岡さんがとても素直なのか…

…どっちでもいいけど、とりあえず僕は…続きが気になった。

「ところがある日、オオカミの前に凄くカワイイ赤ずきんちゃんが現れました。」

「違いますよ、松永さん。凄くカワイイじゃなくて、凄く美しい…が正解です。」

「はいはい…その美しい赤ずきんちゃんは、優しいオオカミと大の仲良しになりました。」

「へ…赤ずきんとオオカミが仲良くなるって…変な話ね…」

「しばらくすると、二人はお互いを好きになっていました。オオカミも赤ずきんちゃんも、ずっと一緒にいたい…そう思いました。」  
「…それって……………」

…さすがに、吉岡さんも気付いたはずだ。

吉岡さんはたまに僕の方を見たりしながら、松永さんの話を真面目に聞いている。

そこで始めて、松永さんから質問がでた。

「…この二人がこれから一緒に暮らすと、どうなるでしょうか？」

「はい、結婚！ 二人は一生…仲良く暮らすの！」

「…オオカミは赤ずきんちゃんを…食べてしまうと思います…」

「仲野くん、正解！」

僕の答えが正解と聞いて、吉岡さんはガクッ…と肩を落とした。

…僕だって、性欲ぐらいは普通にあるから…一緒に暮らしたら、美しい赤ずきんちゃんをパクッ！…と食べますよ。

…まあ、吉岡さんの答えも正しいんだけど…

…僕は吉岡さんをなだめようとしたが、松永さんの例え話はまだまだ終わらなかった。

「オオカミは我慢できずに、赤ずきんちゃんを食べる…でも本当に好きな人だから、簡単には食べたくない…」

「わたし、赤ずきんはきつと、食べられてもいいと思ってるわよ？」

「…だからオオカミは悩んでるのよ。好きな人は許してくれる…だけれど自分が許せない…一緒に暮らせば、自分が許す前に赤ずきんちゃんを食べてしまう…」

…はい、その通りです。

…何も話していないのに、僕の心はここまで詠まれてるんですね。

…実際、昨日の吉岡さんの寝顔が…すでに危険な香りを匂わせてました。

…松永さんがいなければ、多分……

…吉岡さんは松永さんの話を聞いて、何か真剣に考えている。

僕はそんな吉岡さんの顔を見つめて、昨日の寝顔を思いだしていた…

不意に吉岡さんが、僕に疑問を投げかける。

「ねえ仲野くん…そんなに私を食べたい？」

「…随分、直球なんだね。」

「こつちも恥ずかしいんだから、ちゃんと答えて！」

「……僕は吉岡さんを…食べたいです。」

「…そう…なんだ…」

目の前の女の子は、僕の言葉で顔を朱色に染めていく…

またふらついてるので、松永さんが支えて何とか座れている。

吉岡さんが倒れる前に、僕は本音を話そうと心に誓った…

「…僕は吉岡さんが好きだよ…だけど男だから、当然体も求めたい…普通の男なら、好きな女性を抱きしめるのが夢みたいなものだからね。」

「…それは…なんとなくわかるわ…」

「僕は理性で抑えるつもりだった。でも、もう無理なんだ…吉岡さんから好きって言われて、僕の中のオオカミは目覚めた…その上、キスまでされたんだから…もう我慢なんてできない。」

…本心を語った。

恥ずかし気もなく、吉岡さんを性の対象として見ていると話した。

…ごまかそうと思えば、ある程度は出来たかもしれない。

でも僕は、吉岡さんに嘘をつきたくなかった。

向かいのソファで、僕を見つめる吉岡さん…

もう視線を反らす必要はない…これで嫌われても、今までみたいに…僕は吉岡さんをずっと好きでいるから…

真剣に付き合いたいから、きちんと話すべき問題を僕は話したんだ…あとは、吉岡さんの気持ちの問題だ…

……長い……沈黙……

…吉岡さんの顔は、赤くなったままだ。

…たまに松永さんが耳元で囁いてから、顔はより鮮やかに赤くなる  
…なにを言われたんだろう…

…しばらくして松永さんに、背中をトントンツ…と叩かれた吉岡さん  
は、僕に心を開いてくれる…

「…男の子が、そういうことをしたいのは…私も知ってるつもり…」  
「……………」

「…だから仲野くんが、どうしても我慢できないなら……………」

「…簡単に、そんなことしちゃいけないよ…」

「簡単じゃない！…私は真剣に悩んで、その結果…仲野くんになら  
許せるって思えたの…」

…吉岡さんも真剣に話してくれた。

顔は赤いままだが、貧血を起こす様子はない。

…僕は吉岡さんの本音が、嬉しくて仕方なかった……………けどやっぱり、それとこれは別の話だ。



「…ダメなものはダメ。」

「なんで…なんで私じゃダメなの!？」

「吉岡さんがダメなわけじゃないんだ。僕が自分を許せるまで…待つてほしい。」

「……………酷いわよ…仲野くんにそんな顔されたら、許すしかないじゃない…」

…僕の真剣な顔で、吉岡さんも諦めかけている。

吉岡さんを説得して、僕も少し安心していた。

……………誰かが変なことを言わなければ…

「あのさ…沙織と一緒に、暮らさなきゃいいんでしょ？」

「そうです。松永さんも説得、ありがとうございました。」

「…私、思っただけ…」

……ここに住めば？……

「……はあ？……」

「だから、ここに住めばいいじゃん。」

「……ここは、吉岡さんの部屋だね？……」

「……沙織は一号室、仲野くんは二号室で解決ってことで。」

……ああ、なるほど。

それなら一緒には住んでない………って！

「ほとんど一つ屋根の下じゃないか！」

「マンションだからね。沙織もいいでしょ？」

「うん！」

「……無理だよ、ここじゃ近すぎて……僕のオオカミが眠ってくれない。」

「仲野くんがオオカミのままなのも、私的にアリだわ！」  
「…そんな…吉岡さん…」

…松永さんにまじって、吉岡さんも攻撃してくる。

…吉岡さんだけならまだ楽だったのに、無敵戦艦が出てくると…フ  
ル装備で戦うしかない。

自分のスペックを確認しつつ、今…松永さん討伐に向かった。

「…こんな隣じゃ、いつ襲いたくなるか…」  
「カギは別々だから。」  
「それでも、襲おうと思えばいくらでも…」  
「このマンション、意外にセキュリティは完璧なの。」

…穴がない。

このまま暮らすことになれば、僕は吉岡さんを…

…あ、それはそれで…

いや、ダメだ！ 本能に負ける理性なんて、必要ない！

…僕は違う角度から責めてみた。

「…こんなマンションに、一人で住むってわけにはいかないよ…」

「大丈夫！ 全部、沙織のだから。」

「…好きな人に、甘えるわけにはいかないんだ。ちゃんと自分で口  
ーンを払って…」

「…それなら沙織に払えばいいじゃない。」

「こんなマンション、僕に買えるわけないだろ？」

「条件は、あのボロボロのアパートと一緒にだからね。それなら文句  
ないでしょ？」

…打つ手はなかった。

何がなんでも、隣で暮らすように仕向けるつもりのようなのだ。

僕が諦めた顔をしたのかわからないが、吉岡さんの目が輝いてる。

…仕方ない、好きな人が喜ぶなら…毎日オオカミと戦ってやるか。

「…僕が赤ずきんちゃんを食べても、文句は言わない約束なら…」

…承諾します。」

「はい、決定。」

「仲野くん…これからもよろしくね！」

…その笑顔のせいで…苦しんでるんだよなあ…

…松永さんは、書類を取りに行くと言って部屋を後にする。

本格的な書類になるから、明日までかかると話していた。

…もちろん、マンション購入のための書類だ。

吉岡さんは…『冗談だから、気にしないでね』…って言ってたけど…

ちゃんと責任を持ちたいから、松永さんをお願いした。

…かといって月々三万円じゃ、払い終わるのに…何年かかることや  
ら…

…あはは…還暦を迎えてそうだなあ…

僕は心の中で、泣きながら笑った。

「…仲野くん…」

「あれ？ 部屋に戻ったんじゃないんだね。」

「…ごめんね…仲野くんは、私を大事にしたいから断ってたのに…」

…吉岡さんが、リビングの入り口で静かに立っていた。

松永さんと一緒に部屋を出たと思っていた僕は…吉岡さんが謝ってくれたことに、ちよつと驚いてしまった。

さっきの態度と明らかに…反応が違っていたからである…

きつと…一緒に住みたいってわがママを言う吉岡さんも…ここで謝ってる吉岡さんも…どちらも、本音なんだろう…

…はつきり言っでどっちの吉岡さんも…愛おしくてたまらない。

立ち上がり、吉岡さんの側まで歩いた僕は…彼女を抱きしめる。

「…戸締まりはちゃんとしてよ…赤ずきん。」

「ふふ…わざとドアの鍵…外しとくから。」

「それって…酷くない？」

「…頑張っで自制心と闘うのよ？ オオカミさん！」

…いじわるな赤ずきんの口を、僕の唇で塞いだ…

驚いた顔がまた…美しい赤に染まっていく…

…二秒ほどで目を閉じる吉岡さんを確認すると…僕も目を閉じた…

…いつの間にかソファで座っている僕たち。

隣には、憧れ続けた吉岡さんが…僕の肩に、頭を預けていた。

…肩に手を回したかったけど、恥ずかしくて…手を握るだけにする。

…けど吉岡さんは、指を絡めてカップル握りにしてくれた。

…………呼吸の一つ一つが、幸せに感じる…

生きてるだけで幸せ…僕はまさにそれだった。

でも、時は過ぎ去るもの…

携帯のアラームがなって、バイトの時間だと気付いた。

行く準備をしようとして、立ち上がろうとする…

………？

「吉岡さん？…そろそろバイトだから、離してくれないかな…」

「イヤ！」

「…そんなわがままで、バイトは休めないよ…」

…吉岡さんは、手を離そうとしない…

…彼女の行動はカワイイけど、僕としてはバイトに遅刻したくないし…

吉岡さんの手を握り返して、僕は説明した。

「いい？…明日はバイトも休みだから、ずっと一緒にいられるんだよ？…」

「今日から一緒にいるの！ 明日まで待てない！」

「…僕が行かないと、真理絵さんに迷惑がかかるから…ね？…」

「…私より、バイトとEカップが大事なんだ…私は二の次なのね…」



吉岡さんは手を離すと、僕から顔を反らしている。

…Eカップって…真理絵さんのことかな？

くだらない疑問もあったけど、僕は吉岡さんの頬にキスをして…バイト先に向かった。

…心の中で…ごめんね…と呟きながら…

…バイトが終わるとすぐにマンションに帰る。

………吉岡さん…

オートロックも、何とか開けて…ホッとした…

…吉岡さん…吉岡さん…

僕は部屋のカギを開けて、すぐに叫んだ。

「ただいま、吉岡さん！」

…けど、部屋には誰もいない。

一人がこんなに淋しいのは…久しぶりだ。

少しだけ…ほんの少し、吉岡さんが待つてることに期待していた僕がいる…

隣の部屋の呼び鈴を押せば、すぐに会えるけど…この時間だから、迷惑になるだろう…

それでも明日【正確には今日だけ】…吉岡さんと一日中、一緒にいられるんだ…

…それを考えれば、今のこの気持ちは…淋しくて、嬉しい…複雑な心境というやつだ。

僕はベットには行かず、そのままソファアーの上で横になった…

…吉岡さんと…ここに座ってたんだ…

僕は変態っぽく、ニヤケながら…視界が暗くなるのを感じている…

「……………て！…の…」

……………何だ？…

「起きて！ 仲野くん！」

「……………吉岡…さん？」

「そうよ、ほら！ もう起きる時間よ！」

……………いくらなんでも……………早くないかなあ？…

日曜日なのに、朝9時に起こされた僕は…疲れが抜けてないことに  
気付く…

仕方なくソファーに座り直すと……………正面には、松永さんが座っていた。

…けれどもめずらしく、隣に座った吉岡さんが話を切り出す。

「…はい、サインして！」

「……………へ？」

「この書類に、サインと印鑑…それでOK！」

「…え…ああ、はい…」

…名前と…生年月日…

…あれ？…俺、今なにしてるんだろ？…

いきなりサインさせられて、少し不安だった。

けど…吉岡さんがマルチ商法をしてるはずはないから、言う通りに書いていく。

最後の仕上げをしようと、印鑑を探していると…

「…仲野くん、その書類には…」

「玲奈！！！」

「松永さん？…な、何があるんですか？」

「…書類はちゃんと確認して、契約してね。」

「黙っとく約束でしょ！ 静かにしといて！」

「…………はい…」

…そのあとの吉岡さんの笑顔が、僕には怖かった…

…ちゃんと書類に目を通す…確認すると、何やらマンションの権利に関係してると書いてある。

…良かった…高い宝石とかじゃなくて…

しっかり確認して、僕は書類に……………捺印した。

「…はい、確認しました。」

「ありがとね…猛…」

「ブッ！」

僕は思わず吹き出した。

…牛乳を飲んでいたら、鼻から出る勢いだろっ…

吉岡さんは僕を下の名前で呼びながら、腕を組んできたからだ…

…っ、これは一体…

松永さんは冷静に、書類を確認している。

……あ！

「ちょっと待って！……裏に何が書いてあるの！？」

「……はあ……だから確認してって言ったじゃない……」

松永さんは、書類の裏を見せてくれた……

……これ……無効になんないかな……

## 第十一話・…確認ミス（後書き）

はい、作者です。沙織はどんどんキャラが変わりますね…作者もアタフタしています。でも、自分が好きだから仕方ありません。では、また次回…

## 第十二話・だから妄想好き！（前書き）

沙織、ハイテンションすぎです…むしろ壊れ気味かも。では、どうぞ…



## 第十二話・だから妄想好き！

…ああ…私、幸せ…

…ずっと一緒にいようね…猛…

私は猛の肩にもたれながら、死ぬまで傍にいたいと願っている。

…猛は、今書いたばかりの書類を見ながら…少し戸惑っていた。

「…あの、この項目は…マジですか？」

「そうよ…タ・ケ・ル！」

「…書類上は、問題ないのよね…残念ながら。」

玲奈は、諦めてね…って話している。

猛は苦笑いを浮かべてた…何が不満なんだろう？

私の顔を覗き込んで、猛は【その他の特記事項】…を読み始めた。

「…その一、契約者は…吉岡沙織を愛することとする…」

「やっぱり、それが第一条件だわね！」

「…その二、契約者は…吉岡沙織のことを名前で呼ばなければなら  
ない…」

「ちゃんと、沙織…って呼んでよ？」

「…その三、契約者は…吉岡沙織の愛情行為を、基本的に拒めない  
…」

…それを読み上げた瞬間、私は猛の唇に口を押し当てた。

驚いているが拒もうとしない猛に…私は力の限りの愛情を伝える…

「…ね！ 嬉しいでしょ！？」

「結構、嬉しいかも…じゃない！ ダメだよ吉岡さん！」

「あ、名前で呼ばないと…契約違反よ？」

「…け、契約違反って…そんな…」

私は笑顔で、猛の違反を指摘する。

猛は動揺していた…その隙に猛の手から、書類を取り上げる。

…私は書類の裏の、一番下を指差して話した。

「…契約違反は法的措置をとります…頭のいい猛なら、意味わかる

わね？」

「…賠償金…とか…」

「違うわよ。玲奈、アレを持ってきて…」

「…あゝあ…一時間も、経たなかったのね…」

…猛に、仕事だから…と呟きながら席を立つ玲奈…

玄関の方に向かって行き、すぐにリビングに戻ってきた。

…ソファ―に座った玲奈は、一枚の紙を取りだす。

「…これって……………あ…」

「そう…婚姻届け！」

「…法律上で、結婚するってこと?…」

「法的措置…間違ってるかしら?」

「微妙に違うよ!」

…つつこむ猛を無視して、私は猛の印鑑を持つ。

実は私の書くべきところは、すでに書き終わってた。

…猛のところは、印鑑を押せば正式な形になり…役所に出せる婚姻届けになる。

私は印鑑に、はあゝ…と一息はいて…婚姻届けに押し付け……

「…うおっ！」

「あ…何で邪魔するのよ？」

「邪魔しないと、僕たち結婚しちゃうじゃんか！」

「…猛は…私と結婚したくないんだね…」

「…そ、そんな顔しないでよ…吉岡さん…」

「…まだ…吉岡って呼ぶんだ…」

…私は涙目で…下を向いた…

猛は焦って、玲奈や書類を見ては…私にごめんと謝ってくる…

………クッククク………

心の中で、猛の心配そうな顔を見て…笑っている…

…私はこのようになることが、最初からわかっていた。

第一に、未成年は勝手に結婚できないことも知っている。

…私の目的は、このあとの展開にあった…

「……………猛は…私が嫌いなんだ…」

「違う！…僕は吉岡さんが好きだよ！…でも、結婚は…」

「…じゃあ…愛してるって言うてよ…」

「……………愛してる…」

「…名前も…一緒に呼んで…」

「…愛してるよ…沙織…」

…はあゝん…シ・ア・ワ・セ…

猛は私を抱き寄せ…耳元で愛を囁いてくれる…

…頭の上から、脚の爪先までを快感が走っていく…

…これよ！…たったこの一言のために…私は苦勞したのよ…

背中には、未だに電気が走るような感覚を覚えつつ…まだまだ猛に呼んでもらいたい、私がいた…

「…もう一度…言って…」

「沙織、愛してる…」

「…もつと…もつと私に愛してるって…」

「何度でも言うよ！…だから泣かないで…沙織を愛してるから、泣き顔は見たくないんだ…」

「……………あゝ！…見ててイライラするわ！」

玲奈がいきなり立ち上がって、婚姻届けと書類を破り捨てる。

…抱きしめあった私と猛は、玲奈の行動を呆然と見てるしかなかった…

今まで黙ってた玲奈は、怒りを私にぶつけてくる。

「なにが『愛してるって言うて』…よ！ 言うって知ってて、よく平気で聞けるわね！？」

「べ、別にいいでしょ！…黙つときなさいよ！…」

「仲野くん知ってる？…この女ね、最初から…」

「あ、バカ！」

…玲奈は、すべてを猛に話した…

猛は意味がわからない顔で、私を抱きしめてる手を離す。

名残惜しかったけど、私も素直に…猛から離れた…

「…つまり、ドッキリよ。」

「じゃあ、書類も…無効になるんだ。」

「当たり前じゃないの…あんな、騙して書かせたような書類…ただのゴミね。」

「…どうしてこんなことしたの？…吉岡さん…」

…沙織から、吉岡さんに戻ると…私は少しへこんだ。

…猛を騙したのは、事実だけど…楽しんで騙したわけじゃない。

私は嫉妬まじりに…本音で話した。

…まじりじゃなく、完全に嫉妬だったけど…

「昨日の猛、私に優しくしてくれた。けど…私にいじわるもしたわ…」

「…僕はいつだって吉岡さんに、優しくしてるつもりだよ？」

「…嘘よ…だって私より、バイトを優先したじゃない…」

「それは…仕方なく…」

…私が今、とてもウザイ女なのは…自分でもわかった。

猛が一生懸命に説明してることも、本当は理解している…

…玲奈はまた黙って、私と猛のやり取りを静かに傍観していた…

「…だからお金が無いと、生活が出来ないから…」

「…言い訳よ。どうせ、あのEカップに会いたいからそういう…」

「違うよ！…真理絵さんは全然、関係ないんだって…」

「……………ふん！」

…また私は、猛とは逆を向いた。

猛はどうしていいかわからずに、頭を二、三回ほどかいている。

…こんな時、決まってあの女が口を出すって知ってた。

「…ごめんね仲野くん…沙織はレディコミの読みすぎで、頭がおかしくなってるのよ…」

「あー！…人の趣味を、勝手に暴露しないでー！」

「レディコミって何なの？」

「女の子のためのマンガ…ちょっとエッチな…」

「か、関係ないでしょー！」



…うう…元々、玲奈が持ってきたのに…

クローゼットの奥に隠してある、毎月の楽しみをばらされて…恥ずかしさが込み上げてくる…

下を向いた私を無視して、猛と玲奈は会話を続けてる…

「…恋愛経験ないくせに、知識だけはあるから…すぐに浮気だなんだって叫びだすのよ。」

「へえ…吉岡さんにも、そんなカワイイところがあるだ…」

「…そうなのよ。だから呆れずに、付き合っただけてね。」

「もちろんです！ 僕は吉岡さんを、愛してますから！」

…その言葉を聞いた私と玲奈は、思わず顔を赤くしてしまった。

…こんな真っ直ぐに愛を語れるなら…猛に小細工は必要なかったなあ…

私は自分の行動に、毎回のよう反省している気がしていた…

…玲奈は、今度こそ本物の契約書を持ってくると言って…部屋を出ていく。

…この空間に二人つきり…あう…抱きつきたい…

…私はエサを待つ子犬のように目を輝かせながら、ご主人様の許可がおりるのを待った…

猛も気付いたのか、少し間を置いて…

「……………いいよ、沙織。おいで…」

「バウッ！」

「よし、よし…いい子だ…」

私は猛の胸めがけて、頭から飛び込んだ…

…ちなみに私たちは二人っきりの時だけ、名前で呼ぶことにした。

…やっぱり猛は、人前で名前を呼ぶのが少し恥ずかしいらしい…

「まったく…沙織は急に態度が変わるんだから…」

「…エヘッ！…さつきはごめんね…」

「…そうだなあ…あれはいくらなんでも、沙織が悪いよ。」

猛は私の目を見ないで、冷たく言った。

…いつもは許してくれるのに、やっぱり今日は怒ってるんだ…

…私…どうしたらいいんだろ…

また泣きそうになった私は、必死に涙を堪えている…

「…………やっぱりダメ！…沙織にそんな顔されるぐらいなら、許してあげるよ！」

「…ほ、本当？…」

「うん。だけど、二度とバイト行くのを邪魔しないでよ？」

「……………わかったわよ……………」

…また…Eカップの顔を思いだした…

猛に限ってないとは思っけど…念のために私は、釘を刺してみる。

「…ねえ猛…あんまり、真理絵さんと仲良くしないでよね…」  
「どうして？」

「…猛がカッコイイから、変な気起こすかもしれないし…真理絵さんも、カワイイから…猛はすぐオオカミになっちゃうよ…」  
「…嫉妬…してるの？」

…私は…頷いた。

回りくどい言い方は、今は必要ない…

自分の気持ちをそのままに、猛の胸で囁いた。

「…お願い…私以外を…見ないでほしいの…」

「…どうしよっかな？」

「…え…」

「真理絵さんはカワイイと思うし、松永さんだってなかなかの…」

…ダメ…やめて…

猛の口から、他の女の子の話は聞きたくない…

…いや…イヤ…嫌！

私はソファアーの上で思いつきり…猛を押し倒した。

「さ、沙織？…今のは、軽い冗談…」

「………触って…」

「…こ、この状況じゃ…その発言は危険だよ…」

「…ここを…触ってよ…」

「！……！！…あ、これは…」

…猛の上に乗って、右手を取ると…私の左胸に添えた。

…胸のドキドキを伝える…そんな可愛らしいものではなかった…

…好きな人を、私だけのものにするには…方法は一つしかない。

私は女として、猛の目の奥を覗き込む…

「…私の胸じゃ、小さくて興奮しないかも…」

「…そんなことは…ないよ…」

「興奮したんだ…なら、この先もわかるわよね？…」

「…わかるけど…本当に僕でいいの？」

…私は微笑んで、猛の手を胸のボタンに移動させる。

一番上のボタンが外される…まだ、胸を包む下着も見えなかった。

…二番目のボタンに手がかり…

「…お邪魔かゝしら？」

「……………」

「ま、松永さん！」

…玲奈が私たちを覗いている…わざわざリビングの隅から…

私と猛は二秒で座り直すと、何もなかったような雰囲気をかもしだした。

「…いまさら遅いわよ。だってボタンが…ね!？」

「あ、違うの!…これはたまたま…」

「ぼ、僕たちはまだ何も…」

玲奈はニヤニヤ笑って…久しぶりの小悪魔モードになっている。

…またしばらく…イジメられるのね…

…はうう…

## 第十二話・だから妄想好き！（後書き）

はい、作者です。うーん…本当はここを省くつもりでしたが、友人に甘いのが好き人間がいて…省かないで、壊れた沙織をカワイイ感じで書いてほしいと言われて書きました。沙織は、タカビーでちょうどいい気がするんですけどね…では、また次回も楽しみに。



## 第十三話・日常（前書き）

… 凄く短いです… では、気軽にどうぞ…

### 第十三話・日常

「はい、あゝん…」

「…モフ!…」

「どう? 美味しい?」

「…うゝん…ダメだよ…」

吉岡さんのマンションに住んでから二週間…

…今はちょうどお昼時間で、僕と吉岡さんは窓際の席で向かい合ってる…もちろん、一緒にお弁当を食べているからだ。

徹は学食で食べているし、松永さんは自分の席でパンを食べているので…今、僕たちは二人で食べていた…

吉岡さんは、いつも学食で食べていたけど…僕にあわせて、お弁当を作るようになった。

…そのせいで、松永さんは毎日コンビニでパンを買ってるらしい…意外に料理は苦手のようだ。

一方、吉岡さんの料理の腕前は…

「…確かに美味しいけど、このままだと…」

「な、何があるの？」

「…吉岡さんの料理以外、食べられなくなるよ…」

「…もう！ 失敗したかと思って心配したのに！」

吉岡さんは笑いながら、ポコポコと僕の肩を叩いてきた…

…はつきり言おう、凄く美味しい。

吉岡さんほどのお金持ちは、料理なんてしたことないと思っていたのに…良い意味で裏切られた。

…あの時の婚約届けに、印鑑押しとけばよかったなあ…

先にお弁当を食べ終わり…吉岡さんの美しい顔を見つめては、どこか弱点を探したくなる僕だった…

「…あんまり…ジツと見ないでくれる？…」

「何で？ 吉岡さんも、よく見つめてるじゃん。」

「…食べてるところを…好きな人には見てほしくないの…」

「…わかったよ。向こうを見てるから、食べ終わったら…」

「ち、違うのよ！ そうじゃなくて…仲野くんは見ていたいから、体ごと横は向かないで…」

…聞きました？…なんてわがままなことを…

ただ…こんなわがママが、ものすごくカワイイと思えるのは…僕だ  
けなんでしょうか？

…顔を真っ赤にしながら、お弁当を食べてる吉岡さんを…見てはい  
けないから想像する。

…あ、いまの玉子焼き…狙ってたのに…

想像の中で、楽しんでも…学食から徹が帰ってきた。

「また一緒に食ってたのか？ よく飽きないもんだな…」

「妬いてるくせに、強がるなよ。」

「だ、誰が！…お前と、吉岡みたいなバカップルを…」

「徹はわかってないなあ…バカップルほど幸せなカップルはいない  
んだよ…ね、吉岡さん！」

「…うん…私も幸せ…」

…いつの間にかお弁当を片付け始めてた吉岡さんも、やっぱり顔を  
真っ赤にしながら答えてくれる。

…悔しがってる徹を見た限り、凶星のようだ…

そんな様子を見ながら、松永さんはまた…ため息をついている…

今のところ、毎日がこんな感じで過ごしていた…

状況報告をしよう。

…僕と吉岡さんが一緒のマンションに住んでるのは、初日でバレた…

…住所変更や何やらで、担任が皆の前で言ったからだ。

もちろん、そこは高校生…みんなが茶化し始める。

『付き合ってるの?』

『結婚したのか?』

『毎日やりまくってるんだろ!』

………など、いろいろ。

…ひじょうに疲れたので、全ての質問にまとめて答えた。

…吉岡さんを愛してる…それで問題ある？…

…二度と質問はこなかった。

一応、前から吉岡さんのことを好きってのは皆にバレてたし…

吉岡さんが僕を好きってことも、女子の何人かは気付いてたみたいだ。

…おめでとう！　と言う娘もいたそうで…

そんなこんなで、僕たちが茶化されることはなくなっただけ…一つ変化があった。

…クラスの中に、何組みかのカップルが誕生している。

どうやら僕たちを参考にして、堂々と付き合いだしたらしい。

後に、『仲野・吉岡ペアのおかげ』…と言って、貢ぎ物が贈られてきたりと…僕たちは【縁結びの神様】的な扱いを受けている…

…苦笑いしか、出てこなかったけど。

…とりあえず、僕たちはラブラブな毎日を過ごしている。

ケンカ（主に吉岡さんのわがまま）もするけど、土日には必ず二人の時間を作っていた。

…危ない雰囲気を何度、松永さんに助けてもらったことが…

…吉岡さんは綺麗な体をしているし…美しい顔が、妖艶さに包まれると…僕の意味ではとても断れない。

一度だけ、ベットで松永さんに助けられたときは…心の底から感謝した。

やっぱり、ちゃんと責任を持てるまでは…しちゃいけない。

下の階に住み始めた松永さんに、今度お礼をしたいと考えている僕であります…

以上、状況報告終わり。

「…仲野くん？　大丈夫？」

「……………え？」

「だってもう…バイトの時間よ？」

「……………！！　そうだ、もう放課後だった！」



…僕は吉岡さんにありがとつを告げて、走りだした。

いろいろあるけど毎日が幸せだ…と、僕は走りながら感じている…

…幸せは、長く続きはしなかったけど…

### 第十三話・日常（後書き）

はい、作者です。二人がラブラブのまま、作品を終わらせてもいいのですが…やっぱりダメですね。次回からちよつとずつ波が現れ始めます…では、また次回。

第十四話・…………誰？（前書き）

…そろそろ終わりが見えてきました…では、続きです。どうぞ…

#### 第十四話・……………誰？

…はあ…楽しみで仕方ないなあ…

…今は夏休みで…しかも私たちにとって、今日が初デートの日…

時刻は、朝の4時半過ぎ…デートまであと5時間ぐらいある。

実は3時から起きているので、お風呂はすでに入った。

出かける前に、もう一度入るつもりなので…髪はセットしていない。

ぼっさばさの髪のまま、私はお弁当の準備を始めていた。

…半分寝ている玲奈に、今日のお弁当の相談役をしてもらっている。

「…やっぱり、カップルでお弁当と言えば…サンドイッチよね！」

「…んー…」

「…でも…手抜きだと思われたくないから、和食を中心に入れた方がいいのかな？」

「……………ん…」

「かと言って…鶏のから揚げとか脂っこいのも、男の子って好きだから…うーん…」

「……………」

「…ちょっと玲奈！ 人の話を聞いている？」

「…んーんー…」

玲奈は首を横に振って、ソファーにそのまま倒れ込む。

…まったく…人生で一番大切な日なのに…

硬く握った拳を緩め…私は寝室から薄手の毛布を持ってきて、玲奈の体に被せてあげた。

…私と猛のデートなんだから、玲奈に頼ってばかりじゃダメだよな…  
スヤスヤ眠る玲奈を横目に、めずらしく一人で作る料理を考える私だった…

…一応、大丈夫よね…

私は髪をちゃんとブローして、綺麗に整える。

…着ていく服もこの日のために、玲奈とわざわざ買いに行った。

…上の洋服は、いたって普通のカットソーのようなもので私も気に入ってただけど…スカートがちょっと、ねえ…

玲奈が言うには、『仲野くんはこういう感じのが、好きなはずよ！』…って話だけど、未だに…私は信じられない。

もう一度、もう一度だけ…玲奈に確認する。

「…本当に大丈夫？ 私の格好、バカっぽくない？」

「まだ心配してるの？…沙織はカワイイんだから、何も不安になることはないの。」

「でも、この…ピンクのフリフリスカートは、私に合わないんじゃない？」

…玲奈は親指を立てて、『グッジョブ！』…等と意味がわからない発言を繰り返してる。

…パパに買ってもらったドレスより、フリフリのスカートなんて…キツイわよ…

私的には、もっと色気のある服で猛を誘惑………じゃなくて、気に入ってもらいたかったのに…

ギリギリまで悩んでると…ドアのチャイムになる。

…あ、あ、どうしょ…

…右往左往しだした私を玲奈が無視して、玄関に向かう…

「おはよう、吉お………おお……」

「やだ、仲野くん…私を見ないで…見ないで〜!」

「………よ、吉岡さん…そのスカート……」

「イヤー!……!す、すぐに着替えるから、私に何も言わないで〜!……!……!」

「待つて!……僕は、そのスカート…すつごく好きだよ……」

…私が必死にソファアの影に隠れたのを見て…猛は顔を赤くしながら褒めてくれた…

…まさか、猛がこんな…子供っぽいスカートを気に入るなんて…

私が戸惑いと動揺でわけわからなくなっていると、あの女が平気で話を切り出す。

「だから言ったでしょ? 仲野くんはこんな服が好きなんだって…」  
「松永さん? どうして僕の好みが…」

「…なんとなくなね。仲野くん見てると、沙織を見る目が変わってきた感じがしちゃって……」

「え?…本当なの?」

「…うん…吉岡さんのことを、知れば知るほど…女の子なんだって感じて、凄くカワイイと思えるようになったんだ…」

……はう…

性格はわがままで、玲奈がいないと何も出来ない私を………一番好きな人がカワイイって認めてくれる…

私は今の今まで恥ずかしがってたスカートのことも、猛の話を聞いたおかげで受け入れ始めた。

…いつの間にか猛が、私の横で手を出して立っている。

…その手を取って、私はゆっくり立ち上がる…

「…ありがとう…」

「そのスカート…恥ずかしいなら、無理して着けることないよ。」

「…ううん、大丈夫。私もなんか…自分に合ってる気がしてきた。」

「吉岡さんは素敵なんだから、何を着たって似合うよ!」

…そのキラースマイルはやめて…

猛の屈託のない、素直な笑顔は…私の寿命を縮めていく。



…今日は玲奈がいることも確認している…でも、この思いを止められなかった。

「……………猛…」

「よ、吉岡さん？…松永さんがいるから、名前で呼ぶのはちょっと…」

「…キス…して…」

「えーっと…その…松永さん、ごめんだけどさ…」

…ハイハイ…と言って、後ろを向く玲奈…

ゆっくり肩に手を回す猛…抱きしめながら、耳元で…『好きだよ、沙織』…って呟いてくれた…

…私も好き！…好き、愛してる！…

思い浮かぶ言葉は、声に出来ない…口はすでに、猛の口によって奪われていたからだ…

……………玲奈の話によると、カップラーメンぐらい簡単に出来る時間…キスしていたらしい…

私には一、二秒に感じたから…損した気分だわ…

初めてのデートでもあるので、遊園地に行くことにした。

お目付け役である玲奈とは、入り口で別れる。

…本当はついてくるのが仕事らしいけど、私たちのバカップルぶりを見たくないと言って…すこしサボるんだって。

…気の使い方が下手なんだから…

玲奈の優しさのためにも、今日はおもいつきり楽しもう！

猛の手を握って、顔が赤くなるのを感じながら…小走りに歩きだす…

……つまんない……

…遊園地でデートって、もっと楽しいと思ってた…

…乗り物や雰囲気のせいかな？…全然楽しくないのよね…

時間ばかり気にしてて、私はお昼が待ちどうしくて仕方なかった。

「…やっぱりダメだ。」

「え…猛、どうしたの？」

「ごめん、黙ってたけど…最初の方から、なんかこう…」

「………楽しくない？」

「…ごめん…」

申し訳なさそうに、猛は私に謝った。

…猛が謝ったことより、私と同じ思いを感じてたことが…妙に嬉しかった…

私も楽しくないことを話して、よく考えてみる…楽しいはずのデートが、二人でいても楽しくない理由…

………二人？…

「…帰ろっか、猛。」

「え？…まだ来たばかりだよ？」

「…お家の方が、二人つきりになれるもの…」

「あ…ああ！　そういうことだったのか。」

…夏休みの遊園地は人が多すぎて…二人の時間が全くない。

猛のそばにいられば、それでいいから…私は遊んでも楽しくなかったのね…

…猛も…きっとそうだ…

今までが楽しすぎて気付かなかっただけ…そう、私と猛には何もいらない。

…わざわざ遊園地まで、来る必要なかったなあ…

携帯に電話しても、取る気配がない…この雑踏じゃあ音も聞こえないのだろう。

…猛は玲奈を探しに行くと言って、私を休憩所の白いテーブルに座ってるように指示する。

一緒に行きたいんだけど…玲奈から連絡がきた時に、わかりやすいところの待ち合わせ場所が必要なんだってさ。

…猛と一緒にいたかっただけなのに…本当に鈍いんだから…

…仕方なく、一人でのんびりし始める。

………嫌でも目につく、周りのカップル達…

私と猛も、こんなに大胆なのかしら？…

…アイスを一緒に食べてたり…腰に手を回してたり………うわっ、人前でキスしてるよ…

…やっぱり私、人前ではイチャイチャなんて出来ないなあ…

【充分してるのだが…】

とりあえず子供じゃないんだから、大人しく待たなきゃね…

…

……

……

… 猛に… 会いたい…

5分も経っていないのに、周りのせいで淋しさが増幅している。

… うう… 私も早く、キスしてほしいよ…

頭の片隅にも玲奈という存在はなく、ただただ猛の顔が待ち遠しい…

… すると突然、肩をポンポンツ… と叩かれた。

「遅いわよ！……… あ、ごめんなさい…」

「うふふ… おもしろい娘ね。」

「… へ？… あの、何か用なんですか？」

… 振り返ると、そこには一人の女性が立っていた。

髪は黒く、腰を軽く触るほどに伸びている…私も見惚れるぐらい、美しい髪だ。

いや、髪だけじゃない…スタイルも抜群で、私が負けてるかも…

しかも、Eカップ【真理絵さん】ほどではないにしろ…CかDはありそうだ。

顔はサングラスで、よくはわからなかったけど…間違いなく、美人でありそうな顔つきである。

…どこかで見たような…

「…吉岡…沙織さん、だったかしら？」

「ど、どうして私の名前を？」

「あ、失礼。これじゃ、わからないわよね…」

…女性がサングラスを外した。

……………会ったことはないはずだけど…やっぱり、どこか見たことあるような……………

…あ！ まさか…

「…あの、もしかして…仲野くん…」

「姉です。」

「やっぱり！ 目元が似てるから、そうじゃないかと…」

…確かにこの目、猛の目にそっくりだわ…

姉だと知り、どうにか私は…ポイントを稼ごうと必死になる。

お姉様の、すべてを褒めようとしたその時…

「時間が無いから、もう失礼するわ。」

「あ、そんな…仲野くんには会っていかないんですか？」

「…そうね…でもいいの、これから猛ちゃんをよろしくね。」

…そう言って、雑踏の中へ消えていった…

いまひとつポイントを稼げなかった私は、悔しさが込み上げてくる。

…次こそは、必ず…良い印象を与えるんだから！

私は一人、空に拳を突き上げた…



…あ、猛と玲奈だ。

二人を見つけた私は、急いで近づいていく。

そして…猛に抱きついた…

「…ちよつと玲奈、携帯ぐらいちゃんとりなさいよ！」

「ごめんね。UFOキャッチャーしてたら、夢中になっちゃってさ

…」

「まったく、上手なくせに…」

「だから夢中になるんだってば！」

「…あの…そろそろ突っ込んでいいかな？」

…猛の肩こしに会話する、私と玲奈…

抱きつくことがさも普通かのようにする私に、猛は少し戸惑ってる。

…あ、そうだ…

「…綺麗な人ね。」

「え？ 何の話？」

「仲野くんのお姉さんのことよ。」

「…僕？ 僕は姉なんていないって。吉岡さんも知ってるじゃん…」

…そういえばそうよ。

猛に似てたから、疑わなかったけど…あれは一体誰なんだろう？

…考えれば考えるほどに、頭に【？】が浮かぶ…

「きつと、人違いだと思うよ？」

「…はつきり名前も言われたわ。」

「また、アンタ…得意の妄想じゃないの？」

「…それにしても、鮮明に覚えてるのよね…」

…うん…考えてもわからない…

……………お腹空いたなあ…

… あ、食欲もしゃしゃり出てきたわ。

私は悩みに悩んで…食欲を優先した。

…結局お弁当は、お家で食べることになったんだけどね…

… あれ…誰なんだろ？…

第十四話・……………誰？（後書き）

はい、作者です。あまり謎が増えすぎても困るので『姉』と書きましたが、ばらし過ぎかも…沙織もいろいろ悩めます。では、また次回…

## 第十五話・夏休み、最大の危機！（前書き）

次に続くので、中途半端なところで終わってます…では、どうぞ。

## 第十五話・夏休み、最大の危機！

「…いや、長かった…」

「大袈裟ね、猛くん。」

「僕にとっては、今日が一ヶ月で一番嬉しい日ですから…大袈裟じゃないですよ！」

「わかってるわよ。うん、じゃあ…はい！」

真理絵さんは、鍵付きの引き出しから…茶封筒を取り出した。

…今日は給料日！…中身はもちろん…

…いや、お久しぶりです、諭吉さん！…今月も、お世話になります！

僕は真理絵さんに深々と頭を下げた後、敬意を表して諭吉さんにも感謝をする。

「…相変わらず、お金を大事にするんだね？」

「当たり前です！ 諭吉さんがいないと…僕は生きていきません。」

「ま、それもそっか。」

「…ひい、ふう、みい………よし、いつもよりも頑張った！」

「夏休みで、たくさん働いてたもんね。」

真理絵さんが、感心感心…と言いながら戸締まりをしだした。

僕も浮かれてる場合ではないので、一緒に片付けを始める。

…明日は久しぶりに、駅前の焼き肉屋でも行こっかな!？…

一ヶ月に一度の楽しみが、食べ放題の焼き肉というのも淋しいけど…僕にとっては至福のひと時である。

…その焼き肉屋で、肉を馬鹿食いして…高校生の多大な食欲を抑えていることは、言うまでもない。

その後の作業を、無心で取り組んで…いつもより早く終わらせた。

…明日は3Kg、太って帰ろう!

…我ながら、小さな目標だと思うけど…

…あれ?…電気…

僕は部屋の明かりがついてるのに気付いて、吉岡さんが部屋で待ってるんだと思った。

…急いで鍵を開けると、玄関には二つ履物が並べられている。

「…そつか…吉岡さん、一人じゃないんだ…」

「いたら悪い？」

「うわ！…た、ただいま…」

「おかえり。やっぱり私は、お邪魔かしら？」

…ど、どこにでもいるな…この人…

入り口で立ちながら待っていた松永さんは、僕の独り言を聞いてクスクスと笑っている。

…この人がいると、僕と吉岡さんは二人つきりになれないんだよなあ…

松永さんの存在を不思議に思った僕は、松永さんの先祖は忍者かどうかなのか…吉岡さんに聞くことにした。

「吉岡さん、聞いてよ。松永さんが…」

「……………」



「……………あ……」  
「……スー……スー……」

……後ろからは、座ってるように見えた吉岡さんが……カワイイ寝息をたてて寝ている。

膝にはクッションを置いて、ソファーにもたれながら……何ともまあ、無防備な姿だ。

……男の部屋で、そんなにカワイイ寝顔をしてたら……襲われても文句は言えないよね……

僕は少し忍び足で、吉岡さんのソファーに近づいていく。

軽く顔にかかった髪を、手でどかしながら……僕の唇が少しだけ、吉岡さんの唇に触れた……

……………反応なし。

心の声がする……『起こしてあげる』という優しい声と、『もう少し強めにいけ』と叫ぶ声の二つだ……

……僕の判断は……

「……吉岡さん、起きて。吉岡さん……」  
「……………ん、ん……あ、猛……」

「吉岡さん、ただいま。」

「…おかえう！！？」

…肩をゆすつて起こした吉岡さんの口を、僕の口で塞ぐ…

吉岡さんは、手足をバタバタさせていたけど…力で押さえて強引にキスを続けた。

…すぐに抵抗は大人しくなり、吉岡さんの体から拒否感が消えていく…

ゆっくり…顔を離れた…

「……………バカ……………」

「ごめんね…心を裏切れなかったんだ。」

「…許さない…もう話さない……………」

「そ、そんな……………」

…怒った吉岡さんは、膝を抱えて顔を伏せた。

……………この姿も、やっぱり絵になるなあ……………

…冗談が言える雰囲気ではないので、僕は必死に謝る。

「……………」

「ごめんなさい。許してください。」

「……………」

「もうしません。だから機嫌な……………」

「……………してくれないなら、もっと許さない……………」

……………ん？……………

突然の言葉に意味がわからなかったので、整理してみよう。

…僕が勝手にキスしたら、吉岡さんは怒った…

…もうしないって謝ったら、それなら許さないと言われた…

……………どういうこと？

僕は一旦悩んでしまうと、正解が出てこなくなる…

……………あ、そうだ！

部屋の隅に立っている、歩く電子辞書に僕は答えを聞いてみる…

「…松永さん…助けてくれませんか？」

「……………私は邪魔なんですよ？」

「いえ、そんな…滅相もない…」

「それに勝手にキスしたのは、仲野くんじゃないの。」

「…魔がさしたんです…お願いしますよ…」

「………はぁ…仕方ないわね…」

…さすが松永さん！　こんな時こそ、頼りになるなぁ…

本当に身勝手だと思うが、すべてを松永さんに任せることにした。

…松永さんはソファアの後ろから、吉岡さんの耳に何かを呟いてる。

すると、吉岡さんが顔をあげて僕を見る…その顔はフェラーリより鮮やかな赤だった…

「……………サイテー……………」

「？」

「しょうがないでしょ？…仲野くんは、男なんだから…」

「…そうよね。猛は…男だもんね…」

「……？」

よくはわかりませんが、何となく解決しました。

…吉岡さんが『準備してくるから』…と言って、自分の部屋に帰っていく。

…恥ずかしそうな…嬉しそうな…表現しづらい顔のままだった。

松永さんは部屋に残ったので、少しおかしい吉岡さんの様子を聞いてみる。

「…沙織は今からお風呂よ。」

「この時間から？…もう夜中の1時に近いのに…」

「…だって女の子なら、セックスする前にお風呂に入るのは普通の………」

「…吉岡さんに、何を話したの？」

「えーっとね…沙織が凄く怒ってたから、『仲野くんは沙織とセックスがしたいのよ』…って話したの。」

「……………僕に了承もなしに？」

「だって仲野くん、私にすべてを任せたわよね？」

「あー…そういえば任せました。」

つまり、僕が悪いんですね…アハハ…

…明日は焼き肉を食べに行くし、軽くお腹を空かす意味でも……………

「…って、出来ないよ………！」

「もう遅いわね…沙織はやる気だし。」

「ど、どうしよう………」

「諦めて、やっちゃんええば？」

…諦めて、好きな女の子とエッチする…

…おかしい…絶対変だ…

どうにかして、吉岡さんを説得しなければ…

…エッチしたら戻れないんだろうなあ…

## 第十五話・夏休み、最大の危機！（後書き）

はい、作者です。【姉】が登場するのはもう少し先ですから、いままでのラブラブな二人を書いてみました。もちろん、次はいよいよ沙織目線からです。では、次回もお楽しみに。



## 第十六話・人生、最大のチャンス！（前書き）

…土日が一番忙しいって、どうなんでしょうか…では、どうぞ…

## 第十六話・人生、最大のチャンス！

…よく…洗わなきゃ…

私は一度洗い終わった体を丁寧に洗いだす…二回も洗う理由は、一つしかない。

…まったく！ 勝手なのよね…無理矢理キスしたくせに、その上セックスもなんて…まあ、少しは嬉しいけどさ…

猛への文句ばかり心に浮かぶけど…鏡を覗くと、締まりのない二ヤけた微笑みの顔があった。

…でも、猛からあんなに激しくキスされたこと…今までなかった…

鏡を見ながら、自分の唇に人差し指で触れる…

私がキスすることはたくさんあっても、猛がキスしてくれることは…本当に少ない。

私に興味ないのかも…と心の奥深くで思い始めていた矢先、あんな強引に愛を示した猛のキスで…快感を感じてしまった。

だけど、私だって女の子…無理矢理キスされて、嬉しいなんて言えるわけではない。

膝を抱えてカワイイ私をアピールしつつ…怒ったフリをした。

…だって、本気で怒ったら…普通は部屋から出ていくわよ…

それからあーだこーだで…こうなっている。

…ついに、私も…大人になるんだ…

そろそろお風呂を出ようと思った私は…あることに気付く。

…そういえば、二人とも裸になるから…エアコンは消すわよね…

…エアコンを消しちゃうと、暑いから汗かいて…臭わないかしら？…

…くだらないことが気になってしまう私は…もう一度、体を洗いだした…

…下着はピンク、香水はもちろん…お気に入りのエンジェ　ハート…

私は自分の魅力を再確認すると、ノックして猛の部屋に入る…

猛の部屋へ行く時だけのスリッパを脱いで、猛が待っているリビン

グへと向かう。

…蛍光灯はついてないが、スタンド式の間接照明の光は…猛の存在を確認させてくれる。

よく見ると、ソファアに座っている猛はさっきと服が違っ…きつと猛も、軽くシャワーを浴びたのだろう…

「…沙織、こっちおいでよ。」

「……………フン！ まだ、許したわけじゃないからね！？」

「…そっか…僕のこと、怒ってるよね…」

「…と、隣には…座ってあげてもいいわよ？」

セックスの話で、機嫌が良くなったと思われたくないの…まだ怒ってる感じを出しつつも、私は猛の隣に座った。

…あう…早く抱きしめてほしいのに…！…

こんな時こそ、ガバツ！…と襲ってほしい私は、猛を見つめて聞いた。

「…ちゃんと反省した？」

「うん…だから、許してほしい。」

「……………ふ…仕方ないから、今回だけは不問にしてあげる。」

「本当！？…良かったあ…」

…許したんだから、早く抱きしめなさいよ！…

今日のテーマが【大人の女性】である私としては…自分から抱きつくわけにはいかない。

…作戦としては、猛からの誘いを一度は断って…『本当は乗り気じゃないのよ？』…みたいなことを言って、しつこい猛に仕方なくセックスさせてあげる…カッコイイ女を演じたいのに…

しかし、現実には甘くない…猛は私を誘うどころか、近づいても来ない。

…この、あと50cmが遠く感じちゃう…

大人の私はちよつとずつ…猛に近づいていくことにした…

「……………沙織？」

「あ、ち、違うわよ！？ 誰も抱きしめてほしいから、近づいてるんじゃない…」

「…抱きしめてほしいんだね？…いいよ。おいで沙織…」

「……………！…だから…違うつてば…」

…うう…完全に、墓穴を掘っちゃった…

猛はいつもの笑顔で、私を胸元へ誘導している。

…私、今日は負けないんだから！

意識は半分ぐらい負けていたけど、私は何とか…誘惑に勝った。

「あれ？ いつもなら、飛んでくるのに…」

「そう毎回、毎回…私が抱きつくと思わないでよね！」

「じゃあ、あと五秒だけ待って…それでも沙織が抱きつかないなら、僕は寝るからね？」

「え！？…そ、それは…」

「はい、うー…よーん…」

…嘘よ、絶対ウソ！…

その行為が、私を試してることを…ちゃんと理解している。

…猛がセックスしたいって言ったんだから…私が抱きつく必要はないわ…

ある意味、この戦いは…飛びついたら負けなのだ…

「勝手にすれば？」  
「へ。じゃあ、さーんにー」  
「……………」

…ひ、人を小バカにして…

今日だけは、猛の手の平で踊るわけにはいかない…

…そうよ、私は大人の女なんだから…大人の女…大人の…大人…おと…お……………」

「…いーち…ゼツ！…！」

「……………この…ペテン師……………」

「アハハ！ 残り0・5秒で沈んだね。」

「…こんなの卑怯よ！…私が耐えられるわけないじゃない…」  
「知ってたよ…ごめんね沙織。」

…作戦失敗…通常モードに移行します…

時間ギリギリに猛に抱きついた私は、今日の目標を諦めた。

…猛…猛、猛…！…

猛の胸に顔を埋めながら、目一杯の力で抱きしめる…いつもと一緒

だ…

そして猛も私に向かって、いつもと変わらない…同じセリフを話します。

「…沙織は本当に、カワイイよ…」

「ねえ、猛…キスして…」

「…じゃあもう少し…顔を上げて…」

私のあごに、優しく手が添えられる…

そっと触れた唇が、私の気持ちを一気に高めた…

指で猛の胸に、8の字を描きながら…おねだりを始める…

「…猛…あのね、私ね…もう…我慢できないのよ…」

「……………エッチのこと?」

「…うん…猛も、したいんでしょう?」

「……………」

私の言葉に、猛は黙ってしまふ。



…猛、何でそんな…悲しそうな顔するの？…

黙ってては、始まらないので…恐る恐る聞く。

「どうか…したの？」

「…僕たちは、このままじゃダメなのかな？」

「…え？…どういうこと？」

「僕も、沙織とエッチをしたいと思うよ？…でもそれ以上に、今の関係が壊れるのが怖いんだ…」

…今の私たちが壊れる…

こんなに好きで、頭の中は猛でいっぱいなのに…想像もできない。

想像できないから、不安もない…だって私は運命の人に、巡り会えたんだと信じているから…

「猛は、考えすぎなのよ…先の心配したってキリがないのよ？」

「沙織のことだから、常に考えるんだって…」

「…セックスして、猛が嫌いになるわけじゃないんだし…とにかく、深く考えちゃダメ！」

「深く考えなきゃ、僕は沙織を幸せに出来ないよ！」

…まったく、猛は真面目すぎるのよ！

猛の優しさが、今はただの嫌がらせにしか見えていない私は…イライラがピークに達しそうだ。

…どうにかして、猛の心を揺さぶらなきゃ…

ひたすら考えて、私の頭は一つの答えをだす…

「…沙織、大丈夫？…顔がハバネロより赤いよ？」

「……………」

「沙織？…聞ってる？」

「……………」

「さおう！！！！？」

…エッチな気分らせてやるわ！

私の顔を覗き込んだ猛に、キスをした…ここまでは、いつもと変わらない。

私はそこから…一歩踏み込んだ。

強引に舌を、猛の口へと突っ込む…

猛の顔を見たが、そんなに驚いていない…なぜか悔しい。

…猛も…中々やるわね…

猛が私の舌に、舌をすり合わせる…いやらしい、大人のキスが始まった…

…マンガなら、このあと必ずセックスしてたわ…

………5〜6分ぐらい、口の中を掻き乱すと…服まで垂れるほどの唾液が溢れている。

さすがに疲れたので、私から顔を離れた…

「あゝ…舌がつりそうよ…」

「うん…僕も結構、痛いかな…」

「ねえ猛…セックスしたくない？」

「………わかった。それなら一つ、約束してくれる？」

「なにを？」

「…沙織はこれから一生、僕以外とエッチしないって…」

こんな時だけ回転の早い私の頭には、その一言の意味が光のスピードより早く理解できた。

…これ…プロポーズだよね…

めずらしく猛が顔を赤くしている…自分のセリフに、照れているの  
だろう…

…【一生】か…あんまり好きな言葉じゃないなあ…

私は猛に、答えを返す…

「【永遠】…じゃダメ？」

「…は？」

「一生つてさ、死んだら終わりでしょ？…私は、死んで生まれ変わっても…猛としかセックスしないつもり。」

「…うん、そうだね…僕も永遠がいい！」

「じゃあ改めて、これから永遠に…よろしくね。」

…強く、ただひたすらに強く…猛が私を抱きしめた。

…もう私たちは、離れないんだね…

私も強く抱きしめていく…二人の間に、邪魔するものは何も無かった…

…ベットの上に、一枚の紙が置いてある。

玲奈の字で…どうやら、私たちに書いた手紙みたいだ…

（…危機管理の欠けた、二人に祝福を…）

…？…危機管理？

…私はわからなかったけど、猛はすぐに気づいたらしい。

「…さすが、松永さん…何でもお見通しって感じだね。」

「どういうこと？」

「…ほら、それ。」

…逆…逆にム力つくわね…あの女…

コンドームが三つ、手紙の裏に張られていた…

## 第十六話・人生、最大のチャンス！（後書き）

はい、作者です。沙織は猛の悩みを殆ど無視してましたね…二人を別々に書くと、沙織のわがままが特に目立ちます。理由は、私が沙織をメインで考えてるからかも…

…では、また次回…



## 第十七話・夜が明けて（前書き）

…更新が遅くなってますね。では、どうぞ…

## 第十七話・夜が明けて

……空が結構…明るくなってきたな…

僕は窓を見つめて、朝が訪れたことを感じる。

ベットに横になりながら、僕が考えてることは…一つだった…

…早く…眠りたいよお…

…エッチをしたら、沙織はすぐに眠ってしまった。

…エッチの痛みや緊張のせいか、それともいつものことか…揺すろ  
うとも、起きる気配がしない。

無理やり起こしたらかわいそうなので…朝まで、僕のベットで寝か

してあげることにした。

そこまでは…良かった…

…僕は着替えてソファで寝ていたのに、沙織がいきなり夜中泣き出して、『猛が隣にいなきゃ、不安で死んじゃう』…ということなので、朝まで手を繋いであげること…

……そのせいで、僕は一睡もできませんでした。

手を繋いでることが原因ではなく、沙織の隣で寝ていること自体が…僕の睡眠妨害になっている。

…セキュリティゼロ状態で、隣には裸の沙織が寝ている…このシチュエーションで僕の心臓の音は、バイクエンジンのように高鳴ってるのに…熟睡できると思いますか？

……まあ、この裸を…きのう美味しく頂いたのも事実なんですけど…とりあえず沙織に背中を向けて、カーテンのしわをひたすら数えながら暇を潰す…そして今まさに、日が昇り始めている。

…カーテンって、意外に汚れてるな…

…ってそんなことはどうでもいいから、早く眠りたいんですよ…

「……………ん…ん…ふあ…朝…?…」

「あ、沙織…やっと起きたああ!?!……………んだね…」

「あ、猛の手…エへへ…握っててくれたんだ…やっぱり猛って…優しいのね…」

「う、うん…まあ…」

「…うふふ、おやすみ…タケル……………」

「……………はい…おやすみ…」

…ああ…寝ちゃった…

沙織は起きてすぐ僕の手を確認して、安心すると…ふたたび眠る。

起こしても良かったけど、もう少し寝かしててもいいかな？…と思えた僕は、沙織の額に軽くキスをすると…ふたたび後ろを向いた。

……………毛布の間から沙織の胸が見えて、しばらく裸を観察したい…というわけではありません。

決してありません。

…そうじゃなくて。

……………違うんだよ？

僕はそんな男じゃない…けれど、チラッと見えたような……………

「…あら…寝ている女の子を襲うのは、さすがに卑怯じゃない？」  
「あ！ち、違うよ！…毛布が少し乱れてたから…」

「…どうだかねえ…仲野くんって、隠れエロ親父だからねえ…」  
「親父じゃないし！…というより松永さんこそ、勝手に入ってこないでよ！」

沙織の体を毛布で隠してあげようとしただけなのに、こんな時に限って…松永さんが部屋に来る。

…盗撮されてる可能性…考えねば…

………ちなみに、本当に【毛布を整えるため】が目的だったことを…理解してほしい。

「…私は、あなたたちの監視役だからね…それはそうとして、仲野くん…昨日はどうでしたか？ 良い、普通、悪いのうちから選んで答えて。」

「…なんで松永さんに、街頭アンケートのような感覚で…」

「裸を覗いてたことを…沙織にチクるわよ？」

「………良かったです…」

「なるほど。では初めて仲野くんの、【竹の子】を見たときの沙織の表情をですね………」

…これ、凄く恥ずかしいんだけど…

松永さんが事細かに聞いてくる…それこそ、具体的にだ。

…うわ、メモ取りだした…僕はこれからどうなるんだ？…

沙織の手を握りながら、ベットに座った僕は…紙に書き記す意味を聞いた…

「…これ？…単なる脅迫材料よ。」

「人のプライベートで、脅迫なんてしないでよ！…！」

「仲野くんには関係ないの。これは沙織に対する…最後の切り札っただけで…」

「…切り札…ですか…」

…いつも沙織のわがままに、振り回されてるんだろうなあ…

沙織を見ながら、ため息をつく松永さんの顔は…苦勞がにじみ出ていた。

…仕方がないか…これぐらい我慢して、松永さんに協力しよう…

少しだけ、いじめられる沙織を見てみたい気持ちもあり…かなりの情報を与えた。

それからしばらくして………わがまま姫が目覚める…

「あう？…なんで玲奈…部屋にいるの？…」

「あら、沙織…私がいたらダメなの？」

「私と猛の甘〜い朝が…なくなっちゃう…」

「ま、そんな裸じゃ…男はデレデレよね。」

「え？……………キヤ〜！！！！二人とも早く出てっ！」

僕と松永さんを、鋭い目で睨みつけている…沙織は脚と肩を毛布に隠し、座っている僕の体を手で押している。

…僕、一言も喋ってないのに…

沙織に叩き出された僕と松永さんは、リビングのソファーに向かい合わせで座る。

…そういえば昨日、給料を貰ったんだっけ…

松永さんの白いスーツ姿で思いだした僕は、すぐに立ち上がって引き出しを開けた。

財布を取り出して、松永さんに確認する…

「…沙織がうるさいから、今のうちに渡していいかな？」

「そうね、その方が話は早いし…」

「……………はい、三万円。相変わらず少ないけど…」

「いち、に…確かに三万、ちゃんと預かったわ。」

本当は沙織に渡すはずの部屋の家賃を、松永さんに預けるのには……理由がある。

沙織に最初のお金を渡した時、怒りだしたからだ……

……沙織が言うには、僕のお金を受け取ると……恋人じゃなくなるらしい。

そのままお金を払わずに住むなんて出来ないの、松永さんを窓口として……内緒で払っている。

……こっちのわがままも、たまには聞いてほしい……なんて、絶対に言えない僕は何なんですかね？

「……沙織を包み込める、唯一の存在……って感じだね。」

「僕以外で沙織を好きになるなんて、無理なんですか？」

「無理ムリ！ 私もたまに、これは酷い……と思う時があるもの。」

「………浮気の心配は、しなくてすみそうだ……」

松永さんが、クスクスと笑った。

つられて僕も、アハハと笑いだす……



《バン！！！！！！！》

…急に大きな音がして、体がビクッ！…となる。

寢室のドアを、沙織が蹴って閉めたようだ。

……………どうやら、お姫様はご立腹らしい。

「……………なんで楽しそうに、二人だけで喋ってるのよ…」

「えー？…松永さんと、普通に話を…」

「…浮気がどうのこうの言ってたでしょ…聞いてたんだから…」

「アンタ、まさか…仲野ちゃんと私がどうにかなるとでも？…それはないわ、ありえない。」

「…完全否定されると、僕の立場が…」

…松永さんと二人して、声をあげて笑いあった。

その様子を見て、沙織は床を…ドンッドンッ！…と踏み鳴らす。

そして僕の隣に座ると、腕を組んで…松永さんを睨んだ。

「私の彼に、手を出さないでよね！」

「沙織…松永さんと僕は、そんな関係にならないよ？」

「…猛も猛よ…私以外の女と、あんな楽しそうに話しちゃって…」  
「だから、松永さんとは…」

僕と松永さんから、沙織は顔を反らした…当然、腕は組んだまま。

…沙織の嫉妬なんて、僕にはもったいないよ…

沙織を抱き寄せて、松永さんに聞こえないように…耳元で囁いてあげる。

「…昨日あんなに…沙織を愛してるって言ったろ？…」

「でも…玲奈はカワイイし、何でも出来るから…それに私なんて…」

「…そんなことないよ。料理が上手で、スタイルも沙織の方が…」

「…本当？」

「沙織に嘘をついたこと…あつたっけ？」

…沙織は首を横に振る。

僕は沙織の顔を覗きこんで、自然に…微笑んだ。

みるみる…真っ赤になる…顔は…僕の大好きな…沙織に…間違い…  
ない…

……沙織……あ……いし……てる……よ……

……あれ？……急に……い……しき……が……

「……猛？……あ……」

「……」

「沙織？ 仲野くんが、どうかした？」

「……寝ちゃったの。」

## 第十七話・夜が明けて（後書き）

はい、作者です。基本的に沙織の嫉妬が、増してますね。猛は苦勞しますよ…玲奈のメモは、少しずつ出てきますから、お楽しみに。

では、また次回…

第十八話・その気になったのは…（前書き）

更新が遅れてスイマセン…内容も、特に重要ではありませんが…どうぞ…

## 第十八話・その気になったのは…

「…ねえ沙織…僕たち、このままでいいの？」

「良いに決まってるじゃない。」

「だってせっかくの日曜で、バイトも休みなんだよ？…ずっとソファに座ってるだけなんてさ…」

…私と猛は、相変わらず出無精だった。

二人とも、基本的に私服はジーンズとＴシャツで…わざわざ相手に、気を使うことなんてなくなっている。

…気は使わなくても、お互いが相手を思っている…理想のカップルとは、まさに私たちのことなのかもしれないわね。

…朝からダラダラと、夜になるまで猛に寄り添うのが…今のお気に入りに…

「私はこれでいいの！…猛と二人で、ゆっくりと過ごす夏休みが幸せなのよ…」

「でも、明日からがつ…」

「あー！あー！あー！…！」

…あーあー…何も聞こえない…

耳に手をあてて、大声をだしながら…猛の声を遮った。

今の私には、その情報は受け入れられない…

しかし猛は、私の両手を掴むと無理やり下げた。

そして、アハハ！…と笑いながら、禁句を平然と語りだす…

「現実を受け入れなきゃダメだよ！？…今日で、夏休みはおしまいなんだから！」

「やめて…私は違うの！ 私はあと一ヶ月、休みなんだから！」

「いい？…沙織は、明日から…」

「いや…イヤー！！！！！！！」

「…学校なんだよ。」

……………もうダメ…生きていけない…

私は全身の力が抜けて、猛の膝に倒れ込む…

猛は、私の悲しみを無視して…爆笑していた。

…夏休みが終わるのに、猛はなんで嬉しそうなんだろ？…

私は仰向けになり、ひざ枕の形で猛を見上げる…

猛はすぐに私の髪を撫でて、笑顔のまま私と見つめ合った…

「…猛、逆よ。」

「へ？…なにが逆なの？」

「普通は、女の子がひざ枕してあげるのに…猛がしてどつするのよ？」

「そうかなあ…別にいいと思うけど…」

「ダゝメ！…うりゃ！」

猛の首に両手をまわして、一気に起き上がる。

その反動で、猛は私の方へ倒れてきた…

…作戦通り、見事に入れ代わる…けど、猛は首が痛そうだ。

「…うふふ…ありがたく思いなさいよ？ 世界でただ一人、私のひざ枕を体験できるんだから。」

「く、首が痛いよ…強引だなあ…」

「嫌なの？」

「……………ちよつと…」



…むっ！ この、この！

痛めた首を狙い、私は猛にチョップした。

…私の愛を嫌がるなら…地獄に堕ちればいいのよ…

痛がる猛を見つめながら、私は命令口調で囁く…

「…私に、愛してるって言いなさい。」

「そ、それは強制されて言うことじゃ…」

「私に逆らうっていうの!?!」

「グガッ!…く、首は…締めな…いで…」

「言えっ!…愛してると言うのよっ!?!…」

…猛を殺して私も死んでやるっ!…なんちゃて…

本当のところ、チョップの段階で…あまり力を入れていない。

…早く言わないと…本気でやっちゃうからね…

ややオーバーアクションで、猛の首に手を掛けている…するとついに、猛の心が折れた。

「…わかった、言うよ…言うから許して…」

「わかればよろしい。さっそく、言ってもらおうかしら？」

「………沙織、愛してる………」

………あ、ズルイ………何でそんな………真剣に………

私は半分悪ふざけだったのに、猛は急にひざから起き上がり……真面目に私を見つめる。

………ここで何か言われたら絶対、抱きついちゃう………

猛の……『愛してる』……の一言で、麻薬の禁断症状のように体が震えだした……ある意味、【猛中毒】ではあるけど……

………お願い、猛………今日だけは何も言わないで………私、少しは大人にな………

「………おいでよ、沙織………」

「やっぱりダメ！………私も愛してる………！！！！！！！」

「………よしよし………このほうが、僕たちらしいよね。」

「ね〜キスしてよ！………私をその気にする猛がいけないんだから、ちゃんとチュッチュして！」

「………相変わらずわがままで、甘えん坊だなあ………」

…そんなこと言って、猛も乗り気なくせに…

猛のほうから私の唇に、軽くキスをしてきた。

…一度したら、私たちの愛は…もう止まらない…

舌を絡めては、短いキスを何度かして…見つめ合いお互いの名前を呼ぶと、また舌を絡めあう…

…少し前の私たちなら、これで満足していたはずである。

……………体を重ねる前の私なら…

「…猛…もう、我慢できないの…」

「松永さんに止められてるから、やめとこつよ…」

「…私たちのセックスを、玲奈に止める権利なんてないわよ。」

「そうだけど…コンドームも持っていないし…」

「…そんなの、必要ないでしょ?…」

ソファーに猛を押し倒し、その上に私が乗る。

…私の誘惑に、勝てるのかしら?…

私はＴシャツを脱いで、白いブラを露出させた。

急な私の行動に、猛は目を閉じて横を向く…

「ダ、ダメだって沙織！」

「…そのまま目を閉じてれば、私の勝手な行動…ってことで解決するわよ？」

「そんなこと出来ない！…早く服を来て、そこをどいてよ…」

「仕方ないわね…じゃあブラをはずして。」

「！…そ、そんな意味ないじゃないか！？」

「…はずしたら、どいてあげる。そろとも…私とセックスしたい？」

私になにを言っても無駄…ということがよくわかってる猛は、こっちを見ずにブラに触れようとしていた。

フロントホックだから、当然のように…猛の手が胸に触れる。

…クッククク…イジワルしちゃお！

「アン！…猛の触りかた、やらしいわね…ンアア！」

「そ、そんな声出されたら…はずせないよ！」

「猛の手が、感じちゃうの…ハウン！」

「ダメだ、こうなったら…た…」

「……………た？」

「助けて！…松永さん！………！」

私が甘美な声を出すと、猛はソファーに寝たまま…大きな声で無敵のサイボーグを呼び出した。

…うふふ、バカね…玲奈は今日、大事な用事で下の部屋にもいな…

《ゴン！！！！》

…鈍い音と共に、私の頭にスゴイ痛みが走った。

一瞬、意識が飛びかけたけど…すぐに猛が支えてくれる。

…猛が私に、こんなことするはずない…

…奴ね…この部屋に奴がいるんだわ…

場所がわからず、私は首をキョロキョロさせて…敵の居所を探す…

「真後ろだっつーの！！！」

「アイタ！？…ちよつと玲奈！　なんで叩くの……………よ？」

「コラ！！！！　前から、バカだバカだと思ってたけど…今日という今日は本気で怒ったわ！」

「う…そんな怒らなくても…」

「服を着て、そこに座りなさい！！！！！」

…マ、マジギレしてる…おとなしく従ったほうが身のためだね…

向かいのソファーに腰掛けた玲奈は…鬼の形相をしている。

急いでTシャツを着ると、猛と並ぶように座った。

…玲奈の説教が始まる…長くなりそうな雰囲気ね…

……………30分経過……………

…そろそろ１時間ぐらいだわ…

…もう嫌、聞きたくないわよ…誰か止めて…

お説教は最初の１０分間だけで、その後は……

「…それにより、生理と呼ばれる現象が女の子に起きるのです。」

「なるほど…排卵されて、血が出ると…」

「セックスを行う際は…この排卵日を目安に妊娠しやすい、しにくい日を計算しましょう。」

「…だから、安全日とか危険日ってわかるんだ…」

…なんで、こうなったのかしら…

玲奈が猛に、『女性の体の神秘』…という講義をしている。

始めは、妊娠したら周りに迷惑を掛ける…みたいな話をしてたのに、話がそれた結果がこれだ…

…もちろん、そらしたのは私だけど…

『何で妊娠するの?』…とか聞いちゃったから、玲奈先生の保健の授業が行われている。

基本的に真面目な猛は、授業となると…一切妥協を許さない。

…こんな時にまで、質問するってどうなの?

早く終わってほしい私を無視して、延々と授業は続いていく…

「……………あ、こんな時間だわ。実はまだ、用事が終わってないのよ。もうおしまいね…」

「…本当?…やっと解放された…」

「そうですか。じゃあ、最後に一つだけ…」

「いいわよ、仲野くん…何が聞きたいの?」

「…ちゃんと、避妊するから…沙織とエッチしてもいいかな?」

……………もう、バカ!…私の前でそんなこと…

立ち上がった玲奈に、面と向かって頼んだ猛の肩を…2、3回、照れ隠しで叩いた。

…バカバカバカ…もっと早く言ってよ…

嬉しくて仕方なかった私が…その状況に耐えられるわけがない。

抱きついて…溢れる思いをキスで伝えた…



「まあ、一回してるし…仲野くんなら、ちゃんと避妊もするだろうし…第一、こんなラブラブな二人を抑えるのは難しいからね…」

「……………」

「聞いてる？…おい、バカップル…」

「愛してる、愛してるの…猛…」

「僕もだよ…もう沙織以外は愛せない…」

「……………はいはい…勝手にしてちょうだい。」

…学校…行きたくない…

…一日中、猛と過ごしていたいなあ……………

第十八話・その気になったのは…（後書き）

はい、作者です。本当はしばらく小説が書けない状況なんですけど…感想が嬉しくて、ほとんど寝ずに頑張りました。小説の内容は短いんですけど、何せ仕事が…って愚痴をこぼしても無駄ですね。

いよいよ二学期ですけど、二人は相変わらず…  
というわけにはいきません。楽しみにしてて下さい…

…では、また次回…

第十九話・二日目の朝（前書き）

二学期突入です。では、どうぞ…

## 第十九話・二日目の朝

…洗濯物は干した。

…お弁当は、冷めるのを待って詰めるだけ。

…掃除はこれといって、必要なさそうだ。

…制服にアイロンも掛けたし、残る問題は特に……

「…猛…喉が渴いたの…お水が飲みたいなあ…」

「あのね沙織、朝は何かと忙しいから…できれば自分で…」

「かゝわゝいゝたゝの!…氷も入れてね…」

「…はい、入れますよ。」

…最大の問題は、沙織のわがままかも…

僕は学校の準備が済んだのに、パジャマ姿の沙織は…未だにソファ  
ーで、丸まっている。

時間はまだ6時半だから、眠たい気持ちもわかるけれど…

…本当に、朝は苦手なんだろうなあ…せつかくの美人が台なしだよ…

ボサボサの髪、しわしわのパジャマ…はつきり言って、かなりだし  
ない格好をしている。

…これでも魅力的だから、凄く不思議だ…

起きているはずだけど、眠気に勝てず目を閉じている沙織は…もの  
すごくカワイイ。

…きつとわがままだって、沙織の美しさを引き立ててるに……

「…まだ？」

「あ、はい。今すぐに…」

「も…早くしてよね…玲奈なら、私を待たせたことなんてないの  
に…」

「…スイマセン。」

…前言撤回…わがままが酷すぎます。

ソファーにちゃんと座り直した沙織が、まだ目を開けずに手招きす  
る。

…どうにかして、懲らしめてやりたい…

コップに氷を三つ入れて、ミネラルウォーターを注いだ。

…そうだ！ 沙織のわがままに従えばいいんだ…

ソファアの側に立って、半分寝てる沙織に話し掛ける…

「…沙織、お水だよ。」

「ありがとね…早く私にちょうだい…」

「飲ましてあげるから、そのまま口を開けて…」

「そう？…あゝん…」

「行くよ……………」

「！！！！！！んー！！んゝ！！？」

…沙織、美味しい？…

自分の口に水を含んで、キスをしながら…沙織の喉元に水を流し込む。

沙織は過度のサービスに驚き、一気に目覚めたようだ。

…わがまますぎるお姫様には、オシオキが必要だよね…

一口分の水を、沙織の口へ移動させると…沙織が急に咳き込んだ。

「ゲホッ、オホ……………猛のバカ！…驚いて気管に入ったじゃない！」

「ご、ごめん！…急に水なんか呑んだから…」

「もう怒ったわ！…猛が勝手にキスしたから…私、今日は学校行か

ない！」

「ええ！？…そんな…沙織、怒らないでよ…」  
「…ふん！」

沙織は顔を真っ赤にして、頬を膨らませた。

…どうしよう…二日目にして沙織が登校拒否したら、完全に僕の責任だ…

松永さんと呼ばば、全てが解決することを知っていたけど…自分の手で、沙織の機嫌を直したい。

…松永さんにはすっかり頼ってちゃ進歩しないし…沙織の扱いにも慣れなければ…

沙織の隣に腰を降ろして、顔を見つめようとしたけど…沙織は後ろを向いてしまった。

…仕方ないか…少し苦手だけど、沙織の喜びそうな手段で…

「……………沙織…」

「あ、やめてよ！勝手に触らないで…」

「僕は沙織が好きだから、沙織に触れていたいんだ…それとも、僕を嫌いになったの？」

「私が猛を、嫌いになるわけないでしょ……！」

…うん…まだだな…

沙織の肩に手をまわして、僕は優しく囁いたけど…沙織はこっちを見てもくれない。

…まだ、甘えん坊モードに入らないか…

いつもは、沙織に甘い言葉を囁くだけで…目がウルウルして仔犬のように甘えてくる。

…まだ怒った声をしてるから、もう少し甘い言葉を…

沙織の整っていない髪を撫でながら、僕は沙織の心に侵入する…

「じゃあ、朝から沙織にキスしたことを怒ってるんだね…」

「キスを怒ってないわよ…勝手にしたことを怒ってるの!」

「それなら…僕が今からキスしたいって言っても、沙織は怒らないの?」

「え!?!…そ、それは…時と場合を考えてから…」

「……………沙織…キスしていいかな?…」

僕の言葉に、沙織は動揺を表したが…目を合わせずに黙って頷いた。髪を撫でていた手でそのまま頭を支え、残りの手を沙織の肩に添え



ると…さつきとは違う、優しいキスをした。

2〜3秒で顔を離すと…すでに沙織は、ウルウルとした目で僕を見ている。

…追い打ちしとこう…

沙織の耳元で、小さく…愛してるよ…と言って、温かく微笑んだ。

顔がじわじわと赤くなり、ウルウルしていた目がトロ〜ンとしてきた沙織は…脚が徐々に、僕へと近づいて来ている。

…そろそろかもね…

…3…

…2…

…1…

「…抱きついていいよ…おいで…」  
「はう〜！…猛のバカ〜…こんなのズルいわよ…」

「よしよし…さつきはごめんね、沙織…」  
「私を好きだから、猛はキスをしたんでしょ？…それなら許すしかないじゃない…」

僕の胸に、グリグリと顔を押し当ててくる沙織の髪で…首の辺りがかなりくすぐりたい。

…機嫌は直ったけれど、沙織の性格からして次は…

これまでの経験上、沙織がそのまま離れてくれるわけがない。

…僕が誘惑に負けたら…どうしようもないな…

「…猛、私にキスしたいでしょ！？」

「……………はあ？」

「エへへ…顔にそう書いてあるもの！」

「…そうかなあ…」

「ほ・ら！　してもいいんだよ？…ん…」

…あ、どうしよう…凄くカワイイんですけど…

背中に手をまわし、僕が逃げださないように掴む沙織が…キスを求めて口を尖らせた。

…こんな顔をされたら、理性が崩壊しそうだ…

今すぐにでも抱きしめて、自分の欲望の赴くままに…沙織の体を貪りたくなっている。

…落ち着け、落ち着け…僕は理性の象徴だ…沙織のように、自由に生きるわけにはいかない…

煩悩を心の奥へ蹴飛ばし、深呼吸する…

気持ちが落ちついたのを確認すると、僕は沙織の…額に口づけした。

「…ちょっと！ なんでおでこにするの！？…口にキスしてよ…」

「沙織がちゃんと学校の準備をしたら、キスしてあげる。」

「えゝ！？ やだ、キスしてったらゝ！」

「…準備をしたら、学校へ行くまでずーっと…沙織とキスしちゃうのになあ…」

「……………！！！！！！…約束だからね！」

沙織は少し考えた結果、重力を感じさせない跳びはね方で僕から離れると、自分の部屋に帰っていく。

…良かったあ…素直に信じてくれて…

沙織がいなくなっただけで、僕はキッチンに向かう。

…ごめんね、沙織…嘘はついてないから…

心の中で、何度も何度も自分に言い聞かせながら…二つ分のお弁当を詰め始めた。

「…嘘つき、大っ嫌い!」

「嘘はついてないって…僕が沙織を、ダメすわけないじゃん。」

「…だって、私が部屋に行く前に…玄関で立ってたじゃない!」

「沙織の朝風呂とか、髪の設定待ちで…気付いたら学校の時間になってたんだよ?」

「……………う、うう…」

…実は最初から、時間を計算してたけどね…

窓際の席に座りながら、僕と沙織は口論していた。

すでに教室には、結構の人数がいたけど…僕たちは相変わらず、ラ

ブラブな関係で過ごしている。

ベタベタしていても、誰もつつこまない…というより、むしろカッブルが増えていた。

…このクラスに一体、何が起きてるんだろ？

僕の疑問を、ただ一人の親友が…とても友人とは思えない口の聞き方で、解決してくれる。

「貴様らのせいで、さらにカップルが出来たんだろうが！！！」

「僕たちのせい？…意味わかんないよ、徹！」

「お前らの噂が広まって、学校中カップルが続出してるんだよ！」

「…ふん…」

「ふーん、じゃねえぞ！…あゝ見てて腹が立つ！！！」

…好きな人が出来ることは、良いことなのに…

徹が机に八つ当たりしているのを、僕と沙織は不思議そうに見つめていた。

…ま、こんな荒れてる徹に触れても…良いことはないな…

暴れる徹を無視しながら、また沙織とくだらないお喋りを始める。

…そうだ！

「…沙織から見て、松永さんには好きな人いないの？」

「さあ？…『少なくとも、自分より強い人にしか興味ない』…って  
言ってたわよ？」

「松永さんより強い人が…この世に何人もいないね。」

「あんなにカワイイのに…強すぎる玲奈が、逆にかわいそうだわ…」

…徹にアタックさせようと思ったのに…無理か…

離れた席で、書類を見ながら何やら計算している松永さんは…忙しくて恋も出来ないのだろう。

…徹はともかく、何とか松永さんにはいい人が見つければいいなあ…

とても純粋な気持ちから、僕は松永さんの幸せを願った。

2〜3秒ぐらい松永さんを見つめていたら、沙織に耳を引っ張られたのは…また別の話だけど…

しばらくすると、教室のドアが急に開く。

担任ではなかったけど、とても大人っぽい女性が入って来た。

制服を着ていたが、首に巻かれたスカーフの色のおかげで…先輩だとすぐにわかる。

…誰かを探しているのかな？…

首をキョロキョロしながら、教室を見渡しているその先輩を見て…沙織が急に立ち上がった。

「お、お久しぶりです！」

「あら？…吉岡さんも、猛ちゃんと同じクラスなのね？」

「はい！…猛をお探しでしたら、こっちにいますよ？」

…僕を探してる？

謎の先輩は、沙織の知り合いらしく…どうやら、僕に用事があるようだ。

…誰だろ…見たことないよ…

先輩は僕の席の前に立つと、会釈をしながら挨拶してくる…

「初めまして、猛ちゃん…」

「あ、はい。初めまして…って先輩ですよネ？…僕、見たことないんですけど…」

「それはそうよ。昨日、転校してきたんだから…」

「…え？…転校してきたばかりの先輩が、僕なんか用事ですか？」「バカ、なに言ってるのよ！？…この人は…」

…えーっと…この四ヶ月、いろんなことがありすぎたらしく…【驚く】、という感情が全く起こりません。

普通の人なら人生を揺るがすかもしれない沙織の一言も、僕はあっさり受け入れた…

「この人は、猛のお姉様でしょ！」



…僕に、姉がいたんだ…

……へえ…

## 第十九話・二日目の朝（後書き）

はい、作者です。ついに物語りが終わりがけてきました…悲しいものですね。次回に続きますが、猛の【姉】はどうなるんでしょうか？  
更新が遅れ気味で、誠に申し訳ありません。  
では、また次回…

## 第二十話・だから…誰？（前書き）

設定では、まだ朝です。気にせずに読んで下さい…では、どうぞ…

## 第二十話・だから…誰？

「ね、言ったでしょ！？…お姉様に会ったって。」

「…本当に僕の姉なの？」

「なに言ってるのよ！？…自分のお姉様じゃない。」

「…だって…初めて会ったから…」

…初めて？…そういえばお姉様も、『初めまして』…とか何とか…

猛の前に立つお姉様が、急に他人に見えてきた私は…疑心暗鬼に陥ってしまった。

…私だって二回目だし、お姉様の名前も知らないわ…

お姉様に改めて、ちゃんとした話を聞いてみる。

「…姉弟なのは本当よ？…ただ、半分だけど。」

「…半分？」

「実は私と猛ちゃんは、腹違いの姉弟なの。」

「………猛、【腹違い】って…どういう意味よ？」

「お、おなかが違う？ うゝん…ごめんね、僕もわからない。」

「…父親が同一人物で、母親が別人の御姉弟…という意味ですよ、お嬢様。」

…あ、久しぶりに見る…仕事モードの玲奈だ…

猛と一緒に生活するようになってから、あんまり玲奈の仕事モードは見たこと無かったのに…敬語を使う玲奈が、いつの間にか私の横に立っていた。

…それにしても、なんで急に…ま、まさか！

「玲奈！ あんた、お姉様に好印象を与えて…私から猛を奪う気でしょ！」

「……………そのような考えは一切ございませんので、ご安心下さい。」

「うふふっ…相変わらずお硬いのね？…玲奈さん。」

「はい、お久しぶりです…美鈴様<sup>みすず</sup>。」

……………え、知り合い？

お互いの近況を報告している、玲奈とお姉様は…昔からの顔なじみのようである。

…どうしよう…意味わからなくなってきたわ…

私は淡々と話す二人を、ただ呆然と見つめていた…

…実際は私だけでなく、猛や中谷くんも…二人の会話を気にしてた

らしいけど。

「…そうだわ、自己紹介しなくっちゃね！…私の名前は藤…」

「それはそうと美鈴様、職員室に呼ばれてるはずじゃありませんか？」

「え？…あらやだ、大変だわ。急がなきゃ！」

「ちょ、ちょっと待ってください！…僕との関係を、詳しく説明してから…」

「また遊びに来るから、その時にね。バイバイ！ 猛ちゃん！」

小走り気味に廊下へ向かうお姉様は、手を振りながら長い髪を揺らして…笑顔で帰っていく。

…肝心な話は、何もしないで帰っちゃった…

猛と私は見つめ合って、一体何だったんだろう？…と二人して首を傾げていた。

そんな中で玲奈は、教室を出たお姉様を確認して…180°態度を変える。

「…ふ…急に来るんだから、まったく…」

「玲奈？ 猛のお姉様と、知り合ってたのね。」

「そっか、沙織は会ったこと無いんだっけ。あの人は、ふ……」

……え？……仲野くん？……お姉さん？……」

玲奈の動きが止まった……両手も中途半端な位置で固まり、すべての神経を思考力に回している様子だ。

……自分でも確認してたのに、何を今さら……

15秒ぐらい、脳をフル回転させた玲奈は……話を整理し始める。

「……仲野くんが、美鈴の弟って……本当なの？」

「わからないよ……だってあの先輩がいきなり言い出したことなんだからさ……」

「美鈴が嘘つくわけないし、嘘をつく理由も無い……そう考えると、二人は本当に姉弟……それなら……」

少し考えた玲奈は、書類などを片付けて……教室を出ていく。

……あゝ、はいはい……もう疲れたわ……

状況が理解できない私は、考えるのを諦めて……悩んでる猛を見つめた。

………

…今なら…いいよね…

「！…ウオツ！？」

「あ、何で逃げるのよ？…猛を元気にしたいだけなのに…」

「が、学校でキスはダメだよ！ 皆が見てるじゃないか…」

「玲奈がいなくなったから、チャンスだと思つて。」

猛にはれないように近づいて唇を奪うつもりだったのに、私の作戦は簡単に感づかれてしまう。

それでも強引にしようとしたけど…猛は私の体を掴んで、意地でもキスを拒むつもりのようだ。

周りのクラスメイトは…『沙織ガンバレー！』、『負けずにキスしろー！』…など、私よりの声援が飛び交っている。

…皆を裏切れないから、ここは私も…頑張るしかないわね…

猛に関しては諦めの悪い性格なので、私は何度も猛にアタックしていく。

「うつふつぶ…周りは私の味方よ？ 諦めて私とキスしなさい！」



「人が真剣に悩んでる時に、バカなこと言わないでよ…」  
「何で悩むの？ 本当のお姉さんがいただけじゃない。」  
「でも…今さら実の姉と言われても…」  
「もし自分を捨てた親が現れたなら、猛が複雑な気持ちになるのもわかるわよ？…だけどお姉様は、離れたくて別れたわけじゃないと思うわ。その事情を考えたら…会いに来てくれたことを、素直に喜んであげたら？」

私の言葉に、一瞬…猛の力が弱まった。

…ふっふっふ…隙を見せたわね！

猛に飛びついて膝の上に乗ると、背中に手をまわしてガッチリ抱きしめる。

『おおー！！！！』…などと皆のを感じつつも、目の前のイケメン（笑）…は、私というハンターのテリトリー内に迷い込んだ…小鳥だった。

「…私の勝ち！」

「クッ…めずらしく沙織の話がマジメだと思ったら、僕を騙すためとは…」

「違うわよ…騙すつもりなんて無かったの。ただお姉様のことより、猛とキスする方が大事なだけ！」

「…沙織はそうだけど、僕にしたら…」

「ごちゃごちゃうるさいわね！ どうせ悩むなら、私の胸で悩みな

さい！」

私の最大限の力で、猛をギュッ！と抱き締める。

観念したのか、猛も私の腰へ…手をまわした。

…では、そろそろ…

私たちは10cmの距離で見つめ合って、周りの野次馬を黙らせるぐらいの雰囲気醸し出す。

沈黙の中で、私は小さく『イタダキマス』と呟きながら、猛に唇を重ねた…

…と思ったのに、戻って来た玲奈に襟首を引っ張られ…猛から離されてしまう。

…あと1秒、あと5mmで…ああ…

「調子に乗りすぎです、お嬢様。」

「ううゝ…皆がおだてるから、つい…」

「ついではありません。完全にお嬢様の意思で、仲野様にキスを要求していたではありませんか。」

「…見てたのね…」

自分の席に座らせられた私に向かって、玲奈は怒っている。

しかも無表情、怒る声も一定という…まるで本当の機械みたいだ。

…怒っていることより、今の玲奈自体が怖いわ…

とりあえず聞き流してるけど、早く説教が終わることを私は心から祈っていた。

「まあまあ、松永さん…僕も悪いんだし。」

「…仲野様がそう言って下さるのなら、そろそろ許しても…」

「…猛…かばってくれて、ありがと。」

「かばう?…そんな気はないよ。逃げようと思えばいくらでも逃げられたのに、僕は結局…沙織とキスすることを選んでたから、やっぱり同罪だよ。」

…明らかに私が悪いのに、こんな風に言ってくれるなんて…

隣の席で軽く笑いながら話す猛は…カッコイイ、誰が何と言おうとカッコイイ。

堪えられなくなった私は、懲りずにまた抱きつこうとしたけど…玲奈に頭を叩かれた。

「少しは懲りて下さい、お嬢様。」

「……はい…」

「…ところで、どうして先輩もいないのに…松永さんは敬語なの？」

「あ、それ！…私も気になってたのよ。」

「それはですね、仲野様が…藤ノ宮家の御子息だからです。」

…藤ノ宮家？…

…どこかで聞いたことがあるような…

.....無いようにな.....

## 第二十話・だから…誰？（後書き）

はい、作者です。忙しい中で書いたので、どうもまとまりが無いような…そんな気がします。

気付いている人もいるとは思いますが、美鈴のことはまだ何も語られていません。次回にはある程度わかると思います…あまり期待せずに、待つて下さい。

不定期更新になると思いますが…楽しみにしてもらえたら、嬉しい限りです。

…では、また次回…

## 第二十一話・正統なる血筋（前書き）

…相変わらず強引な流れです…では、どうぞ…

## 第二十一話・正統なる血筋

「仲野くん、いい？…だからね、藤ノ宮家っていうのは…」

「ちょ、ちよっと待ってて松永さん………沙織、今は大事な話の途中で…」

「ダメ！早く食べるの！…ほら、あ〜ん…」

「パクツ！…ングング…あさ、沙織があ〜んしてくれるのはとっても嬉しいよ？…だけどね、今は松永さんと…」

「何なのよ…さっきから松永さん、松永さんって…そんなに玲奈といちゃつきたいの！？」

…うわ…やっぱり出たよ…

朝の時間じゃ、ちゃんとした説明が出来なかった松永さんは…お昼時間にわざわざ話をしてくれることになった。

僕がひたすらにお願いをして、何とか敬語もやめてくれたし…僕としては藤ノ宮家<sup>ふじのみや</sup>について、早く教えてほしいところだ。

だが…僕の人生が、そうそうにうまくいくわけがない。

松永さんと話をしようとするたびに…沙織が邪魔してくる。

…まったく、もう少し…おとなしくしてほしいよ…



「…別に僕たち、いちゃつきたいわけじゃ…」

「あゝあ…男のいいわけってサイテー！」

「いい加減にしないさい！ 仲野くんが今、大変なことぐらい…あんたでもわかるでしょ！」

「そもそも玲奈、あんたが悪いのよ！…お弁当を食べる時間は、猛と二人だけにして…っていつも言ってるのに！」

まるで子供のように駄々をこねる沙織は…周りの迷惑になっている。僕たちのことを応援してくれているクラスの皆も、うるさいとなると…話は違ふようだ。

…バカップルには見られたくないから…どうにかせねば…

「私も猛といちゃいちゃしたいの！…玲奈ばかりずるゝいゝ！」

「…松永さん、また例の作戦をしていいですか？」

「…例の？…あの方法、仲野くんの個人的願望のような気がするんだけど？」

「ち、違います！…沙織を落ちつかせたい一心で、やましい気持ちなんて僕には…」

「…顔がニヤケてるわよ、仲野くん？…」

…あ、しまった！…沙織の反応を想像してしまうと、つい…

…実はこの夏休みの間に、沙織対策として…僕が考案した作戦がある。

松永さんの許可と協力が必要なんだけど、確実に暴走沙織を黙らせる効果があるのだ。

ただ、これは奥の手なので…松永さんが、あまり実行させてくれな  
いけど…

「…学校では、あんまり許可したくないんだけど…仕方ないわ、もう少し様子をみたら…」

「またヒソヒソ話してるゝ！ 浮気反対！…猛を返せ！…この泥棒ネコ！」

「……………仲野くん…すぐにこの女を黙らせなさい。」

「了解しました！…では、早速お願いします！」

「…ふゝ…あ、ア、アゝ…うん、OK……………皆、あれを見て！ 校庭に犬が入って来てるわ！！！」

クラスメイト・豊崎真奈<sup>とよさきまな</sup>さんの証言…

…あの時の話を、したらいいんですか？…

あの時は、急に玲奈さんが大声で叫んだんです。

その言葉で皆は犬を探そうと、廊下側の窓を一斉に見たんですよ。

…でも私、小さいときに犬に噛まれちゃって…犬が怖いから、反対の窓を向いちゃったんですよ。

…そしたら…

…あの、ここからは…やっぱり恥ずかしい気が…

…えー？…私しか聞いてなかったんですか！？…そうですよ  
…もし他に誰かが聞いてたら、このクラスの皆はほっとかないですからね…

…わかりました、私でよければ…その先を話したいと思います。

私が反対の窓側を向いたら、仲野くんがちょうど沙織さんに…  
キスをしていました。

初めて二人のキスを見て、驚きはしたんですけど…あの二人なら、キスも普通なのかな？…って思えました。

…でも、そのすぐあとの仲野くんの言葉…最初はよく理解できなかったんですね。

…確か…

『僕と松永さんの話を、邪魔しないでくれたら…今日の夜、沙織を食べてあげる』

…と言ってたと思います。

沙織さんが顔を真っ赤にした瞬間に、鈍い私でもそれが…【夜のお誘い】なんだと気付きました。

……………そこから先は、私が聞いちゃいけない気がして耳を塞いだんですけど…もう一度キスしてる姿は確認しました。

あとはよくわかりません…ごめんなさい…

あ、もういいですか？……………え、あの二人？…

…そうですね…はっきり言って、羨ましいです。

…周りを気にせずに好きって言えるんですから、きっと幸せですよ

ね。

……

……

……

…帰っていいですか？…じゃ、お疲れ様でした。

…以上、豊崎真奈さんによる証言でした。

引き続き、本編をお楽しみ下さい…

…作戦は無事に終了した。

松永さんが、皆に勘違いだと謝ると…クラス中が残念そうな声をあ

げる。

…犬だけで盛り上げられる高校生って、どうなんだろうか…

とにかく、皆がいつもの感じに戻ると…一つだけ状況が変わった。

沙織が僕の腕を掴みながら、恍惚な表情を浮かべていることである…

先程とは違い、皆に迷惑は掛かっていないけど…完全に僕の自由が奪われていた。

…まあ、沙織が静かにしてくれるなら…僕の片腕くらい…

沙織の甘える姿はそんなに悪い気がしないので、僕はそのまま話を始めようとした…

「ちょっと！…あんな恥ずかしいことまでさせといて、結局ベタベタしたままってどういっつもり！？」

「…もう二度と、わがまま言わないから…ダメ？」

「松永さん、許してあげましょうよ…沙織だって反省してるし。」

「…仲野くんまで、沙織の味方になっちゃって…まるで私が悪役じゃないの…」

僕たちが腕を組むことを、松永さんは渋々…了承してくれる。

…どうやら今の松永さんにとって重要なことは、沙織の行動より…

藤ノ宮と僕の関係らしい。

松永さんはため息を一つ吐いて、真剣に説明をし始める。

「…藤ノ宮家は、江戸の後期から続く名門の家柄で…ほとんどの建築業界に関わってるの。」

「建築関係ですか…モグモグ…」

「藤ノ宮林業、藤ノ宮鋼材、藤ノ宮建設…大体のお家やビルには、藤ノ宮コンツェルンという名前が少なからず出ると思っわ。」

「…パクツ！…ングング…なるほど、松永さんが仕事モードになるわけだ……あ、そのタコさんウインナーは沙織が食べていいよ。」

「本当！？…猛が作ったタコさんって、足が8本だから大好きなの！」

「……三分も経たずに、邪魔してくれたわね…一体どこが反省してるのかしら？」

…うわっ…かなり怒ってるぞ…

真面目に聞いてはいたが、お昼時間が終わりそうなので…残りのお弁当を食べながら聞いていた。

自分で食べれるんだけど…隣の【美しい女性】が、おかずをどんどん僕の口に運んでくる。

…確かにこれじゃ…反省してるようには見えないな…

沙織と一緒に深々と頭を下げて…今度こそ、松永さんの話に集中した。

「…沙織、次は手を出すからね。」

「……………ごめんなさい…玲奈…」

「じゃあ続きを話すわ。先代の藤ノ宮家の会長、つまり一番偉かった人が…仲野くんのお父さんなの。」

「先代？…偉かった？…なんで過去形なの？」

「……………実は仲野くんのお父さんも、一年ぐらい前に亡くなってるのよ…」

「ふん…もういないんだ…」

やけに薄い反応のように思えるかもしれないけど、母さんに…（父さんは小さいときに死んだ）…と聞かされて育った僕にとって、特に悲しむことじゃない。

「むしろ、いまさら父親面された方が…怒ってたかも…」

「…それで、今の藤ノ宮コンサルン会長が美鈴のお母さんなのよ。これで大体わかった？」

「…うん、なんとなく。だけど今の話だけじゃ…僕って蚊帳の外だよね？」

「そう。仲野くんの話は、誰にも知られてなかったの…隠されて



た存在なわけだから、きつと…」

…多分、隠し子ってことが…

松永さんの表情により、僕が忌み嫌われた子供だと悟った。

藤ノ宮家では、不倫相手の子供として扱われていたのだろう…

…遺産とか、ややこしくしそうだしね…

少し重くなった僕たちの空気の中に、静かにしていた沙織が急に入り込んで来た。

「……………なんでお姉様は…いまさら猛に、会いに来たのかしら？」

「…それもそうだ。わざわざ異端児として産まれた僕に何の用が…やっぱり、お金の問題で…」

「そこは私でもわからなかったわ。美鈴に直接、聞くしか…」

…残り時間はあと15分…ギリギリ間に合うな…

お弁当を急いで口に掻き込むと、僕は美鈴先輩のところへ話を聞きに行こうとした。

…そう…話を聞きに行きたかっただけなのに…

「ダメ…行っちゃヤダ…」

「沙織、美鈴先輩に話を聞かなきゃ…これ以上、先に進めないよ…」

「…今日、あまり話してない…だから猛とお喋りしたい…」

「……………もう…甘えん坊なんだから…」

僕の顔を見ずに、腕を力強く捕まえている沙織は…どこか不安な顔をしている。

…僕はバカだ…自分の話ばかり気にして…

沙織の髪を撫でながら、さっきまでの自分の行動を反省した…

「ごめんね、沙織…」

「…なんで猛が謝るのよ…私のわがままなのに…」

「違うんだ。姉がいたり、父さんが偉い人だったりして…どこか焦った気がする。でも、そんなことより…大事なことがあるって思っ  
いだしたよ。」

肩を掴んで、沙織を抱き寄せた。

学校だとか、皆が見てるとか…何も気にしない。

…今、この場で伝えたいことがあるんだ…

驚いた沙織の顔を見つめて、素直な気持ちを包み隠さず話した。

「…沙織が好き。沙織が僕のそばにいてくれたら、他には何もいらない。藤ノ宮とか関係ないんだ…」

「…本当？…本当なの？…猛は本当にそれでいいの？」

「当たり前だよ。バイトが終わって家に帰ったら、今夜は二人でたくさん話そう。」

「うん！ あ、でも…お話した後は、セックスもしてよね！」

…が、学校だつていうのに…大胆な発言を…

笑顔のまま、大きな声で叫んだせいで…僕たちの周りの生徒4～5人が、沙織の言葉に吹き出した。

【食べる】…と約束した手前、否定は許されないので…僕は黙って頷く。

松永さんは、呆れて何も言えない状態のようだ…

「…エヘヘ…猛ったら、ベツトではイジワルなんだもん！ 今日はお優しくしてね？」

「えゝ！？…ぼ、僕は常にイギリス紳士のように沙織に接して…」  
「へえゝ。じゃあ、私のお気に入りのブラジャー…強引に外して、金具を壊したのは誰？」

「あ、あれは！…その…」

「…私がお風呂入ろうとした時…『お風呂なんていいから、早くベツトに行こうよ』…って、私を無理やり抱きしめたのは…どこの紳士かしら？」

…き、昨日のことを…皆の前で暴露するなんて…

僕が変態かのように話すから、クラスの女子から白い目で見られている。

沙織と付き合ってから、僕の【優等生】イメージはすでに…どこか遠くへ投げ捨てられていた。

「うふふ…これでクラスの女子全員に、嫌われたわね…」

「ぼ、僕が皆に嫌われると知ってて言ったの！？」

「…世界中の女の子から嫌われれば、浮気の心配しなくていいじゃない。それとも…他の女の子にチャホヤされたいわけ？」

「……………そんなこと言われたら、なにも言えないじゃないか…」

「なにも言わせないわ。猛は私のモノ…他の誰にも渡さないからね…」

今度は沙織が、僕の背中に手をまわしてきた。

沙織を一人占めしたい…形はどうあれ、僕も同じ気持ちを持っている。

こんな考え方がすでに、変態かもしれないけど…僕にはこれ以外、沙織を懲らしめる手段がないのだ…

…また今日も、ベットの上で仕返ししてやる…

「…で、藤ノ宮家のことはどうするつもりなの？…沙織といちゃついている場合じゃないでしょ？」

「そうだね……藤ノ宮の人達に任せるよ。松永さんから、伝えられる？」

「本当にいいの？…莫大な遺産が、仲野くんの物になるかもしれないのよ？」

「厄介事は御免だしね。それに…今で充分、幸せだよ！」

愛してる人を目の前にしながら、何よりも大切だとアピールする。

沙織に喜んでもらおうと、セリフは選んだつもりなのに…突然、お姫様が暴れだした。

頭や背中を、ポカポカと叩かれながら…不機嫌な理由を聞いてみる…

「私はもっともつと幸せになりたいの!…一人で勝手に満足しない  
で!」

……叩く必要ないじゃないか…

## 第二十一話・正統なる血筋（後書き）

はい、作者です。更新が遅れてスイマセン…

話がグダグダなのは私の悪い所ですが…なんとかまとめました。わかりにくい文章で申し訳ありません。

さて…無理やり沙織と猛のラブラブを入れて、話を延ばしましたけど…次の話から、一気に流れは速くなります。終わりが見えると哀しいものですね…

最後まで、二人を見届けてくれたら…嬉しい限りです。では、また次回…

第二十二話・…さよならは、またの機会に…（前書き）

…とにかく読んで下さい…では、どうぞ…



## 第二十二話・…さよならは、またの機会に…

…お姉様が教室に来た日から、約三週間が経っていた。

あれから一度も、お姉様は猛に会いに来ていない…しかも学校まで休んでいるみたいである。

玲奈が言うには、お姉様はあの若さで家の仕事を手伝っているらしい。

元々学校に通わなくても、それなりの修士課程はとくに終わらせているそうで…玲奈も不思議に思ってたようだ。

…だから三年生の大変な時期でも、簡単に転校が出来たんだわ…何が目的だったのかしら？…ま、玲奈に任せてるからどうでもいいけどね…

とりあえず猛の意思は、玲奈がちゃんと藤ノ宮の人達に正式な形で伝えたので…私が深く考えても仕方ない。

この話が一件落着して、私たちは何等変わらずに…幸せな日々を過ごしていた…

「…お邪魔します。」

私は学校から帰るとすぐに着替えて…猛の部屋に通い妻していた。  
今日が金曜日で、バイトのある猛がいないことは百も承知だけど…  
形式上の挨拶をして猛の部屋に入る。

合鍵を持っているというよりも、玲奈がマスターキーを管理してる  
ので…どちらかと言えば、猛の持つてる鍵が複製品である。

つまり私は、猛の部屋にいつでも入ることができるのだ。

…冷静に考えたら…今の猛にプライベートなんて無いわね…

一瞬、とてもかわいそうに思えたけど…私という【カワイイ彼女】  
がいるんだから、ちゃんと覚悟してるはずである。

そもそも私は全てを猛にさらけ出しているので、もし仮に隠し事の  
一つもあつたなら…許せないし、もちろん許さない。

猛に回し蹴りしている姿を想像して、私は一人でクスクスッ…と笑  
ってしまった。

…さて、今日はベットをしてあげようかな…

私だって女の子…好きな人の部屋ぐらいいは、私が掃除してあげたい。  
毎日ちよつとずつだけど、確實・丁寧に猛の部屋を綺麗にしていく  
ことにしたので…今日の分担は寝室に決まる。

ベットの上には…毛布が一枚きちんとたたまれていたから、さすが  
猛…と感心しつつも枕と毛布をベットサイドの棚に置いた。

コロコロを使って髪の毛を取り除いたら、シーツは汚れていないよ  
うに見えたけど…一応は外して、洗濯機に放り込む。

そして替わりのシーツをマットレスに挟み込んで…意外に早く、ベ  
ットメイキングは終了した。

…ふう…、終わった…洗濯機はまだ回ってるし…ちよつとぐ  
らい、いいよね…

私はベットのシーツが綺麗だと、どうしても飛び込みたくなる。

我慢したかったけれど、高ぶる気持ちを抑えきれずに…私はダブル  
ベットの真ん中に、ボフツ…と倒れ込んだ。

…ハフ…新しいシーツの肌触り…気持ち良すぎなんですけど…

両手を左右にひろげて、ベットの端まで私の領域を確保した。

……しばらくそのままで過ごしていると、このベットが…猛のだ

つたと思ひ出す。

半分転がって、猛の枕に手を伸ばすと…ためらいもせずキスをした。

二回、三回、四回とキスしていると…この行動がとても恥ずかしいことに気が付く。

…やだ、私ったら…躊躇もしないで枕にキスするなんて…末期症状かも…

【恋の病】に体の芯まで侵された私は、全てを猛のせいにして…顔を赤くしながら、枕をポコポコと叩いた。

そしてギュツ…と抱きしめて、もう一度枕に唇を押し付けた。

…枕さんは、これでおしまい！…猛に浮気してると思われちゃうから…

ごめんね、と言いながら…ベット右側の頭の位置に猛の枕をセッティングする。

…ん？…右に置く理由？…私が左隣りに寝るからに決まってるじゃない…

猛と並んで眠る光景を思い描きながら、三日ぶりの二人っきりの夜が待ち遠しい私だった…

…はい、うー…

…よーん…

…さーん…

…にいー…

…いーち…

…ゼロ！…

「…沙織、いる？…今日のおかずは何？」

「7時ジャスト…いつもながら完璧ね。」

「そうかしら？ そんなことより、沙織の作った夕飯が気になるんだけど…」

「出来てるわよ。今日のメインはサバ味噌でいいでしょ？」

「えー！？ 青魚なの！？」

猛の部屋なのに、まるで自分の家みたいに玲奈は入ってきた。

正確な時間に現れたこの女は、どうやら私の夕飯にケチをつけるらしい。

玲奈の言葉は無視して、二人分のごはんを茶碗によそった。

「アム！…ムグムグ…まあ鯖も悪くないわね。」

「素直に、『美味しい』って言いなさいよ。」

「…………それはプライドが許さないわ。」

「はいはい。」

…何がプライドよ…私の侍女のくせに…

文句を言うわりに、バクバク食べてる玲奈を見ると…怒りを通り越して、笑いたくなる。

あの玲奈がここまで夢中になるなら、猛が食べるときは…きっとベタ褒めしてくれるだろう。

…『凄く美味しいよ』…って言われながら、キスされたら…………もう！…口がお魚臭くなっちゃうじゃない！…猛のバカ…

「…ムグムグ…あのさあ、また仲野くんのことを考えてるでしょ？」  
「……な、なんでわかったの!？」

「やっぱり。ニヤニヤ顔のまま、遠くを見つめるアンタを見れば…  
誰でもわかるっつの。」

「…だって猛に会いたいんだもん…」

「……………夕方まで一緒にいたのに、もう寂しがるなんて…」

私の顔を見ながら、玲奈は…『ゴチソーサマ』…と一言漏らして、  
食器を片付けだした。

食事の早さにも驚いたが、私の全てを理解してることが…嬉しいよ  
うな、悔しいような…とにかく複雑な心境である。

…いつかきつと、弱みを握ってやるわ……………弱点があればだけど…

その後、二人でまったりと過ごしていると…不意に、ロビーのチャ  
イムになる。

…こんな時間に?…宅配便かしら…

玲奈が出ようとしたけどここは猛の部屋なので、彼女である私がイ  
ンターホンのスイッチを入れた…

『もしもし…沙織さん?』

「お、お姉様!？」

『よかった、居てくれて…ここを開けてくれる？』  
「は、はい！ 今すぐに開けますから！」

オートロックを外し、お姉様がマンションの中へ入るのを確認する。

…た、大変だわ！…猛の部屋をこんなに汚くしてたら、お姉様に嫌われるかも…

テーブルの悲惨な状態を見られたら、【嫁失格】…のレッテルを貼られてしまう。

未だにソファで寝そべってる玲奈に、お菓子やマンガを片付けるように指示した。

状況を理解した玲奈は、いつもの白いジャケットを羽織り…テーブルの上の物を、一旦全て寝室に運ぶ。

途中で玲奈が、スナック菓子を一つ落としたけど…私と玲奈の連携プレーは完璧で、床に落ちる前に私がキャッチした。

それを口に放り込んだ私は、玲奈と入れ違い様にテーブルを拭いて…傍目には、綺麗な部屋と認識できるくらいになる。

…よし、OK！…さすが私ね…

玲奈とハイタッチして、安堵感に浸っていた…が、すぐに玄関の呼び鈴は鳴り響いた。



『今、開けまーす!』…と口では言ったものの、スリッパや靴を並べたり…鏡を見て身嗜みを整えたりと、少しだけ時間を費やす。

それからやつと、お姉様を猛の部屋に招き入れる…時間にして約二分半の死闘であった…

「どうしたんですか?…猛なら、バイトで帰りが遅くなりますけど…」

「それなら知ってるわ。今日はね、沙織さんに話があって来たの。」

「私に?…えーっと、私なんかにと…」

「美鈴様、お嬢様への御用件なら私が承ります。」

…ちょっと!…話ぐらい私が聞けるわよ!…

ソファーに座りながら、心では怒りを表すけど…横に立つ玲奈に大人しく従う。

素直に従うのは、目の前のソファーに座るお姉様が…【仕事モード】になっているからだ。

玲奈とは正反対の、黒いスーツを着込んで…横に銀のアタッシユケースを置いている。

こんな姿で訪ねてきて、世間話をするはずがない…私でもすぐに悟った。

仕事モードの人と話すと、頭が痛くなってしまうので…同じ種族に代弁を頼むことにする。

…《歩く精密機械》なら、ちゃんとお姉様と会話できるはずだわ…

「玲奈さんの方が、話しやすいわね…率直に言うわ。猛ちゃんと沙織さんを…別れさせてほしいの。」

「！！！！ど、どうしてですか！？……まさか…私、お姉様に嫌われることでも…」

「待って下さいお嬢様。美鈴様、突然そのような話をするからには…事情があるのですか？」

「そう、沙織さんが悪いわけじゃないの…本当にごめんなさい。」

立ち上がると同時に、私と玲奈に向かって深々と頭を下げたお姉様は…哀しげな顔をしていた。

さすがに、玲奈が冷静にお姉様を止めて…また、普通にソファアに座ってもらう。

とにかく事情を説明してもらおうと、二人で聞いてみるが…お姉様は理由を言う前に、アタッシュケースを開いて私たちの前に置いた。

「……………！ お、お金ですか！？」

「……………五千万円あるの。猛ちゃんに対する経済的援助の御礼と、

沙織さんの気持ちへの謝罪を込めた意味で…」

「酷い！！ 私はお金で解決するような…そんな薄い感情で、猛を愛してるわけじゃないです！！！！！」

「同感です。今の行為は、お嬢様に対する侮辱として受け止め兼ねません。」

…お金で別れるなんて…絶対に許さない！…

怒りに任せて震え上がり、私はお姉様を怒鳴りつける。

玲奈が私の両肩を掴んで落ち着かせてくれた後、私の続きと言わんばかりにお姉様に抗議した。

座りながらも、ただただ謝るお姉様が…しばらくしてやっと説明を始めてくれる。

「私だって、沙織さんを傷つけないわけじゃないわ。こうするしか…」

「どういうことですか？…理由を説明して下さい。」

「…猛ちゃんを藤ノ宮の次期総帥として、養子に迎えるときに…メイリーグループ会長の一人娘と付き合っていると、いろんな問題が…」

「次期総帥！？…美鈴様、何かの間違いではございませんか？…不倫相手の子供を、いくら何でも藤ノ宮コンツェルン会長の座に置くなど…」

「そ、それこそ誤解よ！…お母様は猛ちゃんを、産まれたときから

すでに引き取るつもりで…」

お姉様も興奮したのか、立ち上がって大きな声を出した。

…どうしよう…余計に、わかんなくなってきたわ…不倫は文化なの？…

混乱しすぎた場の空気に耐えられず、私はトイレに向かって歩きだす。

玲奈とお姉様の声が遠くなるに連れ、自分の携帯電話が鳴っていることに気付いた。

…た、猛だ〜！…寂しかったよ〜！…

サブディスプレイには、愛しの彼の名前が表示されていたので…目にも止まらぬ早さで携帯を開く。

「もしもし、猛？…『愛してる』…って言って!」

『沙織ちゃん!?!…今はとりあえず、落ち着いて聞いてね!』

「……………何で真理絵さんが、猛の携帯に出るのよ……」

『とにかく落ち着いて!…いい!?!…今ね……』

…お姉様が猛じゃなくて、私たちに会いに来たことも…

…バイト中のはずなのに、猛から電話が鳴ったことも…

…猛の携帯なのに、真理絵さんが出たことも…

………真理絵さんの言葉で…全てがどうでもよくなった…

「…猛くんが突然倒れて、病院に向かっているから…すぐに来て!!」

！  
☞

…そこから先は、あまり覚えていない。

…携帯を落として、私も倒れたらしいから…

第二十二話・…さよならは、またの機会に…（後書き）

はい、作者です。

…あまり長くな

い作品として、更新し続けた私ですが…終わりは明確に見えつつも、沙織と猛を幸せに導いています。

さて、

次回は同じ日の猛視点です。内容は………後書きで書いたら意味無いですね。

…感想を待ってま

す。では、また次回…

## 第二十三話・病院では静かに！（前書き）

…猛の身に一体何が！？…といっても、特に何もありませんが…  
…では、どうぞ…



## 第二十三話・病院では静かに！

「……………」

「……………」

「…………… ねえ、猛くん？」

「はい？」

「私はスツゴイ暇なのに、君は忙しそうだね。」

「…床の掃除をしたり、ガラスを拭いたり…店の汚れを落とそうと思えば、暇なんてあつと言つ間になくなりますよ？」

「…それじゃ、暇でいいや…ふあ…」

…要するに、サボりたいだけじゃないですか…

『お客さんいないもん』…と言いつつと、真理絵さんはカウンターの椅子に座つて休み始めた。

僕はアルバイトだから、お客が来なくても時給分は働かないと…マスターに悪い気がする。

…だけど、このマスターの娘さん…全く掃除とか手伝わないんだよなあ…別にいいけど…

さりげなく真理絵さんにコーヒーをいれて、僕はモップを手に取り掃除を続けた。

「…ゴクゴク…フウ…その優しさ、女の子には罪なんだよ?」

「そんな大袈裟な…毎日頑張っている真理絵さんに、今日ぐらいは休んでもらいたいですって。」

「…どうして猛くんは、そういうことを平気な顔して言えるの?…マジで惚れちゃうからね!」

「ダメですよ。僕の心は、沙織に侵食されてますから…真理絵さんに入るすき間はありません。」

真理絵さんの話が冗談だということは、僕だって百も承知なんだが…沙織のことに關しては誠実でいたいので丁重にお断りした。

告白（悪ふざけ）が失敗したせいで、真理絵さんは頬を膨らませてすねた…どうやら、嘘でもOKしないと納得がいかないらしい。

…なんで僕の周りの女性は皆、どこかややこしい性格なんだろう?…

この人が不機嫌なままだと、常連の方はまだしも…初めてここに来てくれるお客さんの場合、『何だこの店は?』…という不快感を生む可能性がある。

真理絵さんの笑顔が目的の客のために、僕は奥の冷蔵庫からモンブランを取り出した。

「これ、自腹で払いますから…どうにか機嫌を直して下さいね。」

「……………パクッ!……………コーヒーおかわり!」

「はいはい、容れますよ……」

「……………猛くんのバゝ力…優しすぎよ……」

…ん？…今、何か話してたような…

聞き返したがはぐらかされてしまったので、これ以上の追求はやめることにする。

それにしても、今日は客がとても少ない…何だか変な感じになるのは、僕だけだろうか。

モップを片付けて、次に窓ガラスを拭こうとした時…外に人影があるのを見つけた。

薄暗くてよくわからないけど、この店に向かっているのは確実にある。

一時間半ぶりのお客さんだと思い、真理絵さんの使った皿とティーカップをカウンターの流し台まで運ぶ。

…食べ終わったら使ったお皿ぐらい、片付けてほしいよ…

何もしない真理絵さんは、とりあえず無視して…ドアが開いたと同時に、久しぶりのお客の女性に対して元気よく挨拶した。

「いらっしゃいませー、こんばんはー！」

「…いらつしゃい…」

「ちよつと真理絵さん、もう少しやる気を出してか……………あー！！！」

「大きくなったのね、猛…」

「？…猛くん？」

「…あ、あ、あ…嘘だ…どうして、どうして…」

取り乱した僕に、真理絵さんの声は届いてない。

もはや冷静な思考が働くわけもなく、頭の中では混乱と混沌が駆け巡っていた。

…そんな…馬鹿な…

…有り得ない…あつてはならない…

…だけど僕が見間違えるはずない…じゃあ目の前の人は、僕の…

…でも…たしかに僕は、あの時……………

…確かめ…なければ…

「…突然でごめんなさい…あなたに、どうしても会いたくて…」

「この声…間違いない！…母さんだ！！！」

「え！？　だ、だって猛くんのお母さんは、半年前に亡くなったんじゃない…」

「…そう、残念だけど…あなたの母親は死んだの。私は似てるだけで…」

…何を言ってるんだよ…どこからどう見たって、母さんじゃないか…

ドアから入って来た女性は…身長、体型、顔から髪型、声や話し方まで…この世でたった一人の、僕の母さんが生き返ったとは思えなかった。

そんな【母さん】の口から、『母さんは死んだ』…と聞かされて、僕の脳はおかしくなっていく。

…やめろ！…母さんの声で、母さんの存在を否定しないでくれ！…

…僕とこうして…ちゃんと話してるじゃ…ないか…

…母さん…が僕に…会い…に…来て…

…母さん……か…あさ……

…僕は息が乱れ出して、目の焦点さえ合わなくなっていた。

真理絵さんや【母さん】の心配する声は聞こえていたけど、意識が朦朧とし始めて…僕はそのまま膝を崩しながら、その場に倒れてしまっ

視界が真っ暗になって、手足も思うように動かせないのに…それでもまだ心の中で、僕は母さんの名前を呼び続けていた…

……ん……ん……

目覚めた時、僕の周りの景色はガラリと変わっていた。

ほんのり明るい部屋の中……全体的に白い天井や壁、固いベットなどで……僕はここが病院の中なんだと理解する。

そしてベットの隣には、僕を見つめる沙織の姿があった……

「……おはよう、沙織。」

「うん、おはよう……ってまだ夜中の2時よ？」

「そうなんだ……ところで僕は、どうしてここに？」

「突然、倒れたらしいの……病院の先生が言うにはね、

《強い精神的ストレスにより、一時的な過換気症候群が起こったことでのパニック障害が併発》

……なんだって。」

「……えーっと……まだ少し、理解できない部分が……」

「私だってメモに書いてあることを読んでるだけなんだから、内容なんてわかんないわよ。」

沙織は手に持っている紙を確認しながら、『あのヤブ医者め！』……

などと叫んでいる。

だけど、その顔はずっと笑顔のままで…僕を心配している様子が全然感じられない。

…沙織のことだから、僕に抱きついて泣きじゃくると思ってたのに…自分が倒れたことよりも、沙織の意外な反応の方が…今の僕にはシヨックだった。

「それが実はね…先生から病気の説明を聞いてるときに、『心配しなくて大丈夫ですよ、奥さん』…って言われたの！ 私たち、新婚夫婦に間違われたんだよ！？…もう、スッゴク幸せ！…！」

「……………だから笑ってるんだ…全く、沙織らしいよ。」

「エヘヘ…やっぱり猛と私は、初めて見る人にもはつきりわかるくらい…運命の糸で結ばれてるんだわ！」

「…沙織にそんなことを言われたら、僕も嬉しくなるじゃないか…」

上半身を起こして、沙織の髪を撫でた。

まだ少し体がだるいけど、隣にいる【妻】の笑顔を見れば…自分が病院にいることが不思議と思えるほどに癒される。

微笑んで見つめ合うと…沙織の肩と脚がソワソワし始めた。

……………ここ病院なのに、平気なのかなあ？…



ベットの端ギリギリまで寄ると、『隣においで』…と言って横の特等席に沙織を招待する。

夜の病院ということもあり、沙織は静かに座ったんだけど…すぐに僕の胸に飛び込んでキスを要求してきた。

いつもは焦らしていじめるんだが…今日はかなり迷惑を掛けたので、沙織の望み通りにしてあげる。

キスのために顔を近づけた時、沙織の目から頬にかけて……涙の流れたあとが見えた…

…そっか、そうだね…沙織……ごめん…

泣き虫のはずなのに、僕の前ではずっと笑ってる沙織の姿が…切なすぎて、胸が締め付けられる。

僕は沙織に与えた不安を打ち消すため、優しく…けれども力強く抱きしめながら、唇を重ねて愛を伝えていく。

…流した涙のぶん、幸せを感じてほしいから…

僕はベットから降りて、沙織が座っていたパイプ椅子に腰掛ける。

たまっていた疲れのせいで眠りについたお姫様に、ベットを占領されてしまったからだ。

スヤスヤ寝ている沙織の手を握りながら、確実に登場するであろう人物を僕は静かに待っている。

そして…30分を過ぎた辺りで、扉をノックする音が聞こえた。

「……………松永さん？」

「え？…どうして、仲野くんが椅子に座ってて…この女がベットに寝てるの？」

「まあまあ…細かいことは気にしないで。」

「…仲野くんがいいなら私は別にいいんだけど。それより、体は大丈夫？」

「おかげさまで。沙織に元気の出る薬も貰ったし、絶好調だよ。」

お決まりの白いスーツで現れた松永さんは、僕の体を真つ先に気にしてくれた。

特に問題ないことを報告すると、松永さんは深いため息をつく…迷惑を掛けっぱなしで本当に申し訳ない。

このまま休んでもらいたいところだけど、沙織の言い方ではどうも理解が出来ない病気みたいなので…倒れた原因と今後の対処の仕方を、今のうちに聞いておきたかった。

さすがは松永さん…沙織の持っていた紙に比べても、何倍もわかりやすく説明してくれる。

…要するに驚いて呼吸がおかしくなって、意識が途絶えたのか…

「…過呼吸になった原因は、藤ノ宮の奥様を仲野くんが…自分のお母さんだと勘違いしたことなの。」

「藤ノ宮の奥様？…それって、つまり…」

「美鈴のお母さんのことよ。仲野くんのお母さんと藤ノ宮の奥様は…双子だから仕方ないけどね。」

「…母さんは双子だったのか…アハハ！ そりゃ似てるはずだ。」

やけにあっさり解決したせいで、過呼吸になるほど取り乱して倒れた自分が情けなくなり笑えた。

それにしても、母さんはなぜ僕に一言も言わなかったのか…そもそも親戚がいるなんて話も、一切聞いたことがない。

………ん？…美鈴さんのお母さんと僕の母さんは双子で…美鈴さん

と僕の父親は同じ人だから…

「……………僕のお父さんは、双子の両方に手を出したの？」

「さあ？ とりあえず、それぞれに子供がいるんだから……………大人の関係はあつたはずよ。」

「うわ……………信じられないな……………」

「あら、どうして？ ……仮に沙織が双子だった場合、仲野くんも同じことをすると思っただけど？」

……………否定できない自分がとても悔しいです…

二人の沙織に、奪い合いとかされたら幸せだなあ……………などと妄想を膨らましてる場合じゃない。

僕や母さんを複雑な事情に巻き込んだ自分の父親が、許せなくなってきたからだ。

そんな僕をなだめながら、松永さんはさらに話を進めていく。

「ま、いずれにしても…明日ちゃんと話し合えばわかることなんだから。」

「…え？…明日？」

「そう。本当は今日話す予定だったらしいけど…仲野くんが倒れちゃったわけ。」

「成る程ね。一応、話はしようとしたんだ……」  
「だから、この話は一度終わりにして……私の質問に答えてちょうだい。」

そう言うと、つい5秒前まで普通にしていた松永さんがいきなり真剣な顔をした。

今までの話も結構シビアな内容だったのに、更に濃い話になるのか  
と思い僕は少しビビっている。

そして、松永さんが口を開いた時………僕の一番恐れていた質問が、  
投げかけられた。

「……ここは病院で、仲野くんは患者よね？」

「そ、そうだけど……」

「病院はね、完璧に準備をしていたはずなのよ……患者のために。」

「松永さん？……何が言いたいのか？」

「…それなのに、ベッドのマットレスが少しズレてるし…シーツが無駄に乱れてるのは、どうしてかしらね？」

「……………ナ、ナンノコトデゴザイマスカ？」

松永さんの目は、全てを知ってるぞ！…と語っている。

それでいて、わざと回りくどい聞き方で僕を試しているようだ。

…松永さんに真実を悟られてはいけない…すでにバレバレだけど…

「…頭の良い仲野くんは、ハッキリ言っておげる…沙織とセックスしたでしょ？」

「あ、いや、その……………」

「どうなのよ、ん？」

「……………」

「…あっそ、黙秘するのね。確かに認めるわけにはいかないし、そうかと言って嘘をつくような男じゃないからね…正しい判断だね。」

エッチしたことがばれたら殺される…僕の本能がずっと叫んでいた。

…沙織のためにも、ここは一つ…頑張らねば…

僕が認めなければ、沙織は夢の中だから…真実は闇に葬れる。

松永さんの声を無視することに全力を注いで、僕は静かに目を閉じた。

「…病院でセックスするなんて、バカじゃないの？」

「……………」

「…気持ち良かった？」

「……………」

「…まさか、コンドーム着けないでやったの!？」

「ち、違いますよ!?!?!…ちゃんと着けて、それから……………」

……………あ……………」

「はい、裏付け終了。」

……………もう終わった…2時間の説教コース、確定……………」

『延長もあるから、覚悟してね』…と、松永さんがニコツと笑って優しく囁いた。

その姿はまるで…仁王像に生き写しである……………」

…今夜は、眠れない一日になりそうだ…



## 第二十三話・病院では静かに！（後書き）

はい、作者です。

前回を見てから、

感想がありました：今回も淡々としすぎてますね、反省中です。

猛が倒れた：って感じで書き

ましたけど、特に何もなくてすいません。期待していた人達には、多大な裏切りになったかもしれません。

しかし、私は声を大にして言いたい！

甘いだけの小説が書きたいんです！！！！

…ですから過度の期待はしないで、くだらない作品として楽しんでもらえたら嬉しいです。

苦情や応援、感想などガンガン受け付け中です。ちゃんと返信しますので、読者の気持ちを私に教えて下さいね。

…では、また次回…

第二十四話・…悪魔と天使が住む女（前書き）

更新が遅れてすいません！　いいわけもしませんので…とりあえず読んで下さい。では、どうぞ…

## 第二十四話・…悪魔と天使が住む女

「…おかえりなさい、猛。」

「え？…今、一緒に帰って来たのに？」

「もう！…猛におかえりって言うのが、私の仕事なの！」

「そ、そうなんだ…それじゃあ僕も、ただいま。」

…昨日が大変だったから、些細なことも大切にしたいのに………バ  
力…

無事に退院した猛と一緒に、私たちは何事もなくお昼前には部屋へと戻って来ていた。

先に玄関へ入り、すぐに振り向いてから私は猛を迎え入れる。

猛は気にしていないけど、この『おかえり』…の一言だって、私には重要な日常である。

そう…こうして猛といられる日常が、ものすごく幸せなんだと昨日のことで考えさせられた。

いつ失うかもわからない…そんな現実がリアルに起こったせいで、今までより何倍も何十倍も猛を愛おしく感じる。

…だからね、猛…もつとたくさん…愛し合いたいのに…

リビングへ歩きだす猛を、後ろから抱きしめて…素直におねだりした。

「…もう一回だけ、キスして…」

「また？ 朝から数えて、4回目だよ？」

「今は、【ただいま】のチューをして欲しいの…ねえダメ？」

「…全く、お姫様はコレだから…僕が断れないのを知ってるくせに。」

抱きしめてた手を緩めると、その手を猛は強引に掴んで…私の体ごと前に引つ張る。

倒れそうになった私を抱きかかえて、『飽きても知らないよ？』…と囁きながら、猛は無理やり唇を押しつけてきた。

…あ、バカ！…誰も強引になんて…言っ…な…い…

見つめ合い雰囲気を作りながら、ゆっくりキスをしたかったけれど…猛の目を間近で見ってしまった私には、もはやどうすることも出来なかった。

しばらくするとキスに夢中になりすぎて、自分の姿勢が不安定なことにすら忘れ…迂闊にも脚の力を抜いてしまう。

案の定、ドンッ！…という音を立てて、私はお尻から玄関先に倒れた。

「いったゝい！…なんでちゃんと支えないのよ！？」

「ご、ごめんね！…急に沙織が力を抜くから…」

「当たり前でしょ！？…女の子はね、好きな人とキスしたら力が抜けるの！…そこを支えるのが、男の役目！」

「…………ごめん…いつもいつも頼りなくて…」

優しく立たせてくれた猛に向かって、私は少しだけ文句を言う。

自分のことは棚に上げて喋る私なのに、猛は明らかに肩を落としたがら謝ってきた。

…ああん、もう！…猛にそんな顔…してほしくないわよ…

しょんぼりした猛の顔も、悪くないと思ったけど…このままの関係は、私たちらしくない。

『言い過ぎた』…と素直に謝って、本日五回目となる口づけを私から強制実行した。

…これは、【ごめんなさい】…のキスだからね…

… 思い出すだけで気分が悪くなる言葉…

… 猛と別れてほしい…

お姉様がはっきり言ったのを覚えてる… さすがにアレはきつい。

これからドンドンごまをすっていこうとした矢先に、あんな話を切り出されたのは予想外だった。

猛のお母様が亡くなっても、実の家族なのに存在すら見せなかった人達が… 『藤ノ宮家の跡取りにしたいから、私と付き合ってるのは困る』… なんて話も、身勝手すぎると思う。

お金まで出して、本気を表していたお姉様… そんなに私が嫌いなのだろうか？…

… 私はただ… 猛のそばで毎日一緒に過ごしたい… それだけなのに…

正直、もう二度とお姉様たちの顔は見たくない… のだけど、そうも

いけないのが世の常ってものらしい。

「…大丈夫だよ、沙織…何があつたとしても沙織のことは、僕が必ず説得するから。」

「でも、お姉様は本当の家族なんだし…私の意見なんて聞かないわよ…」

「母さんが死んだあと、僕をずっと支えてくれたのは沙織じゃないか。美鈴さんが何と言おうと…沙織を一番に考えて、話を進めるよ。」

「…もし、思うように話が進まなかったら？」

「却下だよ、却下！…僕の大切な恋人を軽く見てるなら、例え相手が総理大臣だとしても門前払いだね！」

ソファアに並んで座りながら話していると、私の肩に右手をまわしながら…左手で、シッシッ！…と犬を追い払うような仕草を猛が見せた。

実際は、そんな簡単にいかないだろうけど…その言葉だけで、私は心から安心できる。

…信用してるからね……………ア・ナ・タ…

猛の肩にもたれながら…これからの私の人生まで、その広い背中に預けたいと強く願っていた…

「…何回見ても、イラツとするカップルだわ。」

「うるさい玲奈!」

「どこがうるさいのよ…口を開けば、『ディスク』…だとか、『アイシテル』…なんて言ってるウザイ女に比べたら、私なんて物静かなのよ?」

「け、喧嘩売ってんの!?…この人造人間!」

「人造人間!?…いくらアンタでも、その言葉は許せないわ!…かかってきなさい、ペチャパイ!」

「ぺ、ペチャパイですって!?…殺してやる!!!!!!」

「まあまあ、ロゲン力はやめてよ…ね?」

いつの間にか向かい側のソファ―に座ってた玲奈が、私と猛の領域に侵入してきては悪態をついている。

聞き流そうとしたのだけど、このパーフェクトボディ（猛のお墨付き）に向かつて、『ペチャパイ』…とまで言われたら、引き下がるわけにはいかなかった。

…猛が止めなければ今ごろ、この世から消してたのに…

「…確かに喧嘩をしてる場合ではないわね。そろそろ美鈴たちも、こっちに向かつてるだろうし…」

「あ! そうだったわ…私、猛のお母様に初めて会った…」

「沙織違っよ。今日来るのは、おばさん。」

「そっか、猛のお姉様のお母様だから猛のおば様…でも、お姉様と



猛のお父様の奥さんだから猛のお母様にあたる人で…だけど、猛の本当のお母様の双子の妹だから………うゝ…頭いたゝい…」  
「アハハ…沙織にはちよつと、難しすぎたかな？」

猛は微笑みを浮かべながら、私の頭をポンポン…と叩く。

難しいことは考えたくない…でも、今回は私自身が考えないといけない気がした。

それは猛のため？………そうじゃない…猛と別れたくない私のため。

自分がわがままなことは、嫌というほど知ってるつもり…だからこそ、誰にも猛は渡さない。

…足りない頭は玲奈と猛に任せ…とめどなく溢れる猛への愛を、一生懸命お姉様たちに伝えよう…

………私には…それしかできないから…

「…ごめんなさいね…私たちが双子だということは、姉さんが全て話してると思ってた…」

「こちらこそ、申し訳ありません。僕のせいで、いろいろご迷惑をおかけして…」

「猛ちゃんは悪くないの。急に目の前に現れた、お母さんが悪いわよ！」

「うう…私は猛に会いたかっただけなのに…美鈴が怒ってる…」

「当たり前でしょ！？…猛ちゃんに何かあったら、私が許さないわ！」

「…ご、ごめんなさい…」

…い、いきなり怒られてる！？…

約束の時間に、お姉様とおば様は部屋にきた。

初めておば様を見た感想は、かなりの美人だな…って感じ。

背は私より、10cmぐらい低いけど…束ねた髪の毛が私の頭と同じ高さに届いているので、お姉様のように腰ぐらいまである黒髪のようにだ。

和服を着ているためか、姿勢が美しく…見ているこっちも、ついつい背筋を伸ばしてしまう。

…あ…和服の模様と、髪留めが同じ花だ…すごく綺麗…

花の名前はわからないけど、おば様の雰囲気によく似合っている。

この出で立ちと、藤ノ宮のトップという肩書で…私も始めは、堅い人だと思っていたのに…

「全く…お母さんがこれだから、今の藤ノ宮コンツェルンは不安定なのよ!?!…もう少し軽はずみな行動は控えて…」

「……………だったら美鈴がやれば良かったじゃない…藤ノ宮の総帥を……………」

「またそんな…仮にもお母さんは、社員なん千人、なん万人を抱えてるんだよ!?!…」

「…だって…」

「『…だって』『…じゃないでしょ!』…」

「……………でも…」

「『…でも』『…じゃない!』…」

自分の娘に説教されてるかなり偉いはずのおば様は…怒られたせい  
か、ソファで小さくなった。（当社比）

反対側に座る私と猛は、とりあえず落ち着くまで口を開くつもりは  
ないし…私の横に立つ玲奈も、ただただ苦笑いを浮かべてるだけら  
しい。

…なんか…おば様って、のほほんとしてるわね…

お姉様の方が母親のように見えてしまい、どこか笑えてしまうよう  
なやりとりを私は我慢して眺めている。

しばらくお姉様の説教を聞いていると、猛が先に笑いだした。

「ちょっと！…笑ったら失礼でしょ！？」

「…いや、なんかこう…似てるなあって思ったら、つい…」

「え？…猛のお母様もやっぱり、ほんわかった人なの？」

「アハハ…違う違う、確かに母さんはおばさんと瓜二つだけど…怒  
りかたは、美鈴さんにそっくりだったよ。」

…おば様の容姿で、お姉様みたいに怒られたら………うわっ…猛の  
お母様…超恐い人だったのね…

どうして猛が真面目になったのか、少しだけわかる気がする。

おば様を見つめて、お姉様の怒る声を聞いていると…猛のお母様が目の前にいる気がして、とても緊張した。

姑を見るような私の顔に気付いたお姉様は、説教を中断させて私たちの方へ体を向き直す。

そしてコホンッ…と一つ咳ばらいをすると、私と猛に深々と頭を下げた。

「…本当にごめんなさい。お母さんが勝手なことをしたせいで、めちゃんは…」

「もういいですよ。それより、僕たちは話を進めたいんですけど…大丈夫ですか？」

「ほら…美鈴が怒ってばかりだから、大事な話ができないじゃないの。」

「怒られることしたお母さんも、半分は悪いんだから！」

…お姉様とおば様って…本当に仲が良いのね…

ただの親子喧嘩なのに、完璧なタイミングで受け答える二人はきつと…同じ時間を過ごしてきた、【普通の親子】…なのだろう。

この人たちに、悪い印象をもつことなんて…今の私にはできないかもしれない。

……でも……

「それじゃあ、昨日の話の続きを……」

「……お姉様……ダメなんですか?……」

「……ん?……沙織さん?」

「私は猛と、別れなきゃダメなんですか!?」

「………そ、それは……」

「お姉様たちがこんな話するのは、簡単じゃないことも知っています!……でも、でも!………私は……猛がいなきゃ……」

猛の腕にしがみつきながら、お姉様に向かって大きな声を出してしまった。

この後でなにを言われるか考えると、不安の重圧に押し潰されそうになる。

でも、譲れない気持ちを真っ先に相手に伝えることが……一番重要だと私は思った。

ビクビクしながらお姉様の反応を待っていると、猛が耳元で……『ありがとう』……と囁いて私の頭を撫でてくれる。

涙がぶわっと込み上げて来るのを必死で堪えた……こんな時、猛の優しさは逆にツライ。

唇をかみ締めながら二人に目で懇願すると、おば様が手をパンパン

ッ！…と叩いて場を静めた。

「はいはい！…ここからは私に任せて、美鈴は外で待機。よろしく！」

「ちょ、ちょっとお母さん！？…どういうこと？」

「いいから私に任せなさい！…あ、そちらの付き人さんも席を外してくれる？」

「私ですか？…かしこまりました。」

この状況を黙って見ていた玲奈は、おば様の言葉に素直に従う。

私たちに一礼して、部屋から出ていこうする玲奈…私は間髪いれずに呼び止めた。

………私は…私は玲奈がいなきゃ…

「…お嬢様は大丈夫ですよ。」

「だって私は自分じゃ…何もできないし…」

「…先ほどのお嬢様が、迷わずにご自分の気持ちを語られたとき…すでに私は必要ないのだと、嬉しく思いました。」

「あ、あれは…その…猛のことだから…」

「それで良いんですよ。お嬢様の心は、仲野様で埋め尽くされてるのですから。」

「………でも…」

「もし、少しでも迷いや戸惑いが生まれたら…隣の男性に頼ってください。彼の心もまた、お嬢様で満たされますから…愛されてることを、自信にして下さいね。」

仕事モードのはずなのに、ニコツと微笑んだ玲奈は…いつもの作り笑いではなく、心から笑ってくれる。

…うう…この女、私をバカにして…

いつもケンカを売ってくるくせに、いいところでグサツ…と心を刺す一言が、なんと玲奈らしくて嬉しかった。

片手でピストルの形を作ると、『パンツ!』…と言いながら玲奈に向けて引き金を引く。

胸を押さえながら倒れる演技をした玲奈を見て、おば様とお姉様は声を出して笑ってくれた。

その行為が照れ隠しなんだと気付いた猛は、また私の頭を優しく撫でる。

空気が和んだあと、玲奈はお姉様を連れて部屋を出ていった。

その背中を眺めながら…私は思う…



…次は…マシンガンで撃ち抜いてやる…

## 第二十四話・…悪魔と天使が住む女（後書き）

はい、作者です。

すみません、明

らかに話を長くくしています。グダグダを感じる人には、心から謝罪を申し上げます。そ

れというのも、今回の話を書き終えて読み返すと…凄く淡々と進んでいたんです。前に指摘されたこともあり、大幅な修正を加えました…そのせいで更新が遅れたなどと、言い訳はしません。

それでもまだアツサリすぎ！…と思うかもしれませんが、一応作者も頑張ってるので…大目に見てくださいね。

さて…大幅な修正をしたので、まだしばらく続きそうです。楽しんでもらえたら、私も嬉しいかぎりです。できれば感想を書いて、

作者を喜ばせて下さいね。では、また次回…

第二十五話・何となく似てる？（前書き）

…すみません。今回も薄い内容です…では、どうぞ…

## 第二十五話・何となく似てる？

「ウフフ…いい役者ね、あの子。」

松永さんと美鈴さんが部屋を出ていったあとも、おばさんは笑いを軽く引きずっている。

それというのも…沙織による殺人事件が、あまりにも笑劇（衝撃）的だったからだ。

沙織の行動はまだわかるけど…まさか仕事モードの松永さんが、あんな悪ふざけに乗っかるとは未だに信じられない。

…もしかしたら松永さんは…美鈴さんたちを信頼してるのかもな…  
まあとにかく、腕に絡み付く殺人犯？…のおかげで、おばさんとか  
なり話しやすい雰囲気になったことは確かだ。

…ご褒美に、キスしてあげよう…

沙織の頬に触れる程度のキスをする…もちろん、沙織が喜ぶと思ったからだ。

だが沙織は、急に顔を赤くしたかと思うと…予想に反して怒りだした。

「もう！ どうして猛はいつもそうなのよ!？」

「え?...勝手にキスをしたこと?」

「違うわよ！ ちゃんと場所を考えてから、キスしてよね!」

「あ、ごめん...おばさんが見てるんだっけ...」

「そうじゃないの!...頬じゃなくて、口にキスしてってこと!...!」

.....そっちですか...

冷静に考えれば、沙織の頭の中に常識なんてあるわけがない。

頬を膨らましながら怒りを表す沙織は、唇にキスされなかったことが一番のショックらしい。

僕が頭を撫でながら謝ると、沙織は急に表情を変えて...口を尖らせながら、体をスリスリ近づけてきた。

...っ...目から《キスして光線》が出てるよ...

腕を掴む力も強くなってきてる...どうやら、本当にもう一度してほしいようだ。

おばさんの視線が気になった僕としては、おばさんの前で再度キスするというのは少し恥ずかしい気がする。

98%失敗すると知りながらも、僕は沙織の説得という無茶な行動を起こしてみた。

「沙織…今日はたくさんキスしてるから、今じゃなくても…」

「猛が先にしたんでしょ!?!…それとも、私の心をもてあそんでるの!?!」

「も、もてあそぶなんて…そんなつもりは…」

「だったらキスして!…その気にさせといて逃げるなんて、卑怯者だよ!?!」

「…………でも、おばさんが見てるし…」

「あ、気にしないでいいわよ? アナタたちの噂は聞いてるし、第一に…【卑怯者】…とまで言われたんだから、猛は男として逃げちゃダメ!」

拳を握り、上へ突き出すおばさん…なぜか僕よりノリノリだった。

それを見た沙織も、同じように拳を突き出すと…まるで何かの儀式のようである。

…アハハ…おばさんも敵なら勝てないや…

そして再び僕を覗き込む沙織は、顔が満面の笑みへと変わっていた。恥じらいや体裁を気にしてる様子は一切なくて、ただ純粹に…僕を求めている。

…この状況で拒むのは…確かに男じゃないよね…

潔く降参して、沙織の唇に自分の唇を重ねた…

「まあ！…あらあらあら…」

「……………」

「やだわぁ…こんな昼間から、そんな濃厚に…」

「……………」

「凄くエロいのねえ…年甲斐もなく、興奮しちゃう…」

「……………なんか…やりにくいなぁ…」

いつも通りのキスをしてるのに、隣からリアルな感想が聞こえてくるので…どうもぎこちない。

だけど沙織には関係ないらしく、どんどん僕の体を倒しながら…積極的に舌を絡めてきた。

「…ちよ、ちよっとマズイぞ…沙織が夢中になりすぎてる気が…」

完全にソファーに倒されてから、上に乗っかっている沙織の異常を感じる。

周りが見えてない沙織は、案の定…ゆっくり上着を脱ごうとしていた。

「うわっ！…ダ、ダメだよ沙織！」

「あ…………バレた？」

「バレないと思ってた、沙織がおかしいよ！」

「チッ…あと少しで、猛の体をモノにできたのに…」

「…女の子が、そんなこと言っちゃダメだって…」

舌打ちまでした沙織に、『メッ！』…と軽く叱りつけたら、おとなしく引き下がりソファに座ってくれる。

けど明らかに不機嫌なオーラを出しながら、またフグのように頬を膨らました。

…はいはい…僕が悪かったですよ…

沙織の隣に座り直した僕は、沙織の怒った顔に人差し指をプスツ…と優しく押し込む。

大きく膨れていたフグは、『ブッ！』…という音と共に空気を吐き出し、見事に小さくなった。

僕は笑いを堪えるのに必死だったけど、沙織の顔は赤鬼になって…恒例のポコポコパンチが嵐のように飛んでくる。

…こんなイタズラで怒るなんて…沙織はやっぱりカワイイなあ…

結局、我慢できずに笑いながら沙織のパンチを受けてると…忘れてた存在を思いだした。



「アハハ………はあ？…おばさん、何してるんですか？」  
「え？…何って言われても、写メを撮ってるだけよ？」  
「だから何でおばさんが、僕たちの写メを撮ってるんですか？」  
「だって美鈴が、『様子はどう？』…ってメールで聞くから、写メの方が早いと思ったの。」

僕たちがいちゃいちゃしている間におばさんは、最新式の携帯電話で僕と沙織をたくさん写している。

どうやら沙織の魅力で、僕も周りが見えてなかったらしい…キスの写真まで撮られていた。

むふふと笑うおばさんは、僕たちに画面を見せながら送信ボタンに指で触れる。

『それだけは、勘弁してください』…と頭を下げたのに、顔を上げた時…携帯のディスプレイには、「送信成功しました」という文字が出ていた。

…マズイ…美鈴さんに見られたら当然、隣にいるはずの………

おばさんの送信から20秒後、沙織の携帯に一通のメールが届く。

ダースベーダーの音楽によって、送り主がわかっている沙織は…携帯を開こうとしなかった。

沙織の肩に手を置いて、『無視はダメ』…と説得すると、沙織はしぶしぶ携帯を手取る。

一緒に恐る恐る開くと、「新着メールあり」の文字が…普段よりどす黒かった。

メールに本文などは何もなく、ただ…完璧な【作り笑い】をする松永さんの手を降る姿が、画面いっぱいに表示されている。

ぱつと見ると、ステキな笑顔を振り撒いてるように見えるけど…明らかに目が笑っていない。

それを見た僕と沙織は、背筋が凍りつく程の恐怖を感じ…すぐに二人並んで土下座する写真を、松永さんに返信した。

…おばさんたちが帰ったら…どうなるんだろ？…

僕たちは先ほどの行動を深く反省して、普通に《腕を組んだだけ》

の状態で座った。

おばさんも笑いが引いてきて…一度立ち上がり、着物の乱れを軽く整えている。

その姿は、何とも言えない美しさで…美鈴さんに怒られてた最初の印象とかなり掛け離れていた。

…見れば見るほどに…母さんだよなあ…

おばさんが座った後も、しばらく目が離せないでいると…急に話し掛けられてしまう。

「ごめんなさいね…美鈴が、勝手なことやって。」

「え？……あ、ああ…別れ話のことですか？」

「…あの子はね、昔から責任感が強くて…何でも『藤ノ宮コンツェルンのためには…』とか、『藤ノ宮家として…』なんてことばかり考えてるの。」

「……それでも、私と猛に別れてって言ったのは…納得できません…」

「わかってるわ。吉岡…さんだっけ？ 実は私も、別れることはな  
いと思ってるのよ？」

「……………」

「ほ、本当ですかおば様！？」

「ホントよ。アナたち二人に悲しい思いをさせてまで、養子に  
来てもらおうとは思ってないもの。」

その瞬間、沙織は有無を言わずおばさんに抱きついてた。

僕に飛びついて来るのかな？…と若干は期待していたのに、沙織が腕から離れていくのがわかったので少しだけへこんでしまう。

…でも、沙織と別れないで済むなら…このくらい平気だよな…

落ち込みそうになった自分を励ましてから、喜んでいる沙織とちよつと困り気味のおばさんを笑顔で見つめていた。

「…私、おば様大好き！！！」

「あらら、なんかイイわね…もう一人、娘が出来たみたい。」

「エヘヘ…そう言ってもらえると、私も嬉しいです！」

「…でも、ホントにごめんなさいね。別れてって言ったり、言わなかったり…」

「いいんですよ全然。そんなの気にしてませんから…ね、猛！？」

…変わり身、早いなあ…おばさんに会う前は、あんなにガタガタ震えてたのに…

とても嬉しそうな沙織に、逆らうことはできないので…沙織が動揺してた事实は、僕の心の奥に閉じ込める。

男の僕が話に入れる雰囲気ではなくなったので、仲良さそうに話す二人をしばらく見ていた。

すると、急に僕の話題になり始める。

…あ、どうしよう…結構恥ずかしい…

「…料理も上手でしょ、それからキレイ好きで…あと、私が部屋を掃除したら頭をなでなでしてくれて…」

「…吉岡さんにとって、猛の魅力は両手の指じゃ足りないのね。」

「えゝ…でも、猛の嫌いなところもあるですよ？ 例えば、一緒にお風呂に入らないし…セックスだって、週に三日間しかしてくれないんです。」

「へえゝ…何曜日と何曜日に？」

「コラ、暴露しすぎだよ！…そしておばさんは、話に食いつかないで下さい！」

…全く、お目付け役がいないとすぐにコレだ…

僕が行き過ぎた会話に怒ると、二人はブーブー言いながら駄々をこねた。

ちゃんと叱っても聞く耳を持たないようなので、僕は仕方なく携帯を取り出して電話をかける。

…どうなっても…知らないからね…

その後、松永さんたちが来たあとの二人があまりにも悲惨だったことは……僕の方から言うまでもないかな…

## 第二十五話・何となく似てる？（後書き）

はい、作者です。

いや…話が進

みません。書いてると思うんですが、猛と沙織はもう少し控え目にしながら、内容をちゃんと進ませたいですね。（全ては私次第なんです…）

さて、内容のことで

すが…美鈴の母親には名前はありません。設定はあるんですが、流れる的に下の名前が出てくる必要ないので、『おばさん』や『おば様』といった呼び方で進めていきます。ご理解よろしく、お願いします。

次回は、また急激に

話が進むような…進まないような…相変わらずのグダグダだと思います。楽しみにしている人には先に謝ります…スイマセン…

これから長い目で、飽

きずに見てもらえたら嬉しい限りです。では、また次回…

第二十六話・シリアスなら手を叩こう！（前書き）

…書けば書くたび、グダグダになる気がします。では、どうぞ…



## 第二十六話・シリアスなら手を叩こう！

「…ホントに情けない。仮にも自分の母親ってところが、また泣けてくるわね。」

「私も似たようなものですよ、美鈴様。うちのお嬢様にも、もっとキツイお仕置きが必要かもしれません。」

「…！そ、そんな…脚がもう耐えられないのに…」

「そうよ美鈴、もう許してちょうだい。私も吉岡さんも、かなり反省したんだから…」

私とおば様は、深く反省していることを必死でアピールした。

玲奈とお姉様の説教を、一時間も正座で聞かされて…脚の感覚は麻痺しつつある。

…うつうつ…この目を見ても信じられないの…？…

猛なら一発で撃墜できる仔犬の目をウルウルさせて、この思いを純粹に伝えた。

仁王立ちで見下ろしているお姉様と玲奈も、少しは理解してくれたのだろうか…やっと開放してくれる。

ゆっくり立ち上がったけど、ジンジンする脚のせいで…ソファに座るまでに2回ほどこけそうになった。

何とか座って電気が走る脚をマッサージしていると…玲奈が私の横に、おば様たちは向かいのソファ―に腰を下ろす。

ちなみに猛は、昨日の倒れた原因を説明するため…いつもより早くバイトへ行った。

だから今、話の中心人物がいないため…部屋全体に微妙な空気が流れ始めている。

…玲奈がいるから、不用意な会話はできないし…どうしよう？…

そんな中、戸惑う私にお姉様が…真面目な顔をして聞いてきた。

「…沙織さんは、どうしても猛ちゃんと別れたくないのね？」

「は、はい！…私は、猛がそばにいてくれるだけで幸せですから！」

「…でも猛ちゃんは、それで本当に幸せかしら？」

「え？…あ、そ…そうだと思いますけど…」

「…学校が終わったら、夜遅くまでバイト…毎日毎日その繰り返しで、あの子は本当に幸せ？」

………そんなこと…言われても…

お姉様に言われて、少しだけ疑ってしまふ…実は猛が、無理してるんじゃないかと…

玲奈とおば様は黙ったまま、下を向いたり窓を眺めたり…どうして

いいかわからない様子を見せていた。

そんな二人と、お姉様の真っすぐな瞳でひしひしと感じてしまう。

…猛に無理させてるのは……………私？…

「でも猛は、一言も文句を言わないし…」

「沙織さんに言うわけないわよ。だって猛ちゃんは、沙織さんのそばに居られるだけで…幸せだと感じてるはずだもの。」

「……………」

「でも、それは感じているだけ…きっと猛ちゃんの体は、疲れを溜め込んでいるわ。」

「……………」

「よく考えてみて？…いくら双子だったとはいえ、お母さんを見ただけで猛ちゃんがパニックを起こすと思う？ その証拠に猛ちゃんは今日、平気でお母さんと話してたでしょ？」

一言、一言が重くのしかかる…お姉様が真剣だからこそ、いろんなことが余計に頭を駆け巡っていた。

…精神的ストレス…おば様を見ただけで、倒れるほどになるだろうか…

…もし、普段からのストレスの積み重ねが…表に出ただけだったとしたら…

…普段からストレスを感じてたとしたら…それはきつと……

「好きな人のそばにいられるってことは…それはそれは嬉しくて、楽しくて、全てがうまくいってると思ってしまう。」

「……………」

「けど沙織さん、本当に楽しいことだけだったの？…好きな人の嫌なところ、好きな人だからこそ許せないこと…一つも無かった？」

なぜお姉様は、私の心を覗くように話すのだろう？…何も言い返せない。

言われてること全てが、私の感情に当てはまっていた。

…私、キスのやり方一つで怒って…

…遅くに帰ってきた猛がすぐに寝ちゃっただけで、無理やり起こして注意したこともある…

…玲奈と二人だけで話してた時なんて、いじけて無視したし…

思いたせるだけでも私は、猛に対してイライラを感じたことがたくさんある。

私でさえ不満を感じてるのに、理不尽なわがママを言う私に対して…猛はどう感じていたんだろう…

「でもね、それは沙織さんだけが猛ちゃんを苦しめてるってわけじゃない。むしろ沙織さんは、猛ちゃんを助けてくれると思うの。」

「……………」

「猛ちゃんはまだ、子供なのよ。それなのに猛ちゃんのお母さんが亡くなったせいで、大人にならなければ生きていけなくなった。」

「……………猛の…お母様……………」

「母親が亡くなってすぐなのに、自分の悲しみを押し殺して…………無理をしながらバイトを繰り返す。」

「……………そんな……………」

「もし、沙織さんが隣で支えてなければ……………もっと早くに、倒れてたかもしれないわね。」

……………少し考えれば……………気づけたはずなのに……………

猛は私の前で、絶対にお母様の話なんてしなかった。

優しい猛が気にしてないわけなかったはずなのに……………その優しさで気づけなかった、気づこうとさえしなかった……………もしかしたら、気づきたくなかったのかもしれない。

猛の優しさにあぐらかいて、私はわがママを言いたい放題だった。

お風呂だっていつもシャワーだけだし、お弁当のおかずにも冷凍食品を使わない……………そんな節約をしてまでお金を大切にしている猛に対しても、私はケチケチ言ってるだけ。

…猛の負担を…私なら軽くできたはずなのに…

「…それでも私は、猛ちゃんが嫌だつて言う限り…無理に養子にしようとは思わないわ。」

「……お姉様…私は、一体どうすれば…」

「待つて、沙織さん…私はあなたを責めるつもりなんてないの。」

「…でも、今の話を聞いたあとで…猛と今まで通りに生活するなんて…」

「……それなら猛ちゃんが高校を卒業するときに、もう一度だけお願いをしに来るわ。」

「…卒業…」

「大学とかを考えたら、猛ちゃんの気持ちも変わるかもしれない。」

あ、もちろん私たちは猛ちゃんが養子になりたいと言えば…いつでも大歓迎よ？　ね、お母さん。」

お姉様の隣で黙っていたおば様が、微笑みながら頷いた。

それと同時に、お姉様たちはスツと立ち上がり…帰る準備をしている。

引き止めたい…でもこれ以上、話す必要がないことぐらい私でもわかっていた。

玲奈と一緒に玄関まで見送りに行くと、お姉様が振り返って頭を下げる。

「…昨日はごめんなさい。お金なんて用意して…」

「も、もういいですよ。お姉様の気持ちがあれば、私はそれで充分です。」

「最後にもう一つだけ…どうか、猛ちゃんを傷つけないでね？…離れていても私たちは家族。いつでも心配してるんだから…」

「……………わかりました。じゃあ私もお姉様に、わがママを言っているんですか？」

私の発言に、お姉様たちはキョトンとしてしまう。

横で玲奈が慌ててるけど、別にこれと言って酷いわがままではないので…私は玲奈を押しつけて話を続けた。

「…いつでもいいんで、また遊びに来て下さい！　そして私のダメなところを、ちゃんと叱って下さい！」

「…本当にいいの？」

「当たり前です！…おば様も、また話しましょうね！」

「じゃ、明日来てもいいかしら？」

「明日は役員会議でしょ！…またサボる気！？」

…【また】って…過去にサボったことあるのね…さすがおば様…

エレベーターの前まで付いて行き、笑いながら手を振る。

お姉様たちが乗りこみ、降りていくエレベーターを確認してから…  
玲奈に抱きついた。

…身勝手な話だと思ってた…藤ノ宮っていう名前だけで、向こうの家のゴタゴタに巻き込まれてると思ってた…

…でも違った…二人は猛の家族として、猛のために全てを考えてた…

…お姉様は、猛が苦しまないように養子にしようと考え…おば様は、猛が私と一緒にいたいと願ったからそれを許してくれた…

…結局、猛のこと大切にしてなかったのは…私だけじゃない…

………最低…だ…

久し振りに玲奈の胸で、嗚咽混じりの号泣をしながら…『ごめんな



さい、ごめんなさい』…と小声で繰り返す。

何も言わずに抱きしめてくれる玲奈のおかげで、さらに私の涙腺はゆるくなった。

…私にも…この優しさがあれば…よかったのに…

周りの人たちに優しくされる度に、改めて私だけが子供だと知らされる。

エレベーターの前で時間も忘れ…涙が涸れるまで自分の情けなさを罵倒し続けた…

夜、猛が帰って来てから二人で真剣に話し合っている。

私たちの間に、隠し事は嫌だから…不満に思ってることを猛にちゃんと聞いた。

…どうせ…猛の答えは決まってるけど…

「さ、沙織に不満なんてあるわけがないよ!」

「…やっぱり。」

「それにしても…僕が沙織にストレスを感じてる!?!…ふざけるな!…!」

「…………あれ?…なんか猛、急に怒ってない?」

「ああ、久しぶりに頭にきたぞ!…今から美鈴さんに、文句を言うてやる!…!」

猛がいきなり携帯を取り出すと、お姉様に電話をかけようとしている。

夜中の12時を回っているのに、電話をかけるなんてあまりにも失礼だ。

急いで猛から携帯を奪い、怒りを静めるようにお願いする。

…めずらしい…猛が冷静じゃなくなるなんて…

「…ごめん、沙織。僕が頼りないから、こんなに目を腫らすまで泣いてたんだよね…」

「え、嘘!?!…そ、そんなに腫れてる?」

「うん、かなり酷いかも…それにしたって、美鈴さんのせいで沙織が泣くなんて…絶対許せないよ！」

「お、お姉様は悪くないの！…猛のために話してくれて、それを聞いた私が勝手に泣いただけで…」

「美鈴さんが余計なことを言うから、沙織の素直な心が傷ついたんじゃないか！ 言いたいことがあるなら、僕に直接言えばいいのに！…！」

…私が泣いただけで怒るなんて…猛って意外に、気が短いのかも…ただ今マジギレ中の猛は、ソファアを立ったり座ったりしながら…やり場のない怒りを持て余していた。

それでも、私が腫れた目に触れようとしたとき…『擦っちゃダメだよ！』と、透明なビニール袋に氷水を準備してくれる。

洗面所からタオルを持ってきて氷水を包むと、私にそれを渡しながら…猛は何度も私の目を見つめた。

…あう…怒ってたクセに…

猛はただ単純に、私の目を心配しているはずだけど…猛に見つめられると甘えなくなるこの性格では、はつきり言って拷問に近い。

バイトで疲れてる猛に、私のわがままを押し付けたくない…赤くなつた顔をごまかすためにも、私は目を閉じて静かに氷水をあてた。

氷水はタオルに包んでるため、ほんのり冷たくて凄く気持ちいい。

…猛のバカ…その些細な優しさが、私を苦しめてるのよ…

真つ暗闇で何も見えない世界の中、思い描くのは結局…猛の笑顔と優しさだった。

しばらく目を閉じていると、いつの間にか眠気に襲われている。

ソファーに深くもたれて、そのまま寝ようかなあ…と思い始めたとき、唇に何かが触れた。

タオルを少しだけ動かし片目で確認すると、目の前には……

「キャッ！」

「うわっ！ お、起きてたの！？」

「な…何してんのよ、猛！？」

「いや、その……ほら！ 蚊が止まってたからさ！」

「ふ…ん…猛は私の口に止まった、《蚊》にキスしたんだね？…

ふ…ん…」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……嘘です、ごめんなさい……」

フローリングの床に頭をつけながら土下座する猛を、私はソファー

から見下ろしている。

別に怒ってはいないけど、普段は私が怒られてばかりなので…猛にも少し、【反省】してもらうことにした。

…さうて…どうしてくれようかしら？…

まずこういうときの基本は、犯行動機を明らかにするべきだと思うたので…犯人に尋問を始める。

「いつもなら、土曜日の夜は……その…ねえ？」

「？…なによ、はつきり言いなさい。」

「…沙織と…エッチする日だから…」

「………はあ？」

「だって今日は、おかえりのキスも無かったし…それに沙織の目を見てたら、僕の本能が体の自由を奪って…」

正座したまま、猛は顔を赤くしていいわけを並べていた。

あたふたする様子が滑稽に見えて、私は必死に笑いを堪える。

…うふふ…猛も結局、私とセックスしたかったんだ…うふふ…

しかし、まだまだ犯人を追い込みたい私は…ここぞとばかりに迫及した。

「へえ…私にあれだけダメダメ言っというて、猛は寝てる私を襲うんだ…もはや犯罪ですね。」

「ぼ…僕がダメって言うときは、松永さんの前や学校のような人前でだけだよ！」

「…それ意外は断らないの？」

「当たり前だよ！ 僕がしたいぐらいなのに、断るわけ無いって！

…実際二人つきりなら、僕からもしてたじゃないか。」

…まあ確かに、そう言われれば…

玲奈がいない日曜とか、朝から猛とチュッチュしてるし…おはようのキスは大体、猛からしてくれる。

お姉様の話を聞いたあと、全面的に私が悪いような気がしてたのに…今の猛を見たら、我慢してたことがバカらしくなってきた。

そもそも私にベタ惚れな猛が、私の誘いを負担に思うわけがない。

…猛が恋し過ぎて、真実が見えてなかったんだ……誰かに『恋は盲目』って言われたのが、懐かしいわね…

とりあえず、シュン…としてしまった猛に本日の判決を言い渡した。

「今から三日間、猛からのキス禁止！」

「えゝ！？ 朝もダメなの！？」

「当然でしょ？…寝込みを襲うなんて、本当なら懲役刑なんだからね！」

「…沙織はそれでいいの？」

「もちろん！ だって…」

背中を丸めながら私を見上げてる猛に、ゆっくり唇を重ねていく。

…私からは制限ないからね…満足、満足…

優越感に浸る私だけど、一つだけ後悔することがあった。

お姉様に対して、猛が怒っていることである。

二人がちゃんと話し合えばこんなことにはならなかったのに、二人の間に私という他人が入ってしまった。

唇を離して、猛が弱い…【上目づかい】でお願いしてみる。

「…もう、お姉様に怒らないですよ？」

「さあ？…沙織とエッチできたら、忘れるかもしれないけど…ね？」

「…大丈夫？ 猛の体、疲れが溜まってるんじゃない？」

「じゃあ仮に、沙織が疲れてるとして…僕が誘ったら断る？」

「……………聞くだけ無駄ね。」

猛に手を引かれて、昨日で綺麗に掃除してあった寝室に向かった。

私を先に入れ、いつもは閉めない鍵を閉めた猛…どうやら、今夜は寝かしてくれないらしい。

…お姉様ごめんなさい…私はやっぱり、ダメな女なんです…

電気が消された部屋で、猛と二人…愛に溺れて幸せを感じていた。

時が立つのも忘れて…夢心地に浸りながら………

朝早く、ドアを叩く音を聞いて二人で笑ったのは…玲奈には内緒。



## 第二十六話・シリアスなら手を叩こう！（後書き）

はい、作者です。

結局気にしない、

それがこの物語りの基本です。

美鈴の話を

気にして、二人が微妙な関係になるような話も考えましたが…性に合わなかったので、強引に曲げました。

さて唐突に、次回は最終回！…と言いたところですが、あと少しだけ広げたいので…あと二回？…かもしれません。 作者はテキストなので、曖昧ですいません… 楽

しんで読んでもらえたら、作者は嬉しい限りです。では、また次回

…

第二十七話・僕を照らす太陽（前書き）

…しつこい二人に飽きずに見てください。では、どうぞ…

## 第二十七話・僕を照らす太陽

…あれから、どれくらい時間が経っただろうか…

出会った頃の沙織は、僕にとって【高嶺の花】だった…今でもただ。

話しかけるたびに、僕は胸がドキドキしてたし…僕の話で笑ってくれた時なんて、この笑顔を忘れぬうちに死ねたらどんなに幸せかと本気で思えた。

僕に向かって『好き』と言いながら、涙を流してくれた沙織の姿は…これから一生、忘れられないだろう。

いきなり一緒に暮らし始めたことも、沙織が凄く甘えん坊だったことも…最初は驚きだったけど、今はもう僕の生活の一部になっている。

だから、沙織と共に同じ時間を過ごしていきたい…今という一瞬を積み重ねながら、二人で永遠を感じたい。

…必ず、幸せにするよ…ありきたりでつまらないかも知れないけれど、僕の想いそのものを伝える言葉…

…沙織なら、『私が猛を幸せにする！』…なんて言ってくれそうだけど、この役目だけは譲れない！…絶対に僕が、沙織を幸せにするんだ！…

…沙織に釣り合うほど、顔は格好良くないけれど…こんな僕でも良かったら、沙織……僕と…

美鈴さんとおばさんが家に来た日から約二ヶ月後…特別何もない、そんな日の夜遅く…

「…ねえ沙織。」

「ん〜？」

「僕のこと…好き？」

「好き〜、愛してる〜。」

「僕も好きだよ…愛してる。」

「エヘヘ…いまさら何なの？…恥ずかしいわよ。」

「ダメだ、我慢できそうにない…キスしていい？」

恥ずかしそうにモジモジしながら、沙織は静かに目を閉じた。

ベットに並んで寝ている僕は、体制を直しながら沙織に唇を重ねる。

明日も学校だからエッチは無し…でも、体は確実に沙織を求めている。

この狂いかけの気持ちをぶつけるように、沙織の唇へ何度も何度も口づけを繰り返してゆく。

そんな僕を知ってか知らずか…背中に回っている沙織の手にも、キスの度に力が込められた。

…愛してるんだ…沙織、まだまだ足りないよ…

「ん…猛、最近なんか変よ？…積極的というか、激しい気がするんだけど…」

「ごめんね沙織。だけど僕、沙織のことが愛しくて仕方ないんだ。」

「…もう、猛はいつも直球で愛を語るんだから…」

「回りくどい言い方じゃ、沙織には伝わらないからね。」

「それもそっか？…ん？…それってつまり、私がバカって言いたいの！？ 許せない！！！」

…痛タタタッ！…そ、そんなつもりじゃ…

怒った沙織が、パンチを無造作に繰り出す。

沙織も学習したのか、僕の肩ばかりを集中的に狙っている…恐ろしい格闘センスだ。

右手は沙織にうで枕してあげてるので、左手一本の防御では沙織の攻撃に太刀打ちできない。

…人の話をちゃんと聞かないくせに…勝手に暴走して…

今の沙織を止める方法は二つ…松永さんと呼ぶか、沙織とラブラブするかどちらかしかない。

こんな夜遅くから、松永さんと呼ぶのは正直気が引けた。

仕方ないので、うで枕してる手で暴走する沙織を抱き寄せ…ギュッと力強く抱きしめる。

「…僕の話、聞いてくれる？」

「は、離さないよー！」

「…あれは、完全に僕が悪かった…許してほしい。」

「そ…そんなこと言っただってね、簡単に許すもんですか！」

「…沙織が許してくれたら、キスしてあ…」

「よし、許す！」

……………プライド…無いのかなあ…………

僕はまだ言いかけだったのに、沙織はひよつとこみtainな口をして『ウェルカム!』と言ってる…何とも情けない表情だ。

けどそんな沙織が好きな僕に反論する余地は無く、同じように口を尖らせてキスをする。

謝罪のキスは長い必要がないので、僕はすぐに口を離した。

………お、意外だなあ…短いって怒ると思ったのに…

「……………」

「沙織?…どうしたの?」

「…猛、結婚しよ?」

「またそんな…今月で、12回目だよ?」

「今日こそ本気なの!…それとも猛は、私と結婚したくないの!?」

僕の胸に抱きついたままの沙織が、ウルウルした目で訴える。

返事に困った僕は、沙織の頭を撫でながら天井を見上げてしまった。

…結婚のことをどうでもいいと思ってたら、回数まではわざわざ数えないよ…

沙織が真剣な顔で見つめてくるたび、僕も真剣に考えている。

…確か最初に結婚の話が出たのは、美鈴さんたちが帰った日の夜…

エッチをした後に言われた。

一緒に暮らし始めた時の悪ふざけとは違う、沙織の心からの願いに本気で喜んでいる。

でも考えれば考えるほど、沙織の笑顔を守れるのかどうか本当に悩んだ。

……つくづく嫌になる……自分に何もないって……

「……また、何も言わずにごまかすの!？」

「……」

「お願い、正直に話して!……猛の気持ちを……私に聞かせてよ……」

「……僕は……僕は、沙織と結婚したい。」

「……!……!……じゃあ、私と結婚してくれるのね!？」

「必ず結婚するよ。でも……今はまだ、早いと思うんだ。」

一瞬、エベレストの頂上に手が届くほど上がった沙織のテンションは……地球の地下深く、マントル付近まで落ち込んでいく。

そうなることを予想していた僕は、沙織の暗い顔を覗き込みながら正直に今まで考え抜いたことを話し始めた。

……今の生活がとても幸せで……沙織のことを永遠に守ってあげたくて……でも今の僕はただの子供で……沙織を幸せにできるようになるには、これからもいろんな努力が必要で……





「…これだけ言ってもわからないの？…沙織より綺麗な人なんて、この世にいるわけ無いじゃんか！！！」

「じゃあなんで玲奈とかEカップみたいな、綺麗な女がゴロゴロいるの！？」

「松永さんや真理絵さんなんて、沙織に比べたらマネキン以下の存在だよ！」

「……………マネキン…ねえ……………」

突然、ドアのほうから声が聞こえてくる。

耳に聞き慣れたその声は、大きいわけじゃないのに…頭に響き渡った。

…あ、あ、あ…と、鳥肌が立ってきたぞ…

恐る恐る…ドアに寄り掛かって立っている女性を確認する。

「玲奈、アンタ何してんのよ！？」

「大声がしたから目覚めたっつーの。それより…まさか仲野くんが、私をマネキン呼ばわりするとはね……………世も末だわ。」

「あ、ちが…僕がマネキンって言ったのは、女性としては美しいけど僕は松永さんに何も感じないという意味で……………」

「…仲野くん、私と少し【お話】しましょ？」

「……………はい……………」

「仲野くんはソファーに座る？…それとも、床がいいかしら？」

「……………床で正座します……………」

「フフフッ…仲野くんは賢いわね。」

何回見ても、コワイ笑顔というのは慣れません。

松永さんに指で促され、僕はリビングへと向かった。

…もう…好きにしてください…

「…で、どう思います?」

「…うーん…仲野くんが正しいと思うわ。」

「そ、そんな…玲奈は私の味方じゃないの?」

「私はいつでも、アンタの味方よ?…だから、私は仲野くんが正しいって言うてんの。」

未だ正座中の僕と、離れたくないと言って僕の隣で一緒に正座してる沙織は、松永さんに先ほどの言い合いの説明をした。

松永さんはソファアに座りながら、頑固な沙織を諭すように話している。

沙織も最初はブーブーと言っていたが、松永さんに否定されたことにより少しずつ納得し始めた。

…話は終わってたはずなのに…松永さんは、どうしてあんなことを…

「…玲奈がそこまで言うなら、私も諦め…」

「でもね、そろそろ次の段階に進むのもアリかもね。」

「へ？…次の段階？」

「…二人とも、婚約しなさい。」

「……………こ、婚約ですか!？」

「そう。ダラダラと付き合ってるだけじゃなく、周りを納得させるためにも…正式に《形》を表しなさい。」

立ち上がって、ビシッ…と指を指しながら、松永さんは僕たちを見下ろしている。

確かに今のままズルズルと同棲を続けていれば、僕は良くても沙織のほうは問題になるはずだ。

メイリーグループ会長の一人娘が、高校生の身で男と同棲してる…

関係者から見れば、少なくとも好印象を持つことは無いだろう。

松永さんも会社の人間…いろいろと僕たちのことを、気にかけていたはずだ。

…高校生で結婚するにはまた問題がある…でも、同棲している男が婚約者なら…世間的にも何とか通じるかも知れない…

正座しながらも抱きついてくる沙織を見つめて、改めて思い知る…沙織の隣にいられるだけで奇跡なんだと…

「…僕も男だ。今の関係に甘えてばかりはいられないよね？」

「た、猛？…それって、つまり…」

「………僕と、婚約してくれる？」

「キヤー、キヤー！！！！！！ ちよつと玲奈、聞いた！？…録音、録音しなきゃ！」

跳びはねるように喜んだ沙織が、松永さんの手を掴んで引つ張り回している。

松永さんはうざそうにしながらも、一緒にあたふたしていた。

…自分の立場がわかってないんだから…全く…

しばらくして落ち着いたところを見計らい、松永さんに今後の予定を確認する。

「…いつ頃、挨拶に行けますか？」

「わからないわ。一ヶ月ぐらい後かしら？」

「…ねえ、何の話？」

「？…沙織のお父さんに会いに行く話だよ？」

「何で、パパに会うの？」

「…アンタ、わからないの？…婚約するからには、親に報告するのは普通でしょ。」

「そっかー！…猛も大変だわね。」

……………完全に他人事なんですネ…

松永さんと顔を見合わせ、軽く呆れてしまった。

それに嫉妬した沙織が、まだ正座してる僕を押し倒してくる。

…まただよ…本当に懲りないんだから…

『浮気、良くない』…と頬を膨らませた姿が凄く可愛くて、僕から唇を重ねた。

…浮気なんて出来るわけないよ…こんなに沙織を、愛してるんだからさ…

そして今、僕は飲み込まれそうなほどデカイ屋敷である沙織の家にいる。

松永さんに連れられ、客間と呼ぶには豪華過ぎる部屋の中で…黒いスーツを着て待っていた。

不思議と緊張はしてない…つもり。

「仲野くん…サイズは？」

「ピッタリですよ。じゃ、そろそろ行きましようか。」

「やっぱり、私も一緒に行く？ そのほうが仲野くんも安心できるでしょ？」

「大丈夫。沙織と二人で行かなきゃ、意味がないから。」

「…じゃあ私から一言、ドゥーユアベスト！」

「イエス、オフコース！」

…いよいよだ…我が人生最大の山場…かな？…

再び松永さんに案内されて、大きな両開きのドアの前に立った。

松永さんに一礼して、僕は扉をノックする。

…絶対に幸せにするからね………沙織…



## 第二十七話・僕を照らす太陽（後書き）

はい、作者です。

猛ならこうプロ

ポーズするだろうと思い、冒頭に書いてみました。本文には関係なくですいません。

さ

て…猛は沙織の父親に会いますが、無事に終わるでしょうか？ 作者も疑問です…

次回に続くの

で、次も楽しく読んでいただけたら嬉しい限りです。では、また次回…

## 第二十八話・二人の夢（前書き）

…相変わらずです。では、どうぞ…

## 第二十八話・二人の夢

「あのね、パパ…猛って凄く頭が良くてね…」

「……………」

「優しいし、私を第一に考えてくれてるし…」

「……………沙織…少しだけ黙ってなさい…」

いつも優しいはずのパパが、イスに座ったままで机に肘を着いて私の話を遮った。

できれば猛の良いところをアピールしたかったのに、今のパパの雰囲気では話せそうにない。

…もしかしてパパ…私の結婚に反対なの？…

素っ気ないパパの対応に急に疑問を感じ始めた時、ドアのほうからノックする音が聞こえた。

パパが何も言わなかったので、私が代わりに返事をする。

「猛？…入って。」

「…失礼します。」

「じゃあ、紹介するね。パパ、この人が私の好きな…」

「沙織、ちょっと待って。自分で挨拶したいんだ…本当に悪いけど、

静かにしてくれる？」

…なによ、さつきから…私は邪魔なわけ？…

今度は猛に話を遮られてしまい、私は立場がなくなってしまった。

パパだけでなく、猛にも冷たくされたので少しすねると…猛が私を見つめながら、『ゴメンね』と軽く手を握ってくれる。

ただでさえスーツを着ている猛が大人っぽく見えるのに、苛立ちを感じた状態で優しく手を握られちゃうと…胸はキュンと高鳴った。

…うっ…帰ったら絶対、キスしてもらうからね！…

私は猛のために握った手を離して…口にチャックをする。

それを見ると猛は微笑んで、私の頭を二、三回ほど撫でてくれた。

私も顔が緩んだけれど、パパの咳ばらいで意識が現実に戻ってしまった。

………危ない、危ない…パパの前で、正気を失うところだったわ…

甘い空気はパパに吹き飛ばされ、一気に緊張感が高まった。

猛も真剣な顔付きに変わって、真っすぐにパパを見つめている。

このような場面では、私がしゃしゃり出ると話がややこしくなるの

で…猛に全てを任せるために、自ら一步引いた。

私が引くのを確認した猛は深呼吸を一度すると、パパの机の前に立ち自己紹介を始める。

…夫としての最初の仕事だからね…ガンバレ！…

「…初めまして、仲野猛と言います。一年ほど前から、沙織さんとお付き合いさせてもらってますが…今まで挨拶に來れなくて申し訳ありませんでした。」

「…いや、それはいい。私も忙しかったからな…」

「沙織さんのお父さんには、本当に心から感謝しています。僕のような、どこの誰かもわからない男に住む場所まで面倒を見てもらって…」

「…しつこいぞ。君は、そんな話をしたくて私を呼んだのか？…ちゃんと聞くから、話したいことを話さない。」

「……………わかりました。回りくどくてすいません…」

玲奈から大体の話を聞いているのだろう…パパは猛に『早く本題を話せ』と促した。

パパの言い方は、確かに荒々しかったけど…表情は大して怒っている感じでなく、何かを待ってるような目で猛を観察しているのが私にはわかる。

一方の猛も、グダグダな挨拶を抜きにしてひざまずくと…床に手を

着き、パパに向かって深々と頭を下げた。

…まったく、不器用なんだから…パパも猛も…

「…必ず沙織さんを幸せにします！ だから沙織さんと、結婚させて下さい……！」

「……君は沙織を、本当に幸せに出来るんだな？」

「はい！ 沙織さんは、僕が隣にいただけで幸せだと言ってくれました…沙織さんと僕の幸せが重なった今、もう何の迷いもありません。ですからお願いします…僕たちの結婚を、許してください……！」

「…そう、か……沙織も、結婚に後悔は無いのか？」

「……ふえ？…私？」

急にパパが私に話かけてきたので、返事に戸惑ってしまっ。

…うん…結婚しちゃうと、猛はもうプロポーズしてくれないし…

パパに必死でお願いしてる猛の後ろ姿が男らしいので、今日の一回で終わらせてしまうのはもったいない気がした。

どうせなら、あと100回ぐらいロマンチックなプロポーズをして欲しい…と、心の中ではマジメに考えてしまう。

………ま、そんな冗談はさておき…

「パパ、勘違いしてない？…私が猛と結婚したいの！ 後悔なんてするわけないわよ。」

「…苦労するぞ、それでもいいのか？」

「もっちゃん！…この人が、私を永遠に守ってくれるもんね！」

「ちょ、ちよつと沙織…お父さんの前では抱きつかないって、松永さんとの約束が…」

…そんなの知らなくい…玲奈が勝手に言っただけじゃないの？…

そもそも私に向かって、猛に触れるな…というのが無理な話だ。

座った状態の猛に覆いかぶさるように、後ろから抱きついて『ムフフ…』と気持ち悪く笑ってしまう。

パパが異常に引いているけど、私は気にせず猛の頬にチュツチュと2回もキスをした。

…ふっふっふ…猛がア然としてる間に、もう一回しちゃえ！…

3回目を強行した瞬間…ついに心が折れたらしく、パパは淡々と話し始める。

「わかった、わかった。結婚を認めてあげるから、いい加減キスは止めなさい。」

「やった〜! ムフフ…」

「あ、ありがとうございます!!!!!!」

「わがままな娘だから、気をしっかりな。」

「はい、大丈夫です!…できる限り、取り扱いには注意してますので…」

猛は真面目な顔でパパを見つめながら、私が猛獣かのように言い放った。

…取り扱う!?!…簡単に言ってくれたわね!…

恋人として、それから妻として…今の猛の発言は絶対に許せない。

猛の首を本気で掴み、右へ左へ振り回した。

パパの前で緊張している猛は、私にされるがままに苦しんでる。

そんな私たちの上下関係を垣間見たパパが、軽く微笑むのを私は見逃さなかった。

…やっと笑ってくれた…ありがとね、パパ…



…最初から、反対する気は無かったらしい。

玲奈からいろいろと聞いてパパも猛のことを気に入ってる様子で、その後もめずらしく話が弾んでいた。

そんな中、私と猛はなぜか未だに机の前で正座をしている。

そろそろ立ちたいけど、パパの許可無しに立ち上がらないのが猛の性格…だから潔く諦めた。

猛も笑顔を見せ始めてるので、私は脚が痛いのを我慢しながら話を合わせている。

「…バカっぽいかも知れんが、こんな娘でも世界で一番カワイイと思ってるな…」

「あ、僕も同じ意見です。」

「だろ？ 初めて君のことを玲奈に聞いた時は、さすがに不快に感じたんだが…『お嬢様を一番に考え、お嬢様のことを御主人様より愛せるのは彼しかいません』…とまで玲奈に言われたら、何も反論はできなかったよ。」

「なんだかんだで、私たちの味方よね…あの女。」

「…それに君は、庶出とはいえ藤ノ宮さんとこの息子だそうじゃな

いか。」

「…はい、何やら複雑な環境らしいです。」

「藤ノ宮の家なら、楽に暮らせるにも拘わらず…今のキツイ生活を選んでも沙織と同棲するほうが良いなんて、私としては嬉しいやら悲しいやら何とやら…」

パパは顎に生えてる短いヒゲを触りながら、猛を微妙に褒めた。

隣の猛も、気まずそうにしながら笑っている。

すでに【親子】なんだから、自然にしてほしいんだけど…今はこれぐらいで充分かも知れない。

…それにしても…ついに私たちも婚約したんだね…

私と猛の間に、もう何も邪魔する存在は無くなった。

そう…猛といちゃいちゃしたって、あの冷徹超人は何も言えない。

これからはわざと玲奈に見せ付けるように、キスやセックスも堂々と…

「…卒業するまで、妊娠にだけは気をつけなさい。」

「……………」

「も、もちろんです！…ちゃんと婚約したからこそ、節度をもったお付き合いを…」

「えゝ！？…やっとう今日から、毎晩一緒だと思ってたのに…」

「……………」

「……………」

「…………… 本当に、こんな娘でも君は幸せなのか？」

「…………… 愛されてる証拠だと思えば、何とか…」

…ふん！…妊娠しなきゃいいんでしょ！？…毎日避妊すれば、何の問題も無いわね…

婚約したことにより、週三日の【夜の営み】が…私の中ではすでに週七日に格上げしていた。

今はとりあえず、パパの機嫌を損ねないように私もおとなしく引き下がるけど…部屋に帰ればパパも手が出せないだろう。

パパとの話を早急に終わらせて、今日こそは一緒にお風呂へ！…と、意気込みながら立ち上がった。

猛を強引に引つ張りドアに手を触れたその瞬間、パパが重々しい感じで口を開く。

「娘をよろしく頼む。」

「…………… もちろんです、ありがとうございました。」

「…沙織も、淋しくなったらいつでも帰って来ていいからな。」

「ごめんね、パパ…もう二度と帰る予定は無いの。」

「…………… わかった。幸せになるんだよ、沙織…」

笑顔で手を振り、パパに別れの挨拶をした。

泣いたりするのは違うと思った…だってこれから幸せになるために、パパと離れるんだから。

…たまには遊びに来るからね、パパ…

外に出てドアを閉めた後、廊下ですっと待っていた玲奈に結果報告した。

「…そう…おめでと。」

「うん、ありがとう!」

「で、どうするの?…私はまだ少し残るけど、先に帰る?」

「…玲奈…できるだけ、ゆっくり帰って来てね?…どうせなら今日は帰らなくていいから。」

「…ハア…腰痛にならないでよ?」

… なっちゃんかも…

呆れた顔をしてる玲奈を無視して、猛の腰を軽くポンツと叩く。

猛は笑うしかないらしく、私を見つめてはずっと微笑んでいた。

『アディオス、アミーゴ!』…と玲奈に叫びながら、猛の腕にしがみつき玄関へと歩きだす

送り迎えの車も断りつつ、ハイテンションのまま猛と二人ラブラブで家を後にした。

…さて、今夜は二人の婚約記念日…張り切って行こー!…

「…まったく、彼も苦労するだろう…」

「大丈夫ですよ。仲野様も、満更じゃなさそうな様子ですから。」

「そうか?…お前が言うくらいなんだから、彼が沙織の相手ですまず間違いは無いだろうが…」

「はい。では、私はまだ少し仕事が残ってますので…」

「まあ待ちなさい玲奈。お前はこれから、私の子供を《二人》も面倒見ることになるのか?」

「そうですね、何か問題でも?」

「…………いや、なんでもない…気にするな。」

「では、失礼します。」

…何か心に引っ掛かる、玲奈はそんな気分だった。

## 第二十八話・二人の夢（後書き）

はい、作者です。

最後の表現で、

かなり苦労しました。沙織パパの含みのある言葉と玲奈の反応がうまく表現できず、私の未熟さを痛感させられました。

さて…本編はあと一話で終わりですが、卒業式まで時間が一気に飛んでしまうので先に玲奈の恋を書きたいと思います。微妙な空気は無視しながら、『こんなもんか…』的な考えで期待しててくださいね。

次も楽しみにしてくれたら、嬉しい限りです。では、また次回…

**第二十九話・番外編1…完璧な女の場合（前書き）**

玲奈視点です。軽い感じで見てください。では、どうぞ…



## 第二十九話・番外編1…完璧な女の場合

突然、御主人様から連絡があつた。

いつもなら真つ先に要件を伝えるはずなのだが、『屋敷に来なさい』  
…とだけ言われたので不思議に感じている。

だが疑問を感じたところで御主人様に仕える身の私には、考える必要性も意味も無い。

すぐに身支度を整えてから戸締まりすると、私は急いで屋敷に向かうとした。

しかしエレベーターの前まで行くと、本能なのか知らないがとてつもない悪寒を感じてしまう。

…あのバカップル…昼間から、まさか…

エレベーターに乗り込み、ロビーではなく一階上のボタンを押した。

…実は来週から三年生になるので、学校は一昨日から春休みに突入している。

それにこの時間では仲野くんもバイトじゃないので、120%二人は一緒のはずだ。

最上階に着くと、ためらわずに仲野くんの部屋のドアノブに手を添える。

…仮に、二人が真つ最中だった場合は…一ヶ月間セックス禁止ね…  
音をたてずに中へ侵入し、警戒しながらリビングに近づいた。

すると二人が、ソファーに座りながら脚を絡ませているではないか。  
桃色のオーラを放ち、何とも幸せそうな顔で見つめ合っては濃厚な  
キスを繰り返している。

…うわ、やっぱりだわ…ベッタベタで、エロエロなんだから…  
セックスこそしてないが、アメリカのポルノ映画並にいやらしい光  
景を目の当たりにした私の怒りは爆発寸前だ。

仲野くんが沙織を優しくソファーに押し倒すという状況を確認した  
瞬間、唐突に話し掛けて二人の雰囲気を変えて壊す。

「…お食事中、失礼してもいいかしら？」  
「……………れ、玲奈！？ い、い、いつからそこに！？」  
「ち、違っただよ、松永さん！？ ……こ、これにはわけがあつて…」  
「…ハア…いいわね、婚約するって。誰にも遠慮せずに朝から  
晩までチュッチュチュチュ…って、ふざけんじゃないわよ！  
……………」

怒号を上げながら睨むと、二人は黙って部屋の角に移動し正座をし

た。

…全く…婚約させたのは失敗だったかもしれないわね…

最低でも30分は、一般常識などをわかりやすくネチネチと伝えたいとこだが…今日は御主人様に呼ばれている。

仕方ないので軽い注意と、沙織だけにデコピンのオプションを付けてあげた。

「イギギ…何で、私だけにデコピンすんのよ!？」

「アンタは体に叩き込まなきゃ、一生理解しないでしょ!」

「ううう…猛、頭にヒビ入ってない？」

「あ、かなり赤くなってるよ…大丈夫？」

「………おでこにチューしてくれたら、治るかも…」

「…コラ! 少しは懲りなさい!!!」

沙織は私などお構い無しに、仲野くんを上目使いで誘惑している。

かなりムカついたので、赤くなってる沙織の額をもう一度デコピンで思いっきり打ち抜いた。

もがいてる沙織を見下ろし、そのまま部屋を後にする。

…帰って来たら、あの女の再教育から考えなきゃね…

屋敷に来たけど、御主人様の車が無いじゃないの…どういうこと？  
書斎や寝室、全ての客間まで調べたが…使用人達も御主人様を見て  
ないとのことだった。

それどころかあるメイドの話だと、『屋敷の護衛が何人が会社に呼  
ばれていた』…という。

…ってことは、御主人様は会社なの？…じゃあ私に用事って何かし  
ら？…

元自分の部屋で少し考えるが、さすがに私もわからなかった。

のんびりしても仕方がないので、携帯で連絡を取ろうとした時…聞き  
慣れた声がドアのノックと共に聞こえてくる。

「レナ姉、レナねえ！…ここか？」

「大？…大なの？」

「お、いたいた…探したんだぜ、レナ姉。」

「…はあ？」

…私は、両親の顔を知らない。

気付いた頃には、施設で育っていた。

でも不思議と悲しいとか寂しいという気持ちは、一度足りとも感じたことは無い。

園長や兄弟姉妹のお陰で、毎日が充実していたからだ。

特に園長はおもしろい上に、何より私達を心の底から愛してくれていた。

親がいないことでイジメられないように、小さい子にも格闘技を教

えてるのは…異常だと思ってたけど。

…まあそのおかげで今の仕事に受かったわけだから、全面否定は出来ないわね…

「…レナ姉ってば、また無視すんのか？」

「あ、ごめん…じゃないわよ。一体どういうこと？」

「俺が聞きたいぐらいだって…いきなり御主人様に、『私の護衛をやめてくれ』…って言われてさ。」

「……え、クビ？」

「違うつて！…『玲奈に聞けばわかるから、屋敷へ行きなさい』…だつてよ。で、何か俺に用か？」

…何も聞いてないのに、わかるわけじゃない…どうしよ？…

ちなみにこのスーツの男、かじかわだいすけ梶川大輔は、私より一つ年下で同じ施設出身だ。

幼い時から私に金魚の糞で、頭が悪かった大は私のことを『玲奈』でなく『レナ』…と180cmになった今でも呼び続けている。

この仕事に就いてからは離れ離れだったけれど、私がいまにも優秀なお陰で…御主人様のご厚意により去年の春、何とか大も雇われることになったのだ。

…屋敷の警護に始まり、今はやっと御主人様専属の護衛の一人にな

ったと思ってたのに…何かへましたんだわ、きつと…

「してねーよ。それに俺だって優秀なんだぞ？…レナ姉とは、比べもんにならねーけど…」

「じゃあ何で、御主人様の護衛を解かれるのよ？…きっと大じゃ頼りないから、違う人でも護衛にするんだわ。」

「そんなバカな。だってこの前の評定会じゃ、俺とレナ姉がトップだったのに…」

「…確かにそうだけど、理由が他にないんだもの。」

「いや、何か御主人様の話だと…『守ってもらいたい人間が増えた』ってことらしくて…」

……………先にそれを言いなさいよ…やっと、意味がわかったわ…

物心つく前から、園長に遊び感覚で叩き込まれた格闘技。

年に二度の腕試しである評定会でも、私と大だけがダントツだった。

その結果とも言える大の実力で、護衛をクビになるはずがない。

つまり御主人様にとって沙織以外に守るべき人間が現れたから、わざわざその人間の護衛役に大を指名した…ってわけだ。

……………そうよねえ…彼はもう御主人様の【息子】なのよねえ…ハア…

一応、大にも知る権利があるので教えておく。

「…これから、沙織達のところに行くんだけど…」

「さ、沙織って御嬢様のことか！？ 呼び捨てはマズイだろ！」

「いいのよ、私は。で、アンタには沙織の婚約者を護衛してもらうことになるからね。」

「こ、婚約者！？！？…嘘だろオイ、御嬢様って確かレナ姉の同級生じゃ…」

「デリケートなことだけに、慎重に慎重を重ねるようにしなさい。特に、沙織はわがままで大変なの。わかった？」

「…了解…でもスゲーな、レナ姉。何でも知ってて…」

「無駄口をたたく前に、さっさと荷物まとめて。先に行くわよ？」

ビツと敬礼した大は、走って部屋を出ていった。

一人になった部屋の中で、私は明日からの日々に不安を感じている。何故ならこれからはあの二人と、さらに大の面倒まで見ないといけないのだ。

…まあ、どうにかなるわね…沙織だって急に他人が来たら、仲野くんとこのラブラブも減ると思うし…私の自由時間も増えるんだもの…ポジティブ、ポジティブ…

無理やり自分を納得させ、前向きに行こうと心に誓う。



…それが、春の訪れだと気付くのは…まだまだ先の話だった。

## 第二十九話・番外編1…完璧な女の場合（後書き）

はい、作者です。

やはり一話じゃ

語れませんでしたね、玲奈は。未だに恋を知らない玲奈の今後の展開に、作者は頭を抱えています。

さ

て、大輔の登場ですが…本当はもっと早くに出す予定だったんです。沙織が暴漢に襲われる話を、作者が甘いだけの話にしたせいで出番が無くなったのです…

ボディー

ガードの設定を全殺しにしていますが、作者は満足なので許してほしいです。

当然、次回も玲奈編

なので…楽しみにしてもらえたら嬉しいです。

感想と評価も

ガンガン受け付け中！…では、また次回…

第三十話・…番外編2…完璧な女の例外（前書き）

…今回も玲奈視点です。では、どうぞ…

### 第三十話・…番外編2…完璧な女の例外

「…レナ姉、よく平気でいられるよな…」

「慣れよ、慣れ。一年もこの二人の隣にいれば、アンタだって呼吸レベルで普通になるわよ。」

「そうよ、大輔くん。猛と私はこれが普通なんだから、気にしないでリラックスしてね。」

「……………沙織、僕たちが少し気にしようよ…」

大の挨拶が済んで、今は皆でソファーに座りながらまったりしている。

私は何ともないが、普通の人間である大にとって…周りを気にせず  
に男の膝に乗る女は、なかなかめずらしいようだ。

仲野くんは嫌々みたいだけど、どうやらあのアホが絶対に膝から離  
れないらしい。

…自分が恐ろしい…この光景に慣れてる自分が…

バカっぽい沙織の笑顔を見ながら、私はまた深いため息をついた。

「ムカツ！ 何よ、そのうざそうなため息は！…私たちのラブラブ  
ぶりが見たくないなら、出てけばいいでしょ！？」

「…出て行きたいわよ？…でも私がいなくなった後、アンタが仲野くんを言いくるめていやらしいことする状況が目に見えかぶのよねえ…」

「わ、私はそんなこと、絶対にしないわよ！！！！…ね、猛？」

「…僕に同意を求めないでよ…松永さんの意見、否定できないんだから…」

「な、何ですって！！？…『世界を敵に回しても、僕は沙織の味方だよ』って言ったのは、ドコの誰！！！？」

「あゝあゝそんなこと、言っちゃったんだ…沙織の味方になったら本当に敵が増えるのに…」

仲野くんの膝の上で器用に体を向き直した沙織が、『嘘をついたのはこの口か！？』…と仲野くんの頬を、限界まで左右に引っ張り始める。

されるがままの仲野くんはかわいそうだけど、私が何か言っても解決するわけじゃない。

《仲が良い》二人を無視して、未だにカルチャーショックが抜けない大に今後の注意をした。

「…基本的に仲野くんの専属として、バイト先と学校の外は目を離さないように。」

「え？…あ、了解。」

「休日は今みたいな感じでいいし、用事があればその都度報告って

感じでOK？」

「オツケーだけど…このお二人は、毎日こんな風にいちやついてるのか？」

飼い主にじゃれる仔犬のような沙織を見つめて、大は不思議そうに話している。

戸惑い気味の大的せいで、私は哀しいからこそその笑いを浮かべた。

…毎日？…この二人が、30分以上離れてるのを見たことないのに？…

男の膝の上で喚いてる女と、自分の上に座る女にイジメられてる男を横目にしながら…私は新しい隣人に警告する。

「…この仕事、ナメんじゃないわよ？…御主人様の護衛よりも、精神的にキツイんだから…」

結局、仲野くんの甘いキスで機嫌を直したバカは…さつきより体を密着させベタベタしていた。

気にしたらこっちの負けなので無視していると、沙織の飼い主が私と大を確認しながら沙織に話し始める。

その言葉は、仲野くんにとっては当たり前でも…やはり優しさが感じられる一言だった。

「…梶川くんの歓迎会も込めて、何か料理作ってあげようよ。」

「そうね…うん、私も賛成！大輔くんは好きな物ある？」

「だ、駄目です！…自分は仲野さんに仕える立場ですから、お二人に飯を作ってもらおうなんて…」

「あら、意外ね。大がそんなに真面目だとは思わなかったわ。」

「…レナ姉がいるのに、中途半端じゃ駄目だからな。きっちりケジメつけないと…」

…カ、カツコつけちゃって…大のくせに…

仲野くんと沙織に、『申し訳ないです』…と断る姿は、少しだけ褒めたくなってしまう。

私の頑張ってきた背中を見てるから、大も真面目になったのかも…  
と思うと、先輩としては鼻高々だ。

だが、私は決してそれを口にはしたくない。

大の発言で、私の唯一の弱点が露見しそうだからだ。

…私にも欠点があるってとこ、大にバレたくないし…どうしょ？…

とりあえず話を変えようと試みるが、こんな時に限って沙織は余計なことをペラペラ喋る。

…ああ…私の威厳があ…

「…気にしないで、大輔くん。なにせ沙織は毎日、私の料理を食べ  
てるのよ？」

「ええ！？…う、嘘だろレナ姉？…だってレナ姉、仕事は絶対にキ  
ツチリこなしてたじゃないか！」

「い、今でもこなしてるわよ？…だ、だからご飯ぐらい沙織に作ら  
せても…」

「何を言ってるんだよ！俺達の立場を忘れたのか！？…寧ろ、お二  
人に作ってあげなきゃいけないほどなんだぞ！」

当然のように怒りだす大に、ムカついてるが上手く言い返せなかつた。



今までも何回か大と言い争う場面はあった…でも今日は初めて負けるかもしれない。

…だって自分でも知ってるもの…世話するはずの沙織に、料理を作ってもらうのが…タブーなことくらい…

出来るなら私も、沙織に作らせたくなかった。

でも、でも…どうしようもない理由が、そこにはあって…

「何だよ、その理由は？ 『めんどくさいから』…とか言った瞬間、俺はレナ姉を軽蔑するからな！」

「…そ、それは…あのね、その………」

「口ごもってんじゃねーよ！ ハッキリと話せ！」

「………」

「…玲奈、言っちゃえばいいじゃん。カップ麺も作れないほど、料理下手だって。」

「わゝ！ バカ、勝手に人の弱みを喋らないでゝ！」

沙織により、今まで隠して来た私の欠点がついに大に知られてしまった。

…もうヤダ…せっかく、【完璧な女】を演じてたのに…

仲野くんも知らなかったのか、大と二人して目を見開いている。

恥ずかしくなった私は、男二人の視線を感じないよう頭を抱えて丸くなった。

「レナ姉、本当なのか？」

「……何も聞かないで……」

「へへ…松永さんにも、苦手なことがあったんだね。」

「…やめてよ、仲野くん…もうその話には、触れないでちょうだい…」

「初めは私も笑ったんだけどね…玲奈の料理見ると、同情しちゃうのよ。だからつい、私がずっとご飯を作ってあげちゃって…」

残念な物を見るような、そんな沙織の視線が痛い…自分はダンゴムシだと思い込みながら、さらに小さく丸くなる。

三人が何かを話していたが、私にはこれ以上話を聞く勇気がなかった。

…沙織のボーディーガードとして2年…料理好きの沙織には最初で話したけれど、沙織以外は誰も知らないと思う。

屋敷にはちゃんと料理人がいたし、料理が上手な仲野くんは疑問も持たずに私の分までご飯を作ってくれた。

さすがにお弁当は周りに何か言われそうなので、『玲奈のも作る』  
と言う沙織には悪いけど、無理して断っている。

…インスタントラーメンも作れない女…大にだけは知られたくなかった…

私を慕い、仕事的时候は尊敬までしてくれる大には…私の弱みを見せたくなかったのに…

…きつと軽蔑したわね…あんな偉そうに話してて、即席ラーメンの一つも作れないんだから…

何か言われるのがとても怖くて、私はさっきから大の呼ぶ声を無視し続けていた。

「おい、レナ姉…」

「……………」

「聞こえてんだろ？…勝手に話すぞ？…」

「……………」

「その…ご、ごめんな…」

「……………はへ？…なんで、アンタが私に謝るのよ？」

「今、お嬢様に叱られた…『欠点を責めちゃダメ！ 人間なんだから、玲奈にも苦手なことぐらいあるわよ！』…ってさ。」

「…沙織が？…本当なの？」

「ああ。だから、怒鳴ったりして……………ごめん。」

顔を上げて確認すると、そこには私に謝る大しかない。

仲野ちゃんと沙織は、二人でキッチンに立っている…どうやら大の歓迎会は、結局あの二人の手料理で行われるようだ。

沙織に笑われたり、大にはさらに怒られると思ってた私にすれば…ホッとしたような、拍子抜けしたような…微妙な感じである。

とりあえず大に謝られる必要は無いから、急いで頭を上げさせた。

…全く、怒ったり謝ったり…何が言いたいなの？…

「…俺、勘違いしてた。レナ姉は完璧で、誰にも迷惑をかけないと思ってたから…」

「そんな人間、この世にいないわよ。普通に考えればわかるでしょ？」

「…だよなあ…ま、レナ姉は料理以外が完璧すぎるから、料理できないぐらいのほうが可愛い気があっていいと思うぞ。」

…アンタに言われても、ちっとも嬉しくないわよ…

腕を組みながら、何かを悟ったように私のことを見つめている大は…なぜか上から目線である。

いつもなら後頭部に一発入れる私だが、大の発言はそんなに悪い気がしなかったので聞き流した。

…『料理できないほうが可愛い気がある』…か…どうして私、こんな言葉が嬉しいんだろ…

完璧じゃない自分が認められたからなのか、それとも可愛いと言われたからなのか…正直、よくわからない。

隣に座る大を見つめて、私はまたまた深いため息をついていた。

「また、ため息かよレナ姉。こっちだってため息つきたいのに…」

「はあ？…アンタ、何が不満なのよ？」

「俺、実はこれから毎日レナ姉の手料理が食べれると思って…楽しみにしてたんだぞ？」

「…え、本当？…そんなに、私の料理が…」

「だってほら、俺も料理出来ないじゃん？　なら、レナ姉に任せとけばいいかな〜とか思ったり？…ハハハ…」

「……………死ね！！！」

大の脇腹に、フルスイングで右拳を叩き込む。

…一瞬…ほんの一瞬でも、この男に気を許した私がバカだったわ…  
私の手料理が楽しみだと言ったくせに、どうでもいいみたいな笑いをこの男は浮かべたのだ。

荒れ狂う殺意が治まらない…脇腹を押さえてうずくまった大を、私は立ち上がって容赦なく踏み付ける。

…響き渡る大の悲鳴が、今の私にはとても心地が良かった。



### 第三十話・…番外編2…完璧な女の例外（後書き）

はい、作者です。

大変です、玲奈

の恋が上手く書けません。毎日あーだこーだしながら、次の展開を探ってます…

個人的には次回で玲奈編は終わると思ってますが、あと一話で大輔との関係をどこまで持っていくのか具体的に決まっています。一気にくつつけるか、その手前で止めるのかで悩んでいる最中です。ダメな作者ですね…

一応、ちゃんとした形で

玲奈編を終わらせますので…次回を楽しみにしてもらえたら幸いです。感想・意見がある方など、参考にしますので出来たらよろしく願います。では、また次回…



**第三十一話・番外編3…完璧な女の恋情（前書き）**

…久しぶりの更新です。玲奈視点、完遂編…では、どうぞ…

### 第三十一話・番外編3…完璧な女の恋情

「…以上です、美鈴様。」

「そう、ご苦労様。今月も猛ちゃんと沙織さん、仲が良さそうね。」

「はい、それはもう迷惑なほどにラブラブです。」

「周りに嫌悪感を与えるカップルね…やっぱりもう一度、遊びに行こうかしら？」

コーヒーカップを置きながら、美鈴はクスクスと笑い始める。

…私の苦労も知らないのに…他人事だと思って…

私は作り笑いを浮かべて、目の前の美鈴から視線を外し気味にコーヒーを飲んだ。

美鈴がマンションに来たあの日、実は私と美鈴でひそかに約束を交わしていた。

《月に一度、仲野くんに関する報告を必ず行う》…という何とも面倒臭い約束である。

美鈴にしたら、仲野くんが心配だからなのだろうけど…私にとってはただの迷惑だ。

…だってわざわざ平日の午前中に学校を休んでまで、こうして美鈴と会わなきゃいけないなんて…あゝサイアク…

それに相手は藤ノ宮コンツェルンの幹部クラス…迂闊な一言が何を招くかわかったもんじゃない。

もし美鈴の機嫌を損ねるようなことが万が一にもあれば…きっと私達だけの問題じゃ済まないはずだ。

…と、言ったところで…仲野くんと同じ血が流れてる人が、簡単にキレることも無いけどね…

今日の報告も無事済んだことだし、あとはそれとなく解散する雰囲気を持っていくだけ。

私はコーヒーを飲み干して、美鈴に軽く話しかけてみた。

「美鈴様、私はそろそろお嬢様をお迎えに…」

「あ、待って！ 実は、また持ってきてるのよ。だから…」

「…美鈴様、そういうのは本当に困るのですが…」

「いいから、いいから！ ほら、この【物件】はお母さんのオススメよ？」

美鈴がテーブルに並べたモノは、もちろん住宅の情報誌ではなく…藤ノ宮コンツェルンで働いている、結構若い男性の写真だった。

そう…俗にいう、【お見合い写真】である。

…これよ…これだから、美鈴はうざいのよ…一体、何回断れば気が済むのかしら？…

困った私は苦笑いを浮かべ、出来るだけやんわりと断り続けた。

それでも美鈴は、『絶対気に入るから！』と何度も強引に見せてくる。

写真の男性は確かに顔も整ってるし、有名な大学を出てるようだったけど…やはり興味が持てなかった。

……私って、そんなに男を欲してる風に見えるの？…意外にシヨツクなんですけど…

「…うん…今月もダメだったわね。」

「あの、美鈴様？ 私はこのような形で、男性を選ぶつもりは毛頭ありません。」

「そうなの？ でも今、フリーなんでしょ？」

「…はい。ですが私は、色恋自体があまり…」

「あ、狙ってる男がいるとか？」

人の話を聞きもせずに、美鈴は勝手に私のプライベートを詮索し始める。

イライラを通り越して、すでにどうでもよくなってきた私は…否定するのも疲れてきた。

…もうイヤ…なるようになればいいわ…

「…うつわ、スゲー荒れてんなあ…」

「ああ？ 誰が荒れてるつつーのよ！？」

「レナ姉だよ、レナ姉。ほらほら、もういい加減にしとけて…」  
「うるさ〜い！ さっさとあと一つ、持ってたきなさいよ！…！」

結局あの子の話は上手くうやむやにして、自分の部屋へと戻ってきた。

本来ならば沙織を迎えに学校に戻るのだが、今のまま沙織と仲野くんのバカッフルぶりを見せ付けられたら堪ったもんじゃない。

…どうして私が、こんなにストレスを抱えなきゃなんないわけ？…  
実に不愉快だわ…

これ以上はおかしくなると判断した私は、今日は完全に仕事放棄する決定を下した。

だからこうして、学校に行っていない大を使いつぱにしながらストレス発散してるのである。

…まあ沙織のことは、大に任せりゃいいし…基本大丈夫でしょ…

「…大丈夫じゃねーよ。それ、幾つ目なんだ？」

「これ？ まだ三袋よ？」

「多いだろ…ビックサイズのポテチ、三袋は…」

「大には関係ないでしょ！？…好きなんだから、しょうがないじゃない！」

誰だって好きな物の一つぐらいあるはずだ。

それが私の場合、ポテチのコンソメ味なのである。《塩味なんて邪道》

…このパリッとした食感に、深い味わい…まさに現代人の最高傑作…ん…美味し！…

ポテチを2、3枚ずつ口に頬張れば、私を悩ますくだらない日常もどこか遠くに……

「あ、無くなっちゃった。もう一つ取って来なさい。」

「まだ食うのかよ！？やめとけて、な？」

「ほほう…私に逆らうわけね。死にたいの？」

「お、俺はレナ姉のためを思って…それにレナ姉、最近ポテチの食べ過ぎで顔が若干ふつくら…」

「はい、死刑確定。そこに座りなさい！！！」

後ずさる大の首を捕まえて、強引に床に正座させた。

…私の顔がふつくら？…じゃ、アンタの顔もふつくらさせてあげる…

嫌がる顔を押さえ付けて、右に左に往復ビンタを繰り返していく。

八発ほど放ってから、涙目の大に向かって警告した。

「…いい？ 今度私の体にケチつけたら、車椅子で生活することになるわよ？」

「…はい…すみマセンでした…」

「それに私はね、ちゃんとカロリーコントロールぐらいしてるんだから。ほら、ウエストは細いでしょ？」

「……………オシリ…お嬢様よりデカイ…」

私の良さを伝えるためにパリコレモデル並のポージングを目の前で決めてあげたのに、またも大の口からは私を卑下にする言葉しか出てこない。

「…うん…もう少し教育が必要ね…」

腹に蹴りを入れて、悶絶する大を見下ろした。

「…角度がイマイチだわ…あと二発…」

「ゲホッ、ゲホッ…追い撃ちかよ…」

「まったく、何年経っても変わらないのね。子供の時から悪態ばっか…」

「あ、悪態じゃねえ！…本当にレナ姉のために言っただよ、俺は



！」

「…別にアンタには、私が太ろうが痩せようが関係無いじゃない。」  
「関係ある！ レナ姉は、美しいまんまでなきゃダメだ！！！」

……………へ？…

真剣な目で私を見つめる大に、一瞬だけ言葉が詰まってしまつ。

床に正座したままだから迫力は無いが、大の真剣さは充分に感じとれた。

それから互いに何も言わず少し沈黙した後、意を決したように大が立ち上がり口を開く。

…あ、ダメ…この展開、一番嫌なパターンだわ…

「実は俺、昔からレナ姉のことが…」

「…好きとか言ったら、死ぬわよ？」

「ええ！？ そ、そんなこと言ってたてさ…」

「美鈴にも言つたけど、今は色恋に興味ないの。沙織たちのことだけでも悩んでいるっつーのに、自分の恋愛にまで脳ミソを使わせるわけ！？」

「う、うう…軽はずみなことして、すいませんでした…」

だんだん語尾を強くしながら威圧的に拒否すると、大は再び床に座り込み深々と土下座して謝ってきた。

はつきりいつて前々から、大の気持ちには気づいていた…ずっと二人一緒に育って来たんだから、マヌケな大がこの私に隠し通せるはずもない。

だけど決して馬鹿にしていない…何故なら私の心が、そんな大の気持ちを楽しめるからだ。

…身長が高くて、体つきもイイ感じ…ちょっと顔は濃いけど、整ってるのよねえ…私に忠実だし…

ダメな部分も確かにあったけど二人で過ごす日々には、それらを全て超越させるほどに大の魅力を私に植え付けている。

容姿は悪くないし、私の気持ちも汲み取れる大になら…本音の所、女の私を許してもよかった。

実際私の心に余裕さえあれば何の問題も無いのだが、忙しすぎてその余裕というものが砂一粒ほども無い。

沙織と仲野くんの問題が落ち着くまでは自分自身にも構ってられないので、大には悪いけどわざと強めに否定したのだ。

それにしても、大なりに決意して挑んだのか…その後の落ち込みかたは、笑えるほどに酷い有様である。

…仕方がないわね…悪い気はしないから、少しだけフォローしてあげる…

私も床に座って、遠くを見つめながら放心状態に陥ってる大に優しく話しかけた。

「私のこと、本当に好きなの？」

「…ああ、好きだ…俺の中でのレナ姉は、最強で、美麗で、完璧で…なのに料理が出来ないっていうカワイイところもある、絶対無二の存在なんだ…」

「そこまで想ってるなら、一年ぐらい我慢できるわね。」

「…1年？…1年経つと、何があるんだ？」

「一年後、私たちは高校を卒業するの。そしたら沙織と仲野くんは堂々と夫婦になる上に、私もメイリーグループの仕事に集中できる。つまり悩みは減って、自分の時間が増えるのよ。」

「それって…ま、まさか…」

「…来年ならアンタにも、【可能性アリ】…ってこと。わかった？」

私の言葉を聞いた瞬間、あんなに小さくなってた男が急に跳びはねて立ち上がる。

そして先程まで虚ろな顔で見つめていた窓の外に向かい、『奇跡だー！』等と言いながら、両手を高々と上げた。

…可能性があるってだけなのに、こんなにはしゃいちゃって…あまり期待させない方がいいかしら？…

少し釘を刺そうとガッツポーズする馬鹿を呼ぶと、意外にも冷静な

反応にこっちが驚きそうになる。

「…それじゃ、お嬢様と仲野さんを迎えに行ってきます。」

「えっ！？ もうそんな時間なの！？」

「早めに待つとかなきゃ失礼だろ？…レナ姉は、のんびりしていいからさ。」

「何か、逆に悪いわね。」

「いいって。俺、レナ姉にふさわしい男になれるよう…頑張るから。」

ほんの一瞬、ドキツとした胸を押さえて…真顔の大を強めに叩いた。

…卑怯だわ…ポイント、減点2ね…

大を玄関で見送り、一人になった部屋で散らかるポテチを片付け始める。

袋の後ろを見てカロリーを算出し、私はまた深いため息をついていた。

…ハァ…三ヶ月ぐらいポテチは禁止しよつと…でもこのおしり、本当に小さくなるのかしら？…

洗面所の鏡でスタイルを確認する自分に違和感を覚え、私は哀しみて笑ってしまった。

季節は春…今植えられた桜の若木に来年、満開の花が咲き乱れるのかは……………二人次第ということでは…

くおまけく

「…大、どうして沙織にばらしたの？」

「いや、あの、まあその……………こ、殺さないで……………!!」

猛に隠れた大輔を、包丁を持って追い詰める玲奈を見て…沙織はただただ爆笑していたとさ。



### 第三十一話・番外編3…完璧な女の恋情（後書き）

はい、作者です。

久しぶり過ぎて、

何か上手くないことだらけでした。

作者が更新せず、読者の方にはいろいろご迷惑をおかけしました…中途半端な作者で誠に申し訳ありません。

ですが、更新してない時も読んで下さっている方がいたのは…本当に嬉しい限りです。感謝感激雨霰…っ感じます。

次回で終わるか、一話クツ

シヨンを置くかは…まだ未定です。更新遅くなるかも知れませんが…テキトーでごめんなさい…

遅れてもちゃんと終わらせますので、期待しないでお待ちください。では、また次回…

**第三十二話・卒業まで待てない！？（前書き）**

…スイマセン、お久しぶりです…では、どうぞ…



### 第三十二話・卒業まで待てない!?

愛用のソファで沙織と二人、仲良くテレビを見ている普通の昼下がり…これまた普通に松永さんが突然やって来た。

「…仲野くん、ちょっと来て。」

「あ、はい。どうしたんですか松永さん？」

「とにかくこっち…あ、沙織はそこにいなさい。」

「えゝ!?!…猛と一緒にいるゝ!?!」

「まあまあ、すぐに戻るから…沙織は座っててよ、ね?」

僕だけが呼ばれるなんてめずらしいけど、藤ノ宮のことで話があるんだと思っていた。

僕の腕をガチツとロックして逃がさんとする沙織を宥め、空いてる寝室に松永さんと二人で入る。

…さて、今度は何の問題が起きたんだろ…藤ノ宮コンサルンに振り回されるのも、だんだん慣れてきたよ…

どうせ美鈴さんの安易な考えによる問題だと思い、半ばいい加減な気持ちのまま松永さんの話に耳を傾けた。

「…そんな簡単な問題だったら、わざわざ二人で話さないわよ。」

「…え？…どういうことですか？」

「いい、仲野くん…実は昨日、藤ノ宮コンツェルン会長から御主人様宛に個人的手紙が届いたの。」

「…おばさんから、沙織のお父さんに手紙？」

「ええ。内容は…簡単に言うと《仲野くんと沙織の婚約、おめでとう》…って感じ。」

…へ？…別に問題はなさそうな内容だよね…

誹謗中傷の手紙が届いたならいざ知らず、僕たちを祝福してるおばさんの気持ちはかなり嬉しい。

ところが松永さんの表情は、それどころじゃない憤りを見せていた。

「…でもね、この続きが問題なのよ。」

「続き？…やっぱり酷いことが書かれてたんですか！？」

「それが違うの。その逆で、《二人の結婚式を、藤ノ宮家が総て取り仕切りたい》…って書かれてたんだって。」

「…マ、マジですか！？ それって完全に僕たちの結婚を、認めてくれた証拠じゃないですか！…やったー！ おばさん、ありがとー！…！」

僕たちを祝福してくれるだけでなく、結婚式まで考えてくれるおばさんに僕は心の底から感激している。

…藤ノ宮家ってことは、美鈴さんも沙織を認めたんだ…これで何の障害も無くなったぞ…

本当は若干、美鈴さんに反対されながら沙織との婚約を決めたことに不安を感じていたけど…もう不安になることもない。

すぐに沙織に報告しようと思っ手は掛けたのだが、そこで一つの疑問が浮かんだ。

「松永さん…おばさんが結婚式を挙げてくれると、何が問題なんですか？」

「…ハァ、これだから一般人は…もしも、藤ノ宮家がアナタたちの結婚式を挙げるとなると…周りの人間はどう思っかしら？」

「……………さ、さあ？」

「…周りはアナタたちのことを【藤ノ宮の人間】だと、公然的に認知するのよ。そんなのマズイでしょ？」

「あの、よくわからないんですけど…僕と沙織が藤ノ宮の人間だと思われたら、そんなにマズイですかね？」

「当たり前でしょ！？ 仮にも沙織は、メイリーグループ会長の一娘よ！？…仲野くんは沙織と結婚したら御主人様の跡継ぎになるのに、藤ノ宮コンツェルンの側に籍を置いてとなると大問題じゃない！！！」

怒鳴り声に近い松永さんの説明のお陰で、僕にもようやく事の重大さが理解できた。

…これが僕たちだけじゃなく、メイリーグループと藤ノ宮コンツェルンの威信に関わる問題だったとは…のほほんとしてる場合じゃないな…

美鈴さんが僕を藤ノ宮に迎えようとした時、沙織と付き合っていることが問題になると言っていたのを思いだす。

あの時おばさんが僕たちに『別れなくてもいい』って言うてくれたのは、何も僕を諦めたわけではなかったようだ。

問題になると知りつつ、沙織も一緒に藤ノ宮家の一員にしようとするとは…何処か抜けてるように見えて、さすがは大企業のトップに座る人である。

…これは大変だな…沙織は一人娘だから藤ノ宮に嫁がないわけだし、自然と僕がメイリーグループの跡継ぎになるしか…ない？……………

「…ちょ、チヨチヨチヨチヨチヨ、ちよつと、ちよつと待って下さいね……………【跡継ぎ】ってなんですか？……………」

「…まさか、今まで知らなかったの！？」

「し、知らないも何も…だって僕、普通の高校生ですよ！？…無理に決まってるじゃないですか！」

「そのために、わざわざ私が跡継ぎに相応しいかどうか見守って来たんでしょ！…御主人様の合格も貰えたんだし、メイリーグループの次期会長はもう仲野くんしかないのよ！？」

肩をガクガク揺さぶられながら、『どうして何も考えてなかったの！？』と松永さんに凄く怒られてしまう。

…ど、どうしよう…沙織との結婚、かなり簡単に考えてたよ…まさか僕が、あのメイリーグループを継ぐなんて…

今まで僕は、沙織さえ幸せに出来ればそれでいいと思っていた。

それだけでも、僕なりに凄く決意のつもりだった…一人の女性を一生幸せにすること、それはそれでかなりの覚悟が必要だったからである。

やっと覚悟を決め、沙織を守りながら人生を歩いていこうとしたところ…急に超巨大グループ会社が沙織の真後ろにそびえ立った。

…確かメイリーグループって…コンビニやファミレス、居酒屋…そういうば最近ガソリンスタンドも始めたらしいし、あの金融会社も含めると…無理、絶対ムリだ…

こんな僕が、何千何万の人の上に立つ資格なんてあるわけがない。

考えれば考えるほど責任の重さに恐くなり、汗がとめどなく溢れだした。

「松永さん、やっぱ無理です。どう考えたとしても、僕じゃ荷が重

いに決まっていますから…」

「そんなこと無いわよ。この私、自らが選別したんだもの…間違いなく、仲野くんは会長になれる素質がある！」

「そんなこと言ったって、僕のどこにその素質があるんですか？」

平凡を絵に書いたような男なんですよ？」

「…確かに誰でも簡単に出来るほど甘くないし、プレッシャーや辛い決断を迫られたりで仲野くんが苦しむかも知れない。でも…いや、だからこそ仲野くんじゃなきゃダメなの。簡単にOKを出すようなバカは要らない…真剣に悩んで、どうすることが一番なのかを考えられる仲野くんを私たちは認めてる。沙織と一緒に住むって決めた時も、沙織とセックスする時も、沙織と婚約を交わす時も…仲野くんは真剣に考えて、物凄く悩んだ。しかも自分じゃなくて、全て沙織のために答えを出してきた。そんな仲野くんを、御主人様も私も…何より沙織が求めているの。」

………ずるいなあ…沙織の名前出されて求めているなんて言われたら…無下には断れないよ…

松永さんのお陰で、肩の重圧が軽くなっている。

責任の重さが無くなったわけではないけど、僕という人間を認めて必要としてくれるのがとても嬉しかった。

………だからこそ…返事は難しいよ…

「お願い、仲野くん！ 仲野くんの口から直接、『メイリーグルー

プの跡を継ぐ』と藤ノ宮さんに一言、言ってほしいの！」

「……………」

「全力でサポートもする！ だから、御主人様の期待を裏切らないで！」

「……………」

「…仲野くん…」

「……………僕に少しだけ…時間を下さい……」

僕が即答しなかった理由…それはおばさんと美鈴さんである。

当然と言えば当然なのだけれど、わかっていても簡単に割り切れるわけがなかった。

それは単純に藤ノ宮家が大事だとか、藤ノ宮コンツエルンがメイリ―グループに負けないぐらいの大企業だから、などではなくて…

……………せっかく出会えた【家族】と別れたくない…だけなんだよね…

最初こそ戸惑ったものの、なんだかんだ僕のことを気にしてくれていたおばさん達。

『沙織と別れてほしい』と言った時も、美鈴さんが僕のために行動してくれたわけで…まあ、今となっては笑い話だ。

そして、それからは僕と沙織をセットで気にしてくれるようになってたわけだし…もう僕は、そんな二人を家族なんだと心で感じている。

もちろん沙織は最愛の人で、僕の奥さんになってくれる人だから…沙織も沙織のお父さんも大事な家族だ。

松永さんにもお世話になってることだし、沙織との結婚を許してくれたお父さんを精一杯手伝いたい気持ちは凄くある。

ただ困ったことに、双方が大企業ということで…僕がメイリーグループを継ぐと、藤ノ宮コンツェルンには個人的といえどあまり関われない。

それはつまり、家族との別れを意味している。

おばさん達も僕を必要としてくれるのに、こんな別れ方はどうしても納得出来なかった。

納得は出来ない、けれど受け入れなきゃいけない…僕の心は今、かなり揺れている…



……というわけで僕は、決断を迫られてるんですよねえ…

悩んでた僕を残して、松永さんは忙しそうにまた仕事に出かけてしまう。

もちろん、あの松永さんが何もせずに帰るわけがなかった。

答えが出せない僕にムリヤリ答えを出させる方法を、僕以上に理解してるらしい。

…一人でじっくり考えたいのに、どうしてこうも邪魔するんだろ…

「まったく、悩んでる猛の邪魔するなんて最低よ！ そんなことする奴がいるなら、私が黙っちゃいないんだからね！！！」

「………沙織に言ってるんだよ、僕は…」

「え、私？ 私がいつ、猛の邪魔したの？」

「今現在、リアルタイムで邪魔してるんだって…とりあえず、僕の

体から離れてくれる？」

「やだ。だって今日は、玲奈のお墨付きだもの！…仲野くんを誘惑しながら、跡継ぎにスカウトしなさい！」…すかうこの意味はわからないけど、猛を誘惑するのに意味なんていらないもんね！《何をしてても良い》…って条件なんだし、今夜からはまともに寝れると思わないこと。OK？」

…見事に利害が一致したわけだ…これは、かなりマズイぞ…リミッターが外れた沙織に、僕が勝てるわけ無いよ…

ソファアに戻って真面目に考えようとしたのに、最強の戦士が僕の上に乗っかり宣戦布告をしている。

いつもの僕なら、沙織が暴走を始めたときの最終防衛ラインとして『松永さんが怒るから』の一言で秩序を守ってきた。

しかし、その松永さんが沙織の味方になった今…拒む理由がない。

嬉しそうな沙織の笑顔に否定もできなくて、僕はまた振り回される結果となってしまった。

ベットの上から逃げ出すことも、松永さんの助けも期待できない。

諦めムードが漂う僕とは打って変わり、この状況だからこそ最も輝いてる女の子が目をキラキラさせておねだりし始めた。

「タ〜ケ〜ル〜、私ね…キスしてほしいなあ…」

「いや、だから…今から藤ノ宮とメイリーグループのことを、少し時間を使って考えよう…」

「キ・ス！ 猛の口で、私の口を早く塞ぎなさい。これは命令よ？」

「……………命令ってそんな…僕にだって、断る権利ぐらい…」

「問答無用、うりゃ〜！」

体の上に乗っかる沙織の口撃を僕が避けれるはずもなく、迫り来る柔らかな唇は真っすぐに僕の口を狙っている。

首を左右に振って抵抗を試みるも、何回かの軽いキスのあとで背中手に手を回されてしまい…沙織の舌が強引に口の中へ割り込んできた。

…も、もう！…いつも強引なんだから！……………そんな沙織を好きな自分が、本当は1番許せないんだけどさ…

もはや白旗を振った僕としては、抵抗する意味が無くなったので…沙織に身を任せることにする。

一分、二分と時間が過ぎていく中…僕も気持ちが始めたとき、なぜか沙織が急に顔を離れた。

ニツといやらしく笑って僕を見つめるその顔は、何か良からぬイタズラを思いついた悪ガキのように見えてくる。

…どうしよう…嫌な予感しか浮かばないよ…

そんな僕を普通にスルーして、沙織はまたも勝手に話し始めた。

「ワタシ、閃いちゃった！！！」

「…聞くのが怖いけど、聞かないと後々も…と怖い気がするので一応聞きます。沙織、何を閃いたの？」

「あのね、猛が悩んでる理由って…パパとおば様、両方に跡継ぎにならないかって誘われてるからでしょ？」

「…うん。まあ、そんな感じ。」

「それはつまり、どっちの会社も猛が跡を継げば万事オーケーなのよね？」

「でもね、沙織…そんな簡単に言うけど、一つの会社だけでもそこらへんの市町村を揺るがすほど大企業なんだよ？ その二つの会社を平々凡々な僕が同時に継ぐなんて、あまりにも無謀すぎるよ…」

「…確かに、猛が一人でパパとおば様の会社を受け継ぐのは、私も現実的じゃないと思う。だから私は、ここで発想を転換してみたの！」

沙織が力強い発言をしたかと思うと、今度は突然上着に手を掛ける。

意味が全くわからないので、もちろん僕は止めようとしたけれど…マウントポジションを取られているため結局負けてしまい、沙織の真っ赤なブラは僕の目の前で露出してしまった。

…赤は久しぶりだなあ……じゃないよ！…今の話と関係ないのに、何で沙織はすぐに服を脱ぐんだ！？…

何度も見ているとはいえ、沙織のくびれた細い体やストライクゾー

ンど真ん中の少し小さめな胸は恥ずかしくって…未だに直視する勇氣が無い。

目を閉じさらに顔を横に向けながら、僕の前だと露出魔になってしまっ女の子に猛然と抗議した。

「沙織、どうしてすぐに裸になるの！？　ちゃんと僕に説明をしてから…」

「…あのね、猛…二つの会社が猛を必要としてるのに、その猛がこの世に一人しかいないとなると…どうすればいいと思う？」

「だ、だからそれは…答えられないよ…」

「ぶ、残念。正解は…猛を、【もう一人】作ればいいの！」

「はあ？…作る？…僕を？」

「そう！　ここに、ね？」

自分のお腹を摩りながら、沙織はエへへと優しく微笑んでいる。

「…？…？…沙織のお腹に、もう一人の僕？…まさか！！…いや違う、そんなはずないよ…」

もし、僕の予想が当たっているんだったら…あの松永さんが許すはずないからだ。

浮かんだ【幸せな結末】を脳から消すため、僕は頭を激しく左右に振る。

だがしかし、すぐに沙織に顔を掴まれて…当然のようにキスをされながら、悪魔の囁きが聞こえて来た。

「まあとりあえず、10人もいれば賑やかになるわね。」

「…やっぱり…しかも、すでに二桁の計画だし…」

「だって、もし一人だけだったら…跡を継ぐのが嫌かも知れないじゃない？」

「それは…そうだね。僕も最初は戸惑ったぐらいだから、無理に押し付けるのは確かにかわいそうかな。」

「でしょ？ それなら、【数打ちや当たる】作戦も悪くないわよね？」

沙織も意外にしつかりと考えてることに、なぜか妙に納得してしまふ。

…成る程ね…体の負担を考えても、少しでも早い方が沙織のためかも…

学校やお父さんとの約束もあるし、あの松永さんには凄く、スゴク、すごく怒られるはずだ。

それでも、沙織の幸せを第一に考えたい僕としての答えは……………

「わかった。沙織の意見に乗っかるよ。」

「本当！？ やったー！！！」

「…でも、いいのかなあ…僕みたいなのが、父親になるなんて…」

「大丈夫！ そんなこと言い始めたら、私がママになる方が怖いわよ？」

「……………それもそっか。僕たちは、どうせ僕たちのまんまだしね。」

「そう、一緒に成長してればいいの！ だから…」

「元気な赤ちゃんを作ろうね、パ・パ！」

…アハハ…ママみたいな、わがままにならなきゃいいけどね…

第三十二話・卒業まで待てない！？（後書き）

はい、作者です。

実はまだ、最後

の結末に迷ってる真つ最中なんですが…感想をいただいたので、更新する気のなかった作品を載せてみました。

二人の間に子供が出来ると、猛と二人つきり  
でいたい沙織の気持ちなどが矛盾になるじゃないかと思ひ……ボツに  
した話なわけです。      ダメな

作者ですが、読んで下さる方がいることを励みに頑張りたいと思います。

また一ヶ月以上か

また一ヶ月以上か

かるかも知れませんが、忘れた頃にでも覗いてみてくださいね。  
では、また次回…



第……話・『はい、喜んで！……！』（前書き）

先に言います、タイトルは最後のセリフです。では、どうぞ……

第……話・『はい、喜んで！！！』

…卒業式も無事に終わり、私はクラスの皆と一緒に教室に集まっていた。

卒業証書なんかには目もくれず、皆のアルバムに別れの言葉や思い出などを書き込んでいると…なぜか妙な違和感を感じてしまう。

……あ、猛がない！…どこ？…トイレかな？…

さっきまで中谷くんたちと笑ってた猛の姿が見えないことに、私は居ても立ってもいられずそわそわし始めていた。

そしてとうとう猛エキスが切れた私が猛を探しに行こうとした時、後ろの座席から聞き慣れた声に突然呼び止められてしまう。

「ちょっと沙織、何処に行くのよ？」

「いや、あのね…そこら辺に猛を探しにね…」

「仲野くん？ 仲野くんなら、確か屋上に呼ばれてたはずだけど…」

「屋上？ なんでこんな時に？ それに『呼ばれた』ってどういう意味よ？」

「あ、そりゃもちろん…卒業式の日、屋上に呼び出されるといえば……もう大体わかるでしょ？」

…え？…卒業式の日、卒業生が屋上へ呼ばれるってことは…呼び出した相手が女の子なら、完全に愛の告白をする雰囲気じゃ………いやいや、猛に限ってそんな…

この学校で【私と猛】と言えば、教師も引くほどラブラブカップルで知れ渡ってるはずだ。

その猛にいまさら告白をするなんて、この学校の生徒なら…考えられないんだけど…

「…い、一応は確認していい？ 猛を呼び出した相手は男？………それとも敵？」

「さあ？ 小さなピンク色の紙に、『屋上で待ってます』って書かれてただけだから、男か女かはちよつとわからないわね。」

「それ、完璧ラブレターじゃん！！！！ 猛のバカ、私に相談もしないで…コロシテヤル！！！！！！」

「ちよ、ちよつと沙織、走っちゃダメだってば！ アンタの体は今…」

玲奈の声を無視しながら、私は全速力で屋上へ走り出していた。

…ハア、ハア…や、やっと着いた…

階段を一気に駆け上がり、最上階にあるドアの前までやってくるのに3分も掛からなかった。

乱れた息を落ち着かせた私は、2、3歩の助走をして目の前のドアを蹴っ飛ばす。

「コラー、泥棒ネコー！…出てこんかい！！！！！」

「うわっ！ さ、沙織？ どうしたの、そんなに怒って…」

「こら、猛！ 今すぐ、私の男を横取りしようとしてる悪女を出しなさい！ 隠しても無駄よ！！！」

「悪女？ 隠す？？？…ここには、僕しかいないんだけど…」

「…………へ？」

「いや、それはこっちのセリフだよ？」

…？？？…どっぴろっぴと…

…今頃、沙織はギャーギャー言ってるわね…簡単に騙されるんだから…

自分の机に肘を付きながら、玲奈は軽く微笑んでいる。

そう、猛が告白されるという情報は真っ赤な嘘で…実は玲奈自身が、猛に屋上に行くよう指示を出していたのだ。

何故こんなことをしたかといえば、半分はただの嫌がらせだったけれど…沙織を喜ばせるために、わざと二人っきりの空間を提供してあげたというわけである。

…卒業式の最中、ちゃんと静かにしてたし…この一週間、私の言い付けを守って【我慢】してたみたいだから…これはそのご褒美、かな？…

柄にもないことをしてる気がして、一人でクスツと笑ってしまう。

そして何を思ったのか、玲奈は急に携帯を取り出したかと思えば…自分の答えを出すため、ボタンを押し始めた。

…そういえば私も、めんどくさい問題を抱えてるんだっけ……ハ  
ア……

「…もしもし、大？…うん、無事に終わったわよ…でき、ちょっと  
こっち来れない？…ほら、一年前の…ね？………」

一方…状況がほとんど理解できなかった私と猛は、お互いの情報を  
交換しあっていた。

「…つまり、玲奈にまんまと騙されたってわけ？…あの女こそ悪女  
だね。」

「まあまあ、そこまで言わなくても…ほら、松永さんのお陰で二人  
つきりになれたんだから。」

「え、でも…私、猛となら周りに人がいてもラブラブになれる

し……」

「…二人つきりなら、僕が積極的になるかもよ？」

恥ずかしそうにそっぽを向きながら、猛は私の腰に手をまわしてくる。

…あら、めずらしい…猛から抱き着くなんて…

本当は学校の中でいちやくのが嫌いなはずなのに、玲奈に騙されて軽く機嫌の悪い私のために猛が無理してすることはバレバレだった。けどそんな猛の優しさが単純に嬉しくて、猛の顔を強引にこっちに向けると…小鳥がついばむように、小さなキスを何度も乱れ打つ。

「ちょ、やめ、て…さ、おり…」

「ん、ん、ん…んんッ！ よし、猛エネルギーも補給したし…もう一回キスしていい？」

「ええ！？ い、今キスしたばかりなのに！？」

「今のは、猛の優しさが嬉しくてついしちゃっただけ。だから今度は、猛エネルギーを愛の力に変換しなきゃ。」

「…なんとまあ、随分と直球な言いわけを…」

「ごちゃごちゃうるさい！ ほら、口を閉じて…私を見つめてよ、猛…」

まっすぐに見つめる私の目に負けたのか、すぐに猛は静かになった。そして二人を包む空気が変わったと肌で感じた瞬間、何も言わずに猛から私に唇を重ねてくる。

…これ、やっぱりこれよ…渴いた砂漠をオアシスにするような、私の心を潤してくれる猛の深い愛が込められた…このキスがなきゃ、何にも始まんないわよ…

肩をガシッと掴まれて、口の中を思うように掻き乱されながら…私は心の底から、何度も猛に愛していると叫び続けた。

「…あ、そういえば…」

「ん？ まだ何かあるの？」

「一応、卒業式が終わるまで猛には秘密って約束だったんだけど…」



もう終わったから、報告しても大丈夫よね。」

「…その含みのある言い方…少し怖いんだけど…」

あれから私たちは、まだ屋上の片隅に二人っきりで過ごしている。

『せつかく二人になれたんだから、わざわざ教室に帰ることもないよ』…と、あの恥ずかしがり屋の代表である猛が言ってくれたからだ。

まだまだ寒さが消えないこの時期に、椅子も風よけも無い屋上で立ちっぱなしというのはさすがにつらい。

だがしかし、自分のブレザーを私に羽織らせつつ肩をも抱きしめてくれる猛に対して…私は結局、猛の体に寄り添うことを選択していた。

そしてしばらく他愛ない会話と、愛のあるキスを繰り返していたところで…ある重要な事実を打ち明ける。

「……………まあ猛も、大体は気が付いてると思うんだけど…ちゃんとした報告をしなきゃね…」

意味ありげに咳ばらいを一つして、私は眉をしかめながらゆっくり話し始めた。

「あのね、一週間ぐらい前に玲奈が【例の物】を買ってきて…」

「…例の物？ 何それ？」

「妊娠検査薬。」

「……………に、妊娠検査薬って……………」

「うん、私…赤ちゃんが出来てみたい。」

「ほ、ホントに！？……………やった、やったじゃなか沙織！ 僕と沙織の愛が、ついに形になったんだ！！！」

急に私の手を掴んだかと思うと、猛はそのまま力強く私の体を抱きしめてくる。

…も、もう！…猛ったらはしゃいじゃって…父親なんだから、子供の前ではしっかりしなさいよ！……………って、私が言えるわけないわよね…

若干壊れつつあるテンションではあったけど、猛が我を忘れる程に喜んでいるんだと考えたら私もドンドン嬉しくなってきた。

気がつくとも私も一緒に壊れていたらしく、何故か学校の屋上で…二人だけの万歳三唱が鳴り響いている。

そして手を上げるのに疲れて見つめ合っていると、どちらからともなくアハハと笑いだした。

「ハハ…実は僕も、何か変だとは思ってたんだ。だってあの沙織が、一週間も誘惑してこなかったから…寂しくて寂しくて……………」

「だって玲奈がね、『ちゃんと病院に行くまではセックス禁止！』」

…とか言うんだよ！？ 私も寂しかったけど、一応これでも《ママ》になるんだから、我慢しなきゃって思ってた…」

「そっか…うん、偉いよ沙織。そうだね、もう僕たちは子供のことを第一に考えないといけないよね…」

「それはダメ！」

「ふぁお！？」

「確かに、お腹にいる赤ちゃんも大事だけど…私の一番はやっぱり猛なんだから、猛の一番だって私じゃないとヤダ！！！」

猛の胸に強めのパンチを一発喰らわして、頬を膨らませる。

…私のお腹が大きくなって、赤ちゃんを産んだ後スタイルが戻らなくても、何年かしてそこら辺のおばさんみたいになっても、そして後々はお婆ちゃんになったとしても…『世界で一番、愛してるよ』…って死ぬまで猛に言ってもらいたいの！！！！…

ゲホゲホツと咳込む猛を無視して、私は猛に背中を向けた。

それから《機嫌が悪い》オーラを全面に出して、何かを言ってる猛の声が聞こえないように両方の耳を急いで塞ぐ。

…ふん！…もう絶対許さないんだからね！……………まあ後ろから優しく抱きしめてくれたら…謝罪の言葉ぐらいは聞かかも…

変な期待が頭に浮かび、私はチラッと後ろの猛へ振り返った。

当然、猛は私のことを見ていたので…見事に目と目がぶつかってしまっ

慌てて体を向き直したが、私の浅はかな考えなんて猛には一瞬でバレたらしく……後ろから包み込まれるように、優しく抱きしめられた。

「…怒らないで聞いてくれる？」

「………バカ……」

「何よりも沙織が大切だと信じてたのに、『赤ちゃんが出来た』と知った今…沙織と同じくらい、沙織のお腹にいる子供も凄く大切だと思った。この気持ちは嘘じゃないし…嘘にしたくないんだ…」

「………」

「だから、例えば沙織が怒ったとしても…僕はこの気持ちを偽らない。これからだって、子供を第一に考えようと思う。」

「…でも…私は猛が一番だもん…」

「僕だってそうだよ。沙織を二番にするつもりなんて無い…寧ろ、今まで以上に愛を捧げるからね。覚悟してよ？」

膨らましてた頬に猛からチュッとされてしまい、私は何も言い返せなくなってしまう。

…むう…そこまで言うなら、信じてみようじゃないの…

猛の腕の中で体を半回転させ、私もさりげなく猛に手を回した。

そして俯いたまま、『わがまま言ってごめんなさい』…と小さく呟く。

聞き取れないぐらい小声で囁いたのに、猛はニツと笑って私の頭をくしゃくしゃ撫でてきた。

「や、やだ…一生懸命セツトしたのに、髪がボサボサになっちゃう…」

「アハハ！ わがまま姫へ、軽いオシオキだよ！」

「も、もう！ せっかく猛のためにキメたのに…！」

「…乱れた髪も色っぱいんだけどなあ…もったいないなあ…」

「な！？ ……そ、そうなの？」

「うん！ っていうか…愛してるよ、沙織。」

「ミヤツ！？！？…ふ、不意打ちは禁止…！！！！！」

アハハと笑ってたくせに、0.02秒で真顔に戻った猛に愛を囁かれたので…油断してた私の心臓は、不整脈を起こしている。（気がするだけ）

「ハア、ハア…最近、猛のせいで寿命が縮みっぱなしだわ…お腹の子にも悪い影響が出るかも…」

とか何とか言いながらも、嬉しさが込み上げてきて…ちゃっかり猛に唇を重ねる私であった。



「…あの、さ…一つだけお願いがあるんだけど、聞いてくれる？」

「な、何よ？ 『別りたい』とか言ったら、殺すわよ！？」

「そんなわけないって…ただ、正式な夫婦になる前にやりたいことがあるんだ。」

「？ 何をするの？」

「沙織に一度フラれたこの屋上を、今日で二人の思い出の場所にしたいと思ってさ…」

その言葉を聞いた瞬間、私は文字通り体が固まってしまふ。

………もしかして…猛はずっと、あの時のことを気にしてたの？…

それはかなり昔のようで…でも思い返せば、昨日の出来事のように鮮やかに蘇る情景。

一生懸命に告白してくれた猛を、平気な顔で私は拒絶していた。

結局は幸せな結末を迎えるから気付かなかったけど、猛からすればあの時の傲慢だった私が未だにちらつくのだろう。

…そういえばあの日から屋上に来ないし、話題にすら出なかったわよね……ってことは、猛はあれからずっと引きずってたの？…

「引きずってはないけど…ここに来てから、何か胸の奥にチラチラとあの時の映像が…」

「………それ、引きずってるって言うんだけど…」

「ア、アハハ… まあそれは置いて、どうする？ 僕の願いを叶えてくれるの？」

「ふふっ、バカ。二人の思い出を作るっていうのに、断るわけがないでしょ。で、何をするわけ？」

「あ、別に沙織はこれといってすること無いよ？ 僕が勝手に話すから、返事をくれるだけってことで。」

そう言つて猛は私から手を離し、3、4歩ぐらい後ろに下がった。

…なんだ… エッチなことされるかと思って、ちょっとドキドキしてたのに… 残念…

最近間違つた方向に進みつつある私の頭をよそに、猛は誰が見てもわかるぐらいに緊張していた。

その様子が本当にあの時の告白のようで、馬鹿なことばかり考へてる私も自然と息を飲み込んでいる。

ゆっくり見つめ合い、私が猛を促すようにコクンと首を傾げたら… 猛には似合わない、大きな声が飛んできた。

「僕は、あなたを愛してます！」

「！！！！」

「沙織を好きになれて、本当に良かった！！！！」

「… な、何よいきなり…」

「沙織のためなら死ねると言った言葉は、今日で取り消すよ！ 今



日から僕は、沙織とそのお腹にいる子供のために…何が何でも生きる！ 生き続けて、必ず守り通すから……！」

力いっぱいに込められた猛の想いが、言葉となり私の胸を染めてゆく。

照れ臭くてつい目を反らしそうになるが、真っすぐに見つめる猛から私が逃げちゃダメだ…と感じ、少し顔を赤くしながらも逃げずに見つめ返していた。

…猛は今、真剣に私と向き合ってるんだもの…私も最後まで受け止めなきゃね…

「僕は甲斐性無しだから、沙織に迷惑をかけるかも知れないけど…これだけは約束できる！ 僕は絶対、浮気はしない……！」

「…当たり前よ。この私の魅力で、悪い虫なんか寄せ付けないんだから……」

「子供が大きくなっても、そして僕たちが年老いても…沙織の隣は僕、僕の隣は沙織って関係でいたいんだ！」

「…今とあまり変わらないけど…幸せそうな未来ね……」

「だから沙織……！」

「………はい……」

…僕と結婚して下さい!!!…

…思えば、あの日が最初だった…

猛に告白され、否定したくせにやけに気になって……玲奈に相談した。

も言わなかった。

そして次の日から、猛の顔を見るたびに胸が痛みだす。

切なくて苦しんで…自分の胸からの声が頭で理解できなくなり猛を避け始めた時、やっと玲奈が教えてくれる…『仲野くんが好きなからね』…と。

意識し始めたら大変だった…何もかもが、猛中心になったから。

他の女子と話してる時にわざと割り込んだあと、緊張して話せずグダグダになったり…

猛が玲奈を褒めた時なんて、ムカついた私は親友を真剣にクビにしようかと考えたぐらいだ。

猛のせいで泣いて、猛のお陰で笑って…きっと私は、猛に出会うために産まれたんだと思う。

だからあの時と同じようにプロポーズしてくれた猛に対して、私の答えはすでに決まっている。

胸いっぱい空気を吸い込んで、その答えを空に響き渡らせた。

…この愛が永遠に続きますように、と願いながら…

第……話・『はい、喜んで！！』（後書き）

はい、作者です。

この作品、実は過去に書いた話を甘々ラブコメにアレンジしたのですが…元ネタがわからなくなるぐらい、流れが変わりました。（本当の話では、玲奈が2〜3人ボコボコにしてます…）

徹も活躍したんですが、甘い話に彼はいらなかったので…バツサリと存在をカットしました。何か可哀相です…

ちなみに、玲奈の成就した恋、沙織が自分の娘に嫉妬する話、沙織の子と玲奈の子が結ばれる…などなどエピソード的な話は山ほどありますが、納得のいく終わりにならなかったので気になる方はご想像にお任せします。

長々

と、そしてダラダラと、でも話はたんたんとお届けした《借金天国！？》…これにてお開きです。

私は凹みややすいので批評は柔らかくお願いします。では、最後までご覧下さった読者の方々…本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5113c/>

---

借金天国！？

2010年10月9日02時36分発行